

日本化粧品技術者会
東京支部

創立60周年記念誌

56年～
60年のあゆみ
(2003年～2007年)

目次

創立60周年記念誌の発刊にあたって	1
幹事長 松尾 透	
今後の技術者会発展に向けて	
魅力ある技術者会を目指して	3
SCCJ 会長 熊野 可丸	
更なる発展を祈念して	9
元幹事長 星崎 貞夫	
幹事長時代を振り返って	12
前幹事長 鈴木 正	
事務局雑感	15
前事務局長 室谷 勲	
【特別寄稿】	
この5年間の薬事法に係わる規制と化粧品業界	18
東京化粧品工業会技術部長 高野 勝弘	
過去5年間の化粧品関連の主要法令・通知	21
「化粧」のちから	23
早稲田大学人間科学学術院長 齋藤 美穂	
【特集】	
会員アンケート調査結果からみる会員意識	26
常議員プロジェクトチーム(TAC) 報告	
【本部関連活動】	
化粧品産業技術展(CITE)の開催を振り返って	36
東京支部 顧問 山口 道廣	
IFSCC大阪大会の記録	39
IFSCC大会の記録	40
ASCS 大会の記録	41
SCCJ優秀論文賞記録	42
【各部会活動の5年のあゆみ】	
学術講演会	学術部会A 43
研究会	学術部会B 47
技術見学会	渉外部会 50
化粧品技術基礎講習会	教育・研修部会 52
コスメ倶楽部の活動報告	56
エルダーズの活動報告	58
【資料】	
会議年表(議題項目)	62
永年会員表彰者	67
会員物故者	68
会員数の変遷	69
役員・幹事・常議員	71
組織図・委員	74
東京支部規約・細則	78
編集後記	86

東京支部5年間のあゆみ(概要)

幹事長		主な出来事	
2003年 (平成15年)	星崎 貞夫	(4月)	東京支部55周年記念誌発刊 2003年度支部総会
		(5月)	【本部活動】 第1回化粧品産業技術展(CITE)開催
2004年 (平成16年)	鈴木 正	(4月)	新会員制度(会員資格の改定) に伴う支部規約改定 2004年度支部総会
2005年 (平成17年)	鈴木 正	(6月)	【本部活動】 第2回化粧品産業技術展(CITE)開催
		(年度末)	東京支部会員1000名突破 1047名(会員増活動の成果)
2006年 (平成18年)	松尾 透	(8月～)	常議員プロジェクト(TAC)発足 (支部活動の見直しと活性化)
		(10月)	【本部活動】 IFSCC大阪大会開催
		(11月)	第20回記念「研究会」開催
2007年 (平成19年)	松尾 透	(4月)	本部・両支部間の規約の整合性、 本部規約改定に伴う支部規約改定 2007年度支部総会
		(5月)	【本部活動】 第3回化粧品産業技術展(CITE)開催
		(年間)	常議員プロジェクト(TAC)活動 会員意識調査とその対応策検討・実施

創立 60 周年記念誌の発刊にあたって



日本化粧品技術者会 東京支部
幹事長 松尾 透

日本化粧品技術者会東京支部の創立60周年にあたり、「56年～60年のあゆみ」記念誌を発刊できましたことを会員の皆様と共にお喜び申し上げます。

東京支部は1947年(昭和22年)10月に「東京化粧品技術者会」として設立され、発足当時の会員はわずか17社、28名であったとのことです。創立60周年を迎えた現在、会員会社480社、会員数1,060名の規模にまで発展致しました。これはひとえに関係諸先輩の皆様の熱心なご指導、ご努力のお陰と心より感謝致します。なお、東京支部全体の会員に占める女性会員の比率は13.1%で、準会員に占める比率は36.5%と年々高まってきています。男性会員だけでなく女性会員も増えることは大変喜ばしいことです。

また、規模の大きさだけでなく IFSCC(国際化粧品技術者会)においてオーランド大会(2004年)、大阪大会(2006年)での受賞により14大会連続受賞という実績が示すように技術レベルにおいても世界のトップクラスであることが証明されました。

東京支部の主な活動には「化粧品技術基礎講習会」、「学術講演会」、「技術見学会」、「研究会」、「コスメ倶楽部」、「エルダーズの会」等があります。これらは社会変化や時代変化および会員のニーズを考慮し、常により皆様の役に立つ有意義な活動であることを目指しています。また、日本化粧品技術者会全体の活動である「研究討論会」、「SCC」セミナー」の開催および「日本化粧品技術者会誌」の発刊への支援を行なっています。これらの活動を通じ日本の化粧品技術がより向上していくことを願っています。そしてこの技術は化粧品メーカーだけでなく、化粧品産業に関わる原料、香料、容器・包材、製造機械メーカー等の技術者の方々の協力によって高まっていきます。その活動の一つとして今年の5月に行なわれた第3回化粧品産業技術展(化粧品原料協会、近畿化粧品原料協会共催)があります。この産業技術展も回を重ねるごとに内容が充実し、今回は191社の出展、59セッションの技術発表が行なわれ、来場者数も10,500名を超える規模になりました。

現在、東京支部は会員も順調に増え、会の活動(企画・運営)は5つの部会を中心に円滑に進められています。この運営方法は田中幹事長時代の1997年度に「21世紀を考える」検討チームが答申した案に基づくものです。それ以来約10年が経過しましたので、この機会に活動や進め方を一度見直して課題や改善点が無いか検証してもらいました。若手常議員8名で「東京支部活性化検討チーム」(略称 TAC)を発足させ、2006年9月から2007年7月までの1年弱をかけて検証してもらった結果、幸い大きな問題はありませんでしたが、いくつかの改善点が答申された為、各部会で検討してもらっています。中でもホームページの充実に関しては具体的な検討に入って頂きました。今後も引き続き「若手会員が参加しやすい行事や活動」、「化粧品技術者育成の基礎となる化粧品技術基礎講習会カリキュラムの充実」、「準会員からシニア会員まで幅広い年代層へ対応した講演テーマ、見学会の企画」等を積極的に進め、多くの会員から支持され続けることが、会の益々の発展にとって重要なことだと思います。あわせて技術者会の社会的認知度が向上するような努力も地道に続けていく必要性を感じています。

日本化粧品技術者会東京支部の規約第2条に本会の目的として「化粧品及び関連の科学技術の進歩向上に貢献すると共に、会員相互の交流と啓発を図る為の事業を行い、内外化粧品産業の発展に寄与する」ということが掲げられています。創立以来60年という輝かしい歴史を持つこの化粧品技術者会は企業の枠を超えた技術者同士の有意義な情報交換、研鑽、交流の場であり、他の分野に無いきわめて魅力ある会であり、前述の目的が正に具現化されています。諸先輩が情熱を持って築き上げてきたこの素晴らしい会の伝統を継承しつつ時代や環境の変化を柔軟に取り入れ次の世代に引継いで行きたいと思っています。今後とも会員各位のご支援をよろしくお願い致します。

創立60周年記念誌発刊にあたり会の更なる発展と会員の皆様のご健勝をお祈りいたします。また、当誌の編集にご努力された編集委員の方々のご苦勞に対し心より御礼申し上げ発刊のご挨拶と致します。

今後の技術者会発展に向けて

—魅力ある技術者会をめざして—



日本化粧品技術者会
会長 熊野 可丸

1. はじめに

まずは東京支部の60周年記念誌の発行に対して、心よりお祝い申し上げます。60周年記念誌への執筆の依頼を受けたのはアムステルダム大会(2007年)の時であった。くしくも前回の55周年記念誌の時の依頼も第22回IFSCCエジンバラ大会(2002年)の最中であり、記念誌の執筆の機会とIFSCCのつながりが重なるのも不思議な縁である。

一言で60周年と言っても、人生にとっては還暦の年である。(最近は10年をプラスするくらいに考えなければならないが...)。一つのことが永く、充実した内容をもって継続されていることは喜ばしいことである。東京支部の今後の益々の発展を願っています。

表題に従って、この5年間の日本化粧品技術者会の活動を振り返りながら、今後の技術者会の発展に向けて様々な角度から経緯と抱負を述べたい。

2. 魅力ある技術者会を目指す新規事業活動

日本化粧品技術者会の諸活動は、東京支部、大阪支部の多くの皆様のボランティア活動によって支えられ継続されてきている。東西支部の統一後、従来の化粧品科学や技術に重点を置いたセミナーや討論会、勉強会などに加えて、化粧品産業の発展のため、今迄以上の魅力ある技術者会にする為にはどうしたらよいか？それが技術者会の大きな課題であった。その為、2002年に掲げた3つの活動方針のもと、4つの新規事業計画を打ち立てた。2003年以降の5年間はこれらの計画を具体化することにあつた。以下にそれらの諸活動について今後の期待も含めて触れる。

2.1 会員増加計画

まずは、技術者会の活動をより多くの人達に知って理解してもらい、参加してもらう為には会員数をもっと増やす必要があつた。当時本会のメンバーは約1250名(2002年)であり、フランス(約1400名)について世界第3位であつた。2006年の日本での第24回IFSCC大会

迄にフランスを上回るべく1500名の会員数を目標とした。

現行の会員規約を根本的に見直し、新会員制度導入を図るべく規約改定委員会を発足させた。若い研究者の構成比を高めること、退職後の会員を受入れるシステム、年会費などを中心に多くの時間を議論と案の作成に費やした。年会費を低減した場合の本会の継続的運営の可否まで追求し、様々な角度から改善策を2003年の総会に提案した。しかしながら、新制度の内容の一部に公平性を欠く面が指摘され保留となってしまった。再度検討し直し、同年11月の臨時総会にてようやく新制度が承認された。新会員制度は若い人達のための準会員制度、60歳以上の会員のためのシニア会員制度を特徴とし、正会員、名誉会員、顧問から成っている。この制度の見直しのお陰で2006年度末にはほぼ目標に近い1457名が、そして2007年6月末には1520名に達した。(フランスは2006年度末1498名)

会員増による本会の運営の規模も大きくなったが、まだまだ将来を担う若い人達の加入が少ないので、今後とも魅力的な改善が必要となろう。

2.2 化粧品事典の編集・出版

化粧品科学・技術の更なる理解と普及化を目指し、新たな化粧品事典を丸善出版と共同で計画した。同時に会員会社からの代表メンバーによる編集委員会を立ち上げた。

市場では同様な化粧品に関する書籍が数多く出版されているが、その多くは美容に関する一般図書であり、また技術書も化粧品技術者や専門家を対象とするものが多いことから、本事典は広く化粧品に関する内容を総合的に網羅した解り易い化粧品事典の完成を目指した。2003年秋、944ページにわたる化粧品事典(日本化粧品技術者会編)が完成出版された。

化粧品に関するすべての事項に関して、比較的平易に説明する「総論編」と化粧品科学に関する個々の言葉を解説する「各論編」の構成からなることが特徴である。編集にあたっては、化粧品研究の第一線で活躍されている約130名によって執筆されたものである。ここに業務多忙にもかかわらず本事典の企画、執筆、校正にご協力頂いた多くの方々に感謝を表したい。引き続き本事典が化粧品科学・技術の発展に役立つことを期待している。

2.3 化粧品産業技術展(CITE)

近代になって世界の化粧品市場の実績とIFSCCでの研究発表などから我が国の化粧品科学・技術は高く評価されてきている。一方、化粧品への効能・効果への期待が高まり、世界中のお客様が真に期待している化粧品の新しい価値創りも強く求められてきている。

これらの実現のために、共通のディスカッションの「場」の提供としてCITEが立ち上がった。化粧品原料協会と近畿化粧品原料協会及び日本化粧品工業連合会、(財)日本粧業会などの後援を得て、2003年5月に第1回「CITE」JAPANがスタートした。

その後第2回以降の開催については、「将来へ向け、日本発の新価値情報をCITEから発信していこう」ということが化粧品原料協会、松本会長と私の間で交わされた会話もあり、2年毎に開催され、第2回(2005年6月)、第3回(2007年5月)がいずれもパシフィコ横浜会場で

開催された。回を重ねるにつれ、出展者や参加者が増え、有益な情報交換の「場」として今や定番化され、化粧品技術者会の活動には欠かせない行事の一つとなった。2009年にはアジア化粧品技術発表会(第9回 ASCS)と同時併設され、グローバルな内容を盛り込んだ企画が準備されている。今後は、化粧品技術の Open Innovation 時代の到来と共に、本産業技術展の果たす役割は大きくなることが予測されるので、内容の充実化やグローバル化、運営方法など両者による一層の工夫が必要となろう。

2.4 IFSCC 関連

2.4.1 第24回 IFSCC 2006 大阪大会

日本で IFSCC 大会が開催されるのは 1968 年(東京・京都)、1992 年(横浜)で 3 回目となる。横浜大会以来 14 年ぶりということで、大会 6 年前から組織委員会を立ち上げ、会場の決定、大会コンセプトなど準備してきた。お陰様で大阪大会が成功裡に終えることが出来たこと、参加者数が過去最大の 2000 名を超えたこと、海外先からの参加者に大きな印象と感動を持って頂いたこと、大阪人のホスピタリティが最高であったこと、私にとっても IFSCC 会長に新しく就任したことなど、一つひとつとっても非常に感動的な大会であった。多くの方々の協力無しには出来なかったことに感謝の気持ちで一杯です。ここに改めて御礼申し上げたい。

大会を通じて多くの印象と感想のある中で、私が一番に感じたことは参加した会員会社のトップの方々や各界のリーダーの方々に技術者会の活動の一面を十分に認知して頂いたことであった。本会の諸活動の中で広報活動が幾何に大切であることを示す良い例であった。

次の日本の開催はいつ?とよく問われる質問がある。大阪大会を契機に新しい IFSCC イベントの開催ルールが世界の参加国間で熱く議論されてきて、2007 年オランダ大会で一つの結論を得た。以下に新ルール承認までの経緯と結果をまとめる。

2.4.2 今後の IFSCC 大会(Congress/ Conference) 開催の新ルール

i) 背景

2006 年の大阪大会での理事会及び Council Meeting で今後の IFSCC Congress は常任理事国(6ヶ国)のみに開催できる内容が提案され、その詳細を次年度オランダ大会までに検討することが賛成多数で可決された。しかしながら、その後イタリアを始め 6ヶ国から本案に反対や異議が出された。私は IFSCC 会長として、これらは多くの IFSCC 加盟国が Congress を開催したいという高い意欲と IFSCC 全体の活性化の現れの証として評価し、大阪大会での提案を一旦白紙に戻し、現ルール(2002 年エジンバラ大会承認)に立ち戻り、これを原点として現実的で、将来の IFSCC の発展に芳しい新しいルールを新提案した。現行ルールは IFSCC イベントの開催サイクルは 3 つのゾーンのメンバー総数比(ゾーン I :ゾーン II :ゾーン III = 4 : 2 : 3)で開催され、Congress は科学的貢献度(過去 6 回の研究発表数) TOP10 位迄、Conference は同じく TOP20 位までが権利を有するとなっている。しかし、全く現ルールは守られておらず、その根拠となっている各ゾーン毎のメンバー総数比も既に 2006 年には変化している(3 : 2 : 3)。

そこで、このような変動の多い、メンバー総数(経済的貢献度でもある)と科学的貢献度のそれぞれ一面的な尺度による決定方法を見直し、算定根拠がリーズナブルな新ルールを提案した。

ii) 新ルールの提案と承認

ご存知の如く、最近の Congress や Conference は規模も大きくなり、参加人数と研究発表数も増加してきており、開催国の推進責任は益々重くなってきている。開催に伴っては、経済的な裏付けと応募された全研究論文を査読する化粧品技術と評価力の両面が求められてきている。このような現況から最近のデータに基づき、新ルールを構築した。即ち今後の IFSCC イベントは各ゾーン毎のメンバー総数と科学的貢献度の2つの総和による総合評価順位に基付いて割り振られることが妥当と判断し、新ルールとしてオランダ大会での理事会及び Council Meeting に提案し、満場一致で承認を得た。

その内容は①2013年以降の IFSCC イベントは新ゾーン比(I:II:III=2:1:1)とし、8年サイクルとする。②Congressの開催権は経済的貢献度+科学的貢献度の総合順位TOP12位迄、Conferenceは同じく、TOP20位に権利を与える。③理事会メンバー構成も同じく、ゾーン比(2:1:1)に準じてゾーンIのメンバーを2名増やし、14名(現12名)体制とする。従って、日本での次の開催はIFSCC理事会の承認を必要とするがConferenceの場合は2017年、Congressは2028年の見込みとなる。

2.5 第9回 ASCS 横浜大会と第4回 CITE

2009年3月2日～4日、パシフィコ横浜会議センターにて、第9回 ASCS が日本が主催国として開催される。既に本大会の組織委員会を立ち上げ、「Novel Voyage for Asian Cosmetology」の大会テーマのもと、準備が進められている。本大会が開催される2009年にはちょうど150年前、日本が鎖国から目を覚まし、海外との交易を再開するために横浜が貿易港として開港した記念の年でもある。本大会を150年前の歴史に学び、アジア化粧品技術の向上とアジア化粧品産業の更なる飛躍のための第一歩としたいと考え、この想いを本大会のテーマとした。

また、続く3月4日～6日には同所の展示会場にて第4回 CITE が併設開催される。キーワードは「Global Innovation through CITE (SITE)」のもと組織委員会も既に活動している。日本化粧品技術者会は2つの行事が世界中の化粧品技術者、特にアジア各国からの技術者が横浜に一同参集し、最新の化粧品技術に関する熱い議論の「場」となることを望んでいる。多くの参加者が募ることを期待したい。

3. 今後の日本化粧品技術者会の活動について

これまで5年間の技術者会の活動は、2006年 IFSCC 大阪大会の開催を最大の目標として掲げ活動し続けてきた。大会終了後、向こう10年間に技術者会の更なる発展のためには何を目標にして活動すべきか、組織体制や運営方法を含め議論すべく、2006年に中期活

動戦略構築のための委員会の設立を総会に提案し承認された。その結果、将来の課題として3つに集約された。

一つは運営の効率化である。本会が多くの会員のボランティア活動により成り立っていることより、各支部の独自性を尊重しながら如何に無駄を省き、会員の負担を軽減し、効率化を高めていくかである。その中で本部・支部の総会の同時開催が2008年4月に実現する。この体験から今後の総会の在り方を議論し、改善を加えていきたい。

また、ここ2~3年、年2回春・秋の研究討論会の研究発表数や参加者の減少という事態が持ち上がってきている。活性化のための内容の見直しと共に、セミナーなどと統合し、複数日開催として集中化するのも一工夫と考えられる。

第二は本会の活動の認知の更なる向上である。IFSCC 大阪大会での経験を活かし、広報活動の活性化により、関連業会、団体、学会との連携を図り、一つひとつの活動を広く一般的に知らしめることである。

現在、その有力な広報ツールとしてホームページの充実化を目指した改定が進められている。本会の特徴や規約などの他、年間の活動をもっと積極的に掲載し、会員及び会員以外の人達への情報提供が入会、参加者増に結びつくことが期待される。また化粧品工業連合会からの要請を受けて開催した第1回「化粧品の機能と効果を理解する集い」(2007年5月開催)のフォローも粧工連の方向性の確認と密接な連携のもと、このようなITツールの活用を考えた継続的な調査活動が必要となろう。

第三は、真の学会としての認知と質の向上である。本会が学会として正式に認知されていないことが研究討論会での発表数や機関誌への投稿論文数の減少の原因の一つとしてあげている声も少なくない。本会が正式に学会として称号付与を得られるよう、日本学術会議協力学術研究団体への申請を継続して進めていきたい。

4. 東京支部に期待すること

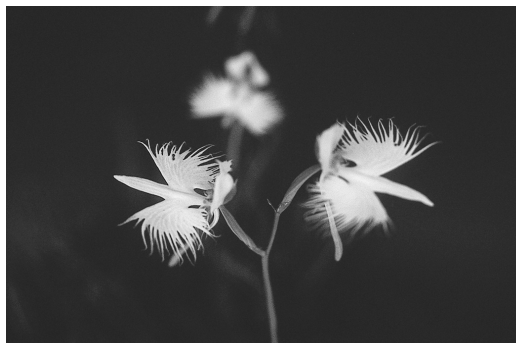
5年毎にそれまでの活動を総括する記念誌の発行を継続していく活動に対して、心より敬意を払いたい。2007年度日本化粧品技術者会の会員数の約2/3を占める(1056人)東京支部の諸活動は、本部の活動への影響に大なるものがある。例えば、毎年各部活動に工夫が施され改善されていること、時代を担う若手研究員の育成をサポートする為に始めたコスメ倶楽部の継続的な活動と支援、そしてまた昨年度から松尾幹事長の下、常議員プロジェクト(TAC)が発足され、支部活動の更なる活性化のための多くの提案がなされているなどなど。今後はこのような諸活動の経験とメリットを支部内だけに留めず、本部全体が課題としている効率経営と結びつけていくことで、更なる全体の活性化となることを望んでいる。

5. 終わりに

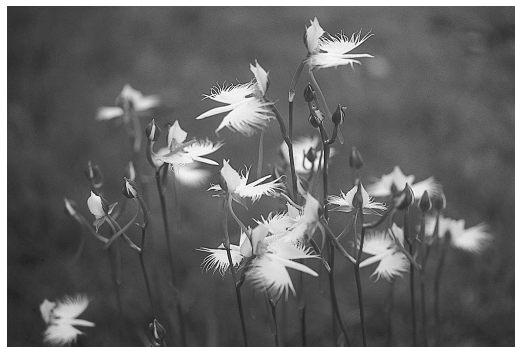
ここ5年間の日本化粧品技術者会の諸活動と今後に向けての課題について様々な角度から触れてきた。今後1~2年を見ても、内外の多くの大事なイベントの開催に向けて、皆様方の協力のもとで力強く進んでいる。これらを一つひとつ成功させることが大切であるが、こ

これらの諸活動を通じて今後の課題の項で述べてきたように、本会の効率的な運営と認知力の向上のための広報活動の大切さを念頭に入れて、更なる魅力的な技術者会を築いていきたい。会員の皆様に今後共一層のご理解とご協力をお願い致します。

最後にこの 60 周年記念誌が東京支部の益々の活性化につながることを願うと同時に、多くの皆様方が活用されることを期待します。



サギソウ
(鷺草)



サギソウ
(鷺草)

更なる発展を祈念して



日本化粧品技術者会 東京支部
元幹事長 星崎 貞夫

東京化粧品技術者会も60周年を迎えたとのこと、本当におめでとうございます。現在、東京支部の会員も1,000名を超えると聞いています。これも如何に技術者会を魅力ある会に育て、運営してきたかの証です。諸先輩方、現役員の皆さま方、会員の皆さま方と共に喜び合いたいと思います。

私が幹事長を勤めさせて頂いたのは、2002年(平成14年)4月～2004年(平成16年)3月の2年間ですが、その間、平成15年には55周年記念誌を発行しております。

その記念誌で田中元幹事長が述べていますように、会の組織運営体制の整備、財政的基盤の確立、六本木・事務所の開設、また若手らによる自主企画である研究会、コスメ倶楽部など新規事業推進など多くのことを成し遂げられ、本当に歴史的な節目の時期だったと思います。後任の故大谷幹事長はこれらを更に安定したものに仕上げ私にバトンタッチされたわけです。

お陰さまで、技術者会執行部の経験が殆どない私でも何とか無事に勤められたと思います。さらに言えば、大きな問題も起きずスムーズに運営できたのは事務局の室谷さんの緻密な事務能力と、六本木・事務所の化成品会館の存在に負うところが大きかったと思います。事務局を化成品会館に移して SCCJ 支部が自立した経緯など先輩諸氏からお聞きしておりましたが、本当に良い所が見つかったものだとつくづく思います。今後のことを思うと少し心配な面もありますが……。

印象に残っている事

こうしたわけで当時、三役会、部会制を中心とした運営は見事に機能しておりましたが、強いて言えば、縦割り組織による運営の色彩が少し強いのではないか？このままでは各部会間のコミュニケーションが欠けてしまうのではないか？と感じました。

そこで、少しでも横糸を通すことが出来ればと考え、幹事・常議員合同役員会を外部の施設に宿泊して開催しました。幹事、常議員総勢45名程が一同に集まり、4班に分かれて「更

なる会の活性化について」「会員増のための具体的対策は？」など、言わば永遠の課題について討議し各班長が纏めて発表する。また、夜は一杯飲みながら、それぞれ胸襟をひらいて様々なことを話し合ったことなど、その風景は今でも大変印象に残っています。執行部へ入ってこられる方々はこんな活動を通じて益々技術者会を好きになり、その気持ちが伝播していくのだと思ったものです。

また当時の2年間だけを振り返っても、IFSCC、SCCJ、そして支部を取り巻く環境は本当に激動していたことを思い出します。先ずIFSCC大阪大会を目前に控えて支部独自の事業を推進しながら、大阪大会を成功に導くのは東京支部会員各社の理解と支援がキーになると、そのため本部と一体となって教宣活動がありました。又、そんな中での第1回化粧品産業技術展が横浜パシフィコで開催されるという時でした。いずれも本部主催の行事ですが支部として全面的、且つ全力で支援していこうと機会あるごとに話し合ったことを思い出します。両行事とも成功裡に終わってホッとしたと同時に、改めて会員皆さんを初め関係者の関心の深さに驚きを覚えたものです。

こんな長い歴史と実績をもつ技術者会でも、残念なことに業界内でその活動がよく理解されているとは思えないことである。今ではホームページを初め様々の媒体で情報発信できますが自ずと限界があります。やはり会員一人ひとりが各行事に参加し肌で感じたことを周りに、そして会社の中に生の声で伝えていくことが一番効果的です。それが会員数を増やす近道でもありましょう。また化粧品産業技術展などはSCCJの認知度をあげる格好の行事でしょう、SCCJ広報の工夫、強化策なども今後期待するところです。

更なる発展と要望

私個人としては技術者会に初めて参加したのは当時発明会館で開催されていた化粧品研究討論会であったと記憶している。

その後、時間が許す限り技術者会が主催する行事には参加してきましたが、本当に沢山の“事”を学ばせて頂いた。若い頃に、この業界に、この会があったことが業界のみならず、会社への帰属意識さえ高まったことを覚えている。会員、非会員問わずいろいろな行事に参加し、他社の方々との交流を通じて自分自身を高め、成長していけるものと信じています。この業界に入った若い社員が最初に業界の動きや、最先端の研究に直に触れるのは恐らく討論会や研究会でしょう。化粧品の“モノづくり”に直接、間接にかかわっている様々な人達は、技術者会に何を求めているのか？常にそのニーズを探り、柔軟に対応しなければなりません。その為、執行部の皆さんにはアンテナを常に高くしておいていただきたいと思えます。

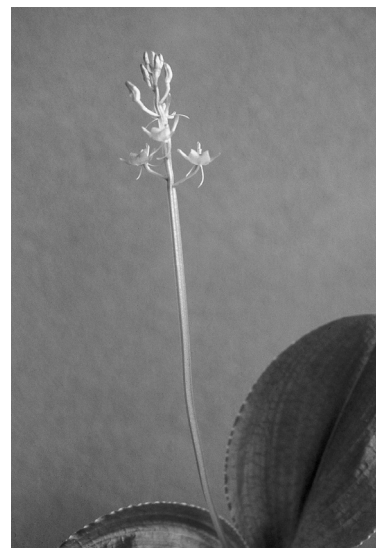
そんな中、若い方々が自発的に発生させたとされる支部独自のコスメ倶楽部、研究会の活動は頼もしい。技術者会もまた弛まざる変革、進化していかなければならないと思えます。安定は衰退につながると言われます。技術者会とて然りでしょう。今後とも、いわゆる不易流行的な精神性が必要でしょう。

さて、5年毎に発行する記念誌こそ東京支部の有形の宝、財産です。温故知新「過去を訪ねて指針を得る」と言われます。過去はこうして記録が残され、容易に訪ねられる。では未来を訪ねるにはどうしたらよいか、ノーベル物理学賞の江崎玲央奈氏は「未来を訪ねる唯一の手段はサイエンスである」と。そこで技術者・研究者が一番関心をもっている課題が、いずれ解決され、商品に生かされて市場に出て行く。まさに技術者会の中では未来が語られ議論されていると考えられましょう。

それにも増してコスメ倶楽部、研究会、交流会エルダーズの活発な活動は技術者会の存在を象徴するものでしょう。老若男女みんながこの技術者会を愛し、そして支えあって益々発展、進化していくことを祈って止まない。



スズムシソウ
(鈴虫草)



クモキリソウ
(雲切草)

幹事長時代を振り返って



日本化粧品技術者会 東京支部
前幹事長 鈴木 正

東京支部が60周年を迎えられたことを心よりお喜び申し上げます。1997年に有楽町の東京国際フォーラムで50周年の記念式典を行ってから、早いものでもう10年が経ってしまったのかというのが率直な気持ちです。わたくしは、2004年の4月から2006年の3月までの2年間、本支部の幹事長を仰せつかり、7名の相談役・11名の顧問をはじめとし、幹事・常議員皆様のご協力のもと、本支部の発展のために微力ながら務めさせていただきました。

この5年間を振り返りますと、日本化粧品技術者会においては、二つの大きなイベントが行われました。一昨年は1992年以来の日本での開催となった第24回IFSCC大阪大会が、2003年には化粧品産業技術展がスタートし、昨年無事に3回目を終えました。

わたくしの幹事長は、本支部の幹事長職をカネボウ(現在のカネボウ化粧品)・ポーラ化成工業・コーセーの代表により持ち回りで担当し、支部の運営にあたらうと1999年に動き出してから3代目であり、戦後1949年に幹事長職制度を設けて資生堂の小山常正氏が本職に付かれてから10代目にあたるそうです。

さて、幹事長時代の2年間には本支部として幾つかの大きな課題がありました。

- ① 学会事務センターの破産にともなう事後処理の継続(予算への影響)
- ② 2003年度の支部制度、会員制度の見直しに基づいた会の運営
- ③ 日本化粧品技術者会(SCCJ)の活動への協力
 - ・ 2005年6月15日～17日に開催された第2回化粧品産業技術展
 - ・ 2006年10月16日～19日に開催された第24回IFSCC大阪大会
- ④ 室谷事務局長の後任に関する問題

このような、課題を抱えながら支部としての5つの柱(「総会運営」・「学術講演会」・「研究会」・「技術見学会」・「基礎講習会」)について、事業を運営してまいりました。

これらの事業を運営するうえで、一番重要なことはそれら活動を支える資金ですが、先にも述べましたように、学会事務センターの破産にともない平成 16 年度の会費収入が大幅減になったことは大きな痛手ではありました。しかし、一方では救いの神も現れました。それは、日本化粧品技術者会の熊野会長が、技術者会の将来の発展と 2006 年度に大阪で開催される IFSCC 大会を視野に入れて、会員数を増やすために「会員資格の見直し」に着手されたことが、私の幹事長時代に実効果として現れ、会員数が増えそれにともない色々な事業の企画に参加される人も増え、その収入増が学会事務センターの影響を最小限に食い止めることにつながりました。

個々の事業に目を移しますと、化粧品技術基礎講習会では、わたくしの幹事長 2 年目に若い人に向けて、大先輩である研究者から“化粧品開発とはどうあるべきなのか”、心構えや視点の持ち方など幅広い観点で、お話をさせていただき講義を取り入れさせていただきました。第 1 回目は株式会社コーセーの元研究本部長：宿崎幸一氏に「化粧品開発総論」という題名でお願いしました。この企画は若い人に大先輩のお話が新鮮に写り好評で、それ以後も続けられています。また、一時期業界において新入社員の採用が各社低迷し、この化粧品技術基礎講習会の参加者にも、少なからず影響が出るのではないかと心配しておりましたが、委員の方々が内容の見直しを行い、聴講者層の拡大に知恵を絞ってくださった結果、参加者数も毎年増えました。このことは数字にもはっきりと現れています。平成 16 年度の参加者を見ますと約 1 割の方が 40 歳以上の方となり、業界各社がこの講習会に期待されているところに変化が現れて来ていることが伺えます。

さらに、技術見学会におきましては若手の参画を促すということで、若手の会員が参画しやすい見学先の選定に渉外部会の方には知恵を絞っていただきました。しかし、一方では、この技術見学会は本支部の活動の中で総会と並び、60 代以降のエルダーズ会員の方が参画できる事業で、会員が平等に支部の活動から恩恵を授からなければいけないという考え方から、この年代層の会員の皆様に楽しんで参加していただける企画もバランス良く検討していただきました。

また、若い方にも出来るだけ技術者会に興味を持って参画していただくということで、1999 年 12 月に参加者の自主運営でスタートした「コスメ倶楽部」も、9 年目に入り活発な活動が続けられていると聞いております。そして、「エルダーズ」・「コスメ倶楽部」の活動の活発化により、ベテランと若手のバランスがうまくとれ、将来への明るさが見えてきているのではないのでしょうか。

さて現在、日本化粧品技術者会のホームページ改訂に向けて検討が進められていると聞いておりますが、会員へのアナウンスの重要性や情報交換の活性化が会の発展を後押しすることは疑いもなく、幹事長時代にこの課題に取り組みたいと思っていたのですが、結局実

現せず、是非現在検討を行われている日本化粧品技術者会の広報委員会の皆様をお願いするところでありますし、進化したホームページを拝見するのを楽しみにしております。

最後に本誌面をお借りして、私の幹事長時代を支えてくださった会員をはじめとする多くの皆様に感謝のお礼を申し上げさせていただきます。また本支部の活動が新たに 70 周年を目指し、役員ならびに会員皆様の努力により、今後も活発に行われることを期待するとともに、支部の発展ならびに業界が益々繁栄しますように心よりお祈りいたします。



フウラン
(風蘭)

事務局雑感



日本化粧品技術者会 東京支部
前事務局長 室谷 勲

2003年4月に日本化粧品技術者会東京支部の55周年記念誌が発刊されましたが、それから早くも5年間が経ち今年60周年を迎えます。時の流れの速さを実感するこの頃です。この間、東京支部の会員数は順調に増加し、各催し物の参加者数も年々増加し活況を呈しています。私の事務局任務は昨年3月で終わっていますが、事務局の立場から東京支部の主な活動や出来事を振り返ってみたいと思います。

1. 六本木事務所の効用

55周年記念誌に元事務局長の渡邊英明氏が「事務局の独立」と題して、東京化粧品技術者会時代からの事務局の変遷を詳細に書かれています。1996年7月に現在の六本木5丁目の化成品会館に事務所が移転したことが更なる会の発展、活性化の契機になったと思います。化成品会館には化成品工業協会、日本プラスチック工業連盟、カーボンブラック協会などの化学品関係の団体をはじめ化粧品関係としては日本輸入化粧品協会と当会の事務所が入っており、また、会館内に3つの会議室があり予約制ではありますが自由に使用できます。この会議室は会議をはじめ、100名前後の人数であれば講演会などにも使用できますので、当会としては役員会、幹事会、幹事&常議員合同会議、各部会、講演会、研究会などに数多く使用しています。したがって、都心の利便性と、費用対効果の大きな会議室が活用できるという点で六本木事務所は東京支部の活動拠点として非常に有効であると言えます。

2. 東京支部会員数1000名の大台に

1947年の東京化粧品技術者会設立当時に28名であった会員数が2006年3月に1047名になり念願の1000名の大台を超えました。この間、常に右肩上がりが増えてきましたが、この主な要因としては、化粧品業界の拡大に伴い関連企業が増加する中で、幹事・常議員を始め会員の方々の口コミ(技術者会入会への勧誘、紹介)により化粧品技術者会の活動が認知されてきた結果かと思えます。また、最近では、2003年11月に新会員制度(従来正

会員のみであったが、これを正会員、準会員、シニア会員、名誉会員の4区分とし、準会員、シニア会員の年会費を半額にし、併せて権利の層別が行われた)が提案されたことで、会員増は加速されました。この制度により、東京支部会員1047名(2006年3月)の会員構成は、正会員896名、準会員55名、シニア会員78名、名誉会員18名になっています。特にシニア会員は今後も増えると思われ、会社を退職しても個人の立場で技術者会の会員を継続することによって技術者個人同士の良いコミュニケーションが可能になると思われます。この具体的な受け皿として前述のエルダーズ活動は有効と思われれます。

このような会員数の増加は会の活性化につながり喜ぶべきことですが、事務局の立場から見ますと、会員の入会や退会の手続き、会費徴収、催し物の開催案内の資料発送などの業務が年々増え続けることとなります。特に、悩みは会員の交代が非常に多く、かつ交代の期間が短くなってきていますので毎年延べ200名ぐらいの方の入・退会手続きが必要で、会員名簿管理の面で煩雑にならざるを得ない点があります。ただし、これだけ出入りが多いということは、短期間でも技術者会の活動を体感する方が年々増えることでもありメリットとしても考えられます。

3. 継続は力—事業活動—

東京支部事業活動の核は下記のものですが、初回開催からこれまでに着実に実績を重ねています。

- 学術講演会(246回) ○技術見学会(141回) ○化粧品技術基礎講習会(39回)
- 研究会(22回) ○総会(60回)

この他にも、上記研究会に参加した若手技術者有志により自主企画&運営が行われるコスメ倶楽部活動、およびシニア会員有志によるエルダーズ活動(講演会・交流会など)がありますので、幅広い年代に対応した活動が活発に行われています。各活動の詳細は、本誌の記事をご覧くださいと思いますが、このように永年に渡り継続していくためにはその企画内容や運営方法を常に見直し、創意・工夫していくことが必要です。

これらの活動の主体は東京支部の幹事・常議員による5つの部会(1部会で8名前後)で各担当事業の企画検討と共に開催日当日には運営スタッフとしても種々の役割を担っています。これらの実務的な部会と共に東京支部全体の運営を種々検討する三役会(幹事長、副幹事長、会計幹事)や幹事会が車の両輪になっています。このように約50名の幹事・常議員をはじめエルダーズやコスメ倶楽部の世話人の皆さまのボランティア活動が東京支部の活動を支え、日本化粧品技術者会全体の発展の原動力になっています。

4. 終わりに

日本化粧品技術者会の最近の特記事項として、2006年のIFSCC大阪大会や第2回化粧品産業技術展の開催がありました。本部を中心に東西支部の役員・幹事・常議員、委員、事務局の総力でそれぞれ見事に成功裏に終え、あらためて技術者会の力が示されたので

はないかと思えます。

一方、日本化粧品技術者会にとってショッキングな事件がありました。2004年の日本学会事務センターの突然の破産です。この2年前から会費徴収業務を委託していましたので多額の損失を受け会の財政への影響が心配されましたが、幸いその後の会員数の増加や、事務経費の節減、他の事業の収入増などで短期間の繰越金減少で納まり活動への支障は特にありませんでしたが、破産というものの怖さを痛感した出来事でした。

この他にも前述の会員制度の規約改正など、本部、東京支部、大阪支部が一体となって取り組まねばならない横断型の課題が多くありましたので、これらを通じてこれまで以上に本部・東西支部の協力体制や密度の濃い交流が為されたように思います。

8年余り東京支部の事務局を務めさせていただきましたが、退任した今、懐かしく、また楽しい思い出で一杯です。本部&支部役員、幹事、常議員の皆さま、本部・大阪支部事務局の皆さまには、長い間大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



エビネ
(海老根)



エビネ
(海老根)

【特別寄稿】 この5年間の薬事法に係わる規制と化粧品業界



東京化粧品工業会
技術部長 高野 勝弘

21世紀を迎えた2001年(平成13年)の日本化粧品工業連合会(粧工連)傘下の正会員の企業数は約700社であった。それが、2007年(平成19年)には、正会員の企業数が約940社となり、1000社に迫る勢いで増加している状況である。

もちろん、化粧品の製造業者の数をみても、2005年には1960社となり、2001年との比較で200社以上増加している

その一方で、化粧品の工場出荷金額は、ここ5年間、1兆5000億円を挟んでの攻防が続いておりほぼ横ばいの状態である。

正会員の企業数の増加は、2001年(平成13年)4月から実施されたいわゆる化粧品の規制緩和によって、化粧品業界への参入業者が増加したこと及び企業自らが情報収集を行う必要性が大きく増したことが大きな要因と考えているが、2005年(平成17年)4月から本格的に施行された薬事法改正により製造業者のほかに製造販売業者という制度が設けられ、またGQP及びGVPがその製造販売業者に課せられることになったことも増加の要因になっているものと考えている。

化粧品の出荷金額は、もちろんさらに大きく飛躍する可能性はあるものの、日本の総人口が頭打ちあるいは減少傾向にあることを踏まえれば、現在のような状況がしばらくは続きそうであり、日本市場における激戦が避けられないと考えるのが大勢であろう。

粧工連では、2006年(平成18年)11月に「東アジアの化粧品規制 ―中国を中心に韓国及び台湾の化粧品規制の概要」と題する説明会を開催したが、約550名の方が参加された。引続き2007年(平成19年)12月には、「ASEAN化粧品規制に関する説明会」を開催したところ、約470名の方が参加された。

明らかに業界の方々が、国内の状況を考慮し、アジア市場を意識されていることは、この例一つをとっても明白であろう。

薬事法によって規制されている化粧品は、医薬品、医薬部外品、そして医療機器と常に同じ方向を向かなければならないが、やはり実際の規制においてはその作用や使用目的の違いからこれら4つのカテゴリーにおいて厳しさに差があることも事実であり、これらの中では厳しくないところに位置する化粧品は、他のカテゴリー以上に企業の自己責任に追う部分が大きい、と考えるべきであろう。

2005年(平成17年)4月施行の薬事法改正により、従来は化粧品を製造(輸入販売)することの責任及び市場に出荷することの責任を共に課せられる者が「化粧品製造業者(化粧品輸入販売業者)」であったのが、その責任が分割され、化粧品を製造(輸入)することの責任を持つ者が「化粧品製造業者」(輸入販売業者という制度は廃止された)、市場に出荷することの責任をもつ者が、「化粧品製造販売業者」となり、市場に流通する化粧品に対する第一義的な責任は「化粧品製造販売業者」に課せられる制度となった。

この薬事法改正の際に、化粧品への「発売元」の表示が可能かどうかということが大きな問題となったが、最終的には従前と同様に表示可能となった。

責任の所在を明確にすることが、この薬事法改正の大きな狙いであったと思われるが、この点については曖昧さを残す決着となった。

一方、「化粧品製造販売業者」には、GQP及びGVPの対応が求められることになり、企業の負担は増加した。ただし、この負担の増加は、特に食品業界におけるさまざまな事例を目の辺りにするとき、これを規制の強化と指摘することさえはばかられる時代となってきた。規制であろうがなかろうが、企業としての社会的責任を的確に果たさなければならない時代となった。

海外に目を転じてみると、ASEAN諸国では、2008年(平成20年)1月から、化粧品規制が大きく変わり、日本以上にEU型の規制に大きく近づくことになる。

そのEUでは、開封後の使用期限表示、動物実験の段階的禁止、サンスクリーン製品の表示等々とにかく規制の最先端に近いところを進み続けている。

それに対して米国では、化粧品の安全性等に関する様々な議論がなされてはいるが、化粧品規制自体は基本的に大きな変化がなく推移している、との表現でとどまる動きである。

また、1998年に設立されたISO TC217においても微生物に関する試験法をはじめとして国際規格(International Standard)が次々と作成・発行されているが、本年11月に化粧品GMPが、ISO22716として発行された。

粧工連では、化粧品GMPに関しては、従来の自主基準を廃止し、このISO22716を新たな自主基準として取り入れる。

国によって、法規制として運用するか、あるいは自主基準として運用するかは別にしても、

このISO22716がいわゆるデファクトスタンダードとして国際的に機能していくものと思われる。そして、今後ISO TC217で作成される国際規格の中には、デファクトスタンダードとして機能するものが増加していくものと考えられるが、当面注目されているのはSPF及びUV A測定法であり、数年先にはISOの測定法として誕生することになる。

薬事法に基づく日本の化粧品規制は、昭和50年代においては世界でも最も厳しい規制の部類に位置していたはずであるが、現在ではそうではなくなってしまったようだ。

むしろ、薬事法という規制の在り方だけではなく、化粧品の製造業者としてあるいは製造販売業者としてどうあるべきかということを十分自覚していく必要がある。アジアをはじめとする海外への進出を考える際にも当然最優先に考えることであろう。もちろん、上記で述べたような海外の動向に十分留意しながらこれを進める必要があることは言うまでもない。

世界一とも目される日本の化粧品の製造技術が、世界で大きく羽ばたくことを念じながら、今後も皆様のより一層のご研鑽に対して何らかのお手伝いをする事ができれば幸いである。



オサラン
(箴蘭)

過去5年間の化粧品関連の主要法令・通知

- ウシ等由来物及び人由来物を原料として製造される医薬品、医療用具等の品質及び安全性確保の強化について
平成 15 年 4 月 14 日(医薬発第 0414004 号)
厚生労働省医薬局長通知
- 薬事法施行規則の一部改正等に伴う事務取扱い等について
平成 15 年 5 月 20 日(／医薬審発第 0520001 号／医薬安発第 0520001 号
／医薬監麻発第 0520001 号／医薬血発第 0520001 号)
医薬局審査管理課長・安全対策課長・監視指導・
麻薬対策課長・血液対策課長通知
- 生物由来製品及び特定生物由来製品の指定並びに生物由来原料基準の制定等について
平成 15 年 5 月 20 日(医薬発第 0520001 号)
厚生労働省医薬局長通知
- カナダ産のウシ等由来物を原材料として製造される医薬品、医療用具等の品質及び安全性確保について
平成 15 年 5 月 22 日(医薬発第 0522002 号)
厚生労働省医薬局長通知
- カナダ産ウシ等由来原材料を使用して製造される医薬品、医療用具等の品質及び安全性確保に係る承認申請等の取扱いについて
平成 15 年 6 月 5 日(医薬審発第 0605001 号)
厚生労働省医薬局審査管理課長通知
- カナダ産のウシ等由来物を原材料として製造される医薬品、医療用具等の品質及び安全性確保等についての Q&A について
平成 15 年 8 月 1 日(事務連絡)
厚生労働省医薬食品局審査管理課通知
- ウシ等由来原材料を使用した医薬品、医療用具等の一部変更承認申請等におけるリスク評価等の取扱いについて
平成 15 年 8 月 1 日(／薬食審査発第 0801001 号／
薬食安発第 0801001 号／)
厚生労働省医薬食品局審査管理課長・
厚生労働省医薬食品局安全対策課長通知
- 漢方・生薬(原薬)等の GMP 等監視指導の徹底について
平成 15 年 10 月 7 日(薬食監麻発第 1007001 号)
厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課長通知
- 化粧品への配合を希望する医薬品の成分の取扱いについて(依頼)
平成 16 年 3 月 25 日(薬食審査発第 0325019 号)
厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知
- 化粧品に配合可能な医薬品の成分について(確認依頼)
平成 16 年 3 月 25 日(薬食審査発第 0325022 号)
厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知
- 一般用医薬品のうち医薬部外品へ移行する品目の確認等について
平成 16 年 4 月 12 日(薬食審査発第 0412010 号)
厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知
- 生物由来原料基準の一部改正について
平成 16 年 7 月 5 日(薬食発第 0705001 号) 厚生労働省医薬食品局長通知
- 生物由来原料基準の一部改正に伴う米国産のウシ等由来物及びウシ等のせき柱骨等を原材料として製造される医薬品、医療用具等の品質及び安全性確保に係る承認申請等の取扱いについて
平成 16 年 7 月 5 日(薬食審査発第 0705001 号)
厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知

- 化粧品基準の一部を改正する件について
(化粧品に配合することができる成分及び紫外線吸収剤の範囲を拡大)
平成 16 年 10 月 1 日(薬食発第 1001026 号)
厚生労働省医薬食品局長通知
- 化粧品基準の一部を改正する件について
(化粧品に配合することができる防腐剤の範囲を拡大)
平成 16 年 11 月 4 日(薬食発第 1104001 号)
厚生労働省医薬食品局長通知
- 医薬品、医薬部外品、化粧品及び医療機器の製造販売後安全管理の基準に関する
適合性評価について
平成 17 年 3 月 3 日(薬食安発第 0303001 号)
厚生労働省医薬食品局安全対策課長通知
- 化粧品基準の一部を改正する件について
(化粧品に配合することができる防腐剤及び紫外線吸収剤の範囲を拡大)
平成 17 年 10 月 18 日(薬食発第 1018006 号)
厚生労働省医薬食品局長通知
- 「医薬品添加物規格 1998」の一部改正について
平成 18 年 3 月 31 日(薬食発第 0331023 号)
厚生労働省医薬食品局長通知
- 医薬部外品原料規格 2006 について
平成 18 年 3 月 31 日(薬食発第 0331030 号)
厚生労働省医薬食品局長通知
- 医薬部外品原料規格の改正に伴う医薬部外品等製造販売承認申請の取扱いについ
て
平成 18 年 3 月 31 日(薬食審査発第 0331033 号)
厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知
- 化粧品基準の一部を改正する件について
(化粧品に配合が禁止される成分及び配合することができる防腐剤を追加)
平成 18 年 5 月 24 日(薬食発第 0524001 号)
厚生労働省医薬食品局長通知
- 医薬部外品の製造販売承認申請及び化粧品基準改正要請に添付する資料に関する
質疑応答集(Q&A)について
平成 18 年 7 月 19 日(事務連絡)
厚生労働省医薬食品局審査管理課通知
- ヘンナ及びヘンナ由来物を含有する頭髪用化粧品類等の使用上の注意事項について
平成 18 年 9 月 6 日(薬食安発第 0906001 号)
厚生労働省医薬食品局安全対策課長通知
- タルクの品質管理について
平成 18 年 10 月 16 日(薬食審査発第 1016002 号)
厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知
- 医薬部外品原料規格 2006 の正誤表の送付について
平成 19 年 1 月 4 日(事務連絡)
厚生労働省医薬食品局審査管理課通知
- 化粧品基準の一部を改正する件について
(化粧品に配合することができる医薬品の成分及び紫外線吸収剤の範囲を拡大)
平成 19 年 5 月 24 日(薬食発第 0524001 号)
厚生労働省医薬食品局長通知
- 化粧品に配合可能な医薬品の成分について
平成 19 年 5 月 24 日(薬食審査発第 0524001 号)
厚生労働省医薬食品局審査管理課長通知
- 医薬部外品原料規格 2006 の正誤表の送付について
平成 19 年 7 月 4 日(事務連絡)
厚生労働省医薬食品局審査管理課通知

【特別寄稿】 「化粧」のちから



早稲田大学人間科学学術院長
人間科学部長 齋藤 美穂

2007年の世相を反映する言葉として「偽」が選ばれた。偽りが世の中に横行していることを考えただけでも嫌なご時勢になったものだと思う。

しかし、化けるという意味においては「化粧」も偽りの自分を演出する方略の一つであるとも言える。私の研究テーマの一つである「色白肌」の嗜好に対する心理学的な調査の中でも、女性の肌の色の白さは、美しさをかもし出すと同時に、上品で、女らしく、弱々しいパーソナリティイメージを与えることが分かっている。中高年ならまだしも、若い男性ですら「守ってあげたい」「可愛い」という印象を持ち、好意的に受け止めている。このような色白肌をもたらすパーソナリティイメージは、当然のことながらその人の本来の性格とは無関係に存在する、ある種のバイアスである。何故そのようなイメージが定着したのかを考えると、歴史・文化・風土・心理など多くの要因の存在が浮かび上がるのだが、ここではそれに対する言及は割愛する。

色白が「七難かくす」ことを知ってか知らずか、アジアは空前の美白ブームである。元来、肌に有害な紫外線を防止し、メラニン色素の生成を抑制することから端を発した「美白」「ホワイトニング」化粧品は、瞬く間にアジアの化粧品市場を席卷したが、そのコンセプトは日本が発祥であると聞く。私が企業と協同してアジアで行った国際比較調査では、美白やホワイトニングに求めるものは、単に白さだけではなく、肌理の整った、透き通るような白い肌であることも分かっている。そのような肌は間違いなくアジアの女性たちの永遠の憧れである。その一方でおもしろいことに、色白肌が何故良いと思うかという質問に多くの女性は「得だから」と答えている。人を意識したときに、確かに前述したような上品で女らしいパーソナリティイメージを持たれるのだとしたら、特に日本社会においては有利だと思う女性もいるだろう。ファンデーションも本人の本来の肌の色よりワントーン明るい色が選ばれやすいと聞く。かくして化粧は偽りのパーソナリティを演出する手助けになる。

化粧という言葉を広辞苑で調べると、「紅・おしろいなどをつけて顔をよそおい飾ること。美しく見えるよう、表面を磨いたり飾ったりすること」などといった意味のほか、特に名詞に冠して「美しく飾った、体裁をつくろった、形式的な、などの意を表す語」という意味が出てくる。例えば、外観を飾るばかりで、真実味のない行為のことを「化粧業」などと言う。やはり「真」をかくす何かが「化粧」には内包されている。

化粧をする行為は私が専門とする心理学の分野でも興味深い研究テーマの一つとなっている。化粧をするということは、対人を意識した行為であるが故に、化粧をすることによってもたらされるある種の緊張感は認知症患者やメンタルな障害に効果をもたらすこともある。化粧は人の「Well-being」や「Wellness」に深く関係する可能性を持つ行為にもなり、社会的にも大きな意味を持つ。化粧の潜在性は深い。化粧は人を幸せにする力も合わせ持っている。

このように、対人を意識した化粧もある一方、「なりたい自分」の演出に一役買う化粧もある。お嬢様風、キャリア風、小悪魔風など、メイクの仕方により様々な雰囲気を作り出せることを指南したヘア・メイクの雑誌が巷では多く見られる。どのような自分になりたいか、女性は夢を描きながら化粧をし、自らを演出する。それが「偽」であるかどうかはともかくとして、夢の実現に向けて自らを演出する行為は、心理的にもポジティブな影響をもたらすと考えられる。

しかし最近、そのような雑誌を目にするたびに気が付くことがある。それは多くのモデルの写真の肌が、この世のものとは思えないほど滑らかであり、口紅をつけた唇も信じられないほどフワッとつややかなことである。確かにモデル自身が美しいことに疑う余地はないし、本当にその化粧品をつけるとそれに近い雰囲気になるのかも知れないと思うのだが、それを見た学生たちから時々「先生、この化粧品を使って同じように化粧してもどうしてもこういう風にはならないって皆が言っているんですけど、本当にこうなるんでしょうか？」と聞かれることがある。もちろん専門外の私には答えられるわけがない。

最近の写真はその殆どがデジタルである。写真撮影時にライティングやフィルムの特性で変化をつけることも可能であろうが、コンピュータ画面上でデジタル画像の処理を行うことにより変化をつけることも可能であろう。事実、多くはそのような処理を行っていると推察する。しかし以前、某雑誌社のライターから気になる話を聞いたことがある。すなわち、こういった写真がかなりコンピュータ画面上で加工され、市場に出て読者の目に触れたときには実際とはかけ離れたものになっているという指摘である。しかもライター自身が、「やりすぎではないかと思っている」と言っていた。その話の真偽は定かではない。ただそのようなマジックの存在を疑いたくなるような画像はかなり多く見受けられる。

市場の中で多くの競合するメーカーと張り合うためには、このような画像処理はある種の必要悪になってしまうのかも知れない。しかし仮に過度な画像処理という行為を通して、夢を見させてくれるはずの化粧品が、「永遠に見ることのかなわぬ夢」を売り続けているのだとしたら、それは人の幸せに寄与するはずの化粧品業界が目指す本来の姿だと言えるのだろうか？「偽」が蔓延する今だからこそ、一度立ち止まって考えてみるべき時ではないかと感じる。

化粧の潜在的な力は想像をはるかに超える。なぜならば、化粧は単に「化粧をする」という行為にとどまるものではないからなのだ。その行為を通して、人々の「心」に多くを働きかける。化粧をすることにより、心がうきうきしたり、幸せな気持ちになった経験を持つ人は多いはずだ。化粧は確実に人々の心を豊かにできる力を持つ。人類の歴史の中で、化粧をするという行為を人が求めた原点が、そこにあるように感じる。だとするならば、その力をより多く引き出すのがこれからの化粧品業界に求められていることではないだろうか。外見的な美しさだけでなく、「美しい心」をも引き出すことが化粧品に出来たなら、極めて身近なものだけに、人類の幸福にこれほど寄与するものはないと感じる。そしてなぜだか分からないが、化粧品にはそれがきっと出来るという淡い確信を私は抱いている。

略歴

齋藤美穂(Miho Saito) 早稲田大学人間科学学術院長 兼 学部長
教授 博士(人間科学)

- 【専 門】 感性認知科学・色彩心理学・感性の文化差・対人認知
①色彩の嗜好の国際比較 ②肌の色の嗜好の国際比較 ③色彩と香りの調和性および心理的相互作用の検討 ④教師の表情とクラス雰囲気に関連性、笑い笑顔の関連性の検討 ⑤住空間における色彩の影響、デザインの視覚的特性と心理的影響の検討 ⑥色光や音声の生理的影響、生理と心理の関連性の検討
- 【所属学会】 日本心理学会(代議員)、日本色彩学会(理事:1993-1995・2005-2007、代議員:2007-)、日本色彩学会誌編集委員:1991-2006、日本教育心理学会、日本社会心理学会、人間-環境学会、American Psychological Association(USA)、Inter-Society Color Council(USA)
- 【学 歴】 1985年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程心理学専攻修了、
1997年 博士(人間科学)
- 【受 賞】 1993年 「色彩学論文賞」

【特集】会員アンケート調査結果からみる会員意識

～常議員プロジェクトチーム（TAC）報告～

＜東京支部常議員プロジェクトチーム(TAC)メンバー＞

村上泉子（カネボウ化粧品） 小名木稔（コーセー） 小林達朗（日本リント化粧品）
 飴井慎介（みづほ工業） 一戸美加子（トキワ） 前澤大介（癸巳化成）
 竹本笑子（竹本容器） 高橋和久（日本色材工業研究所）

2006年9月に発足した東京支部常議員プロジェクトチーム(TAC)では、東京支部の活動をより活性化すべく、日頃から会員の方々を感じている技術者会への意見や要望を収集しました。現在の会員の意識と東京支部の現状について、10年前(50周年時)の会員アンケート結果と比較しながらまとめましたので報告致します。

調査概要

- 調査時期 ■ 2007年3月
- 調査対象 ■ 東京支部全会員 1058名(2007年3月時点)
- 調査方法 ■ 自己記入式アンケート用紙(A4_3頁)の郵送による配布回収
(返信用封筒同封)
- 調査内容 ■ ・入会のきっかけと理由
・各行事への興味関心の程度
・各行事への参加不参加状況とその理由
・その他（技術者会のホームページについて、メールアドレスの有無など）

■ 回収率 ■

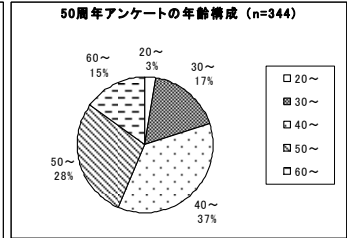
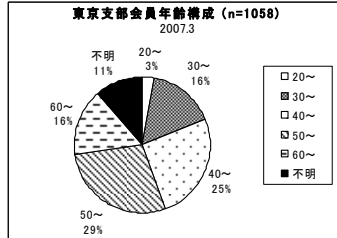
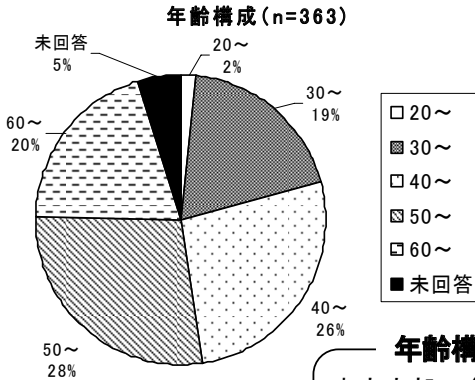
	2007年	1997年(50周年)
配布枚数	1058	710
回収枚数(回収率)	363 (34.3%)	344(48.4%)

■ 年齢・性別構成 ■

年齢別人数	
年齢	回答数
～19	0
20～	6
30～	70
40～	96
50～	101
60～	73
未回答	17
合計	363

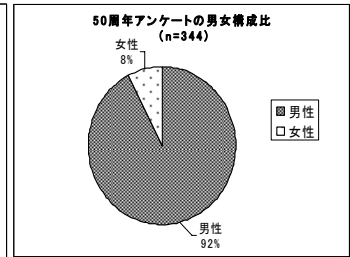
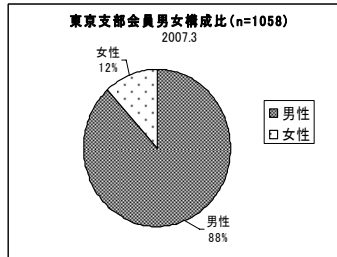
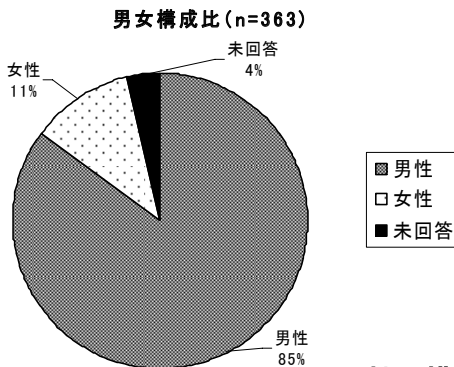
男女別人数	
性別	回答数
男性	309
女性	41
未回答	13
合計	363

属性



年齢構成

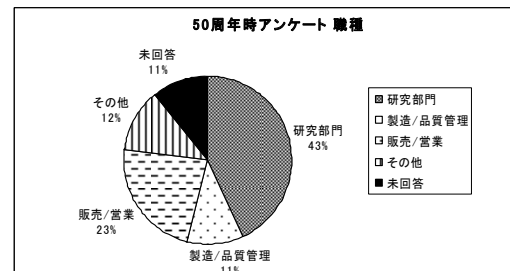
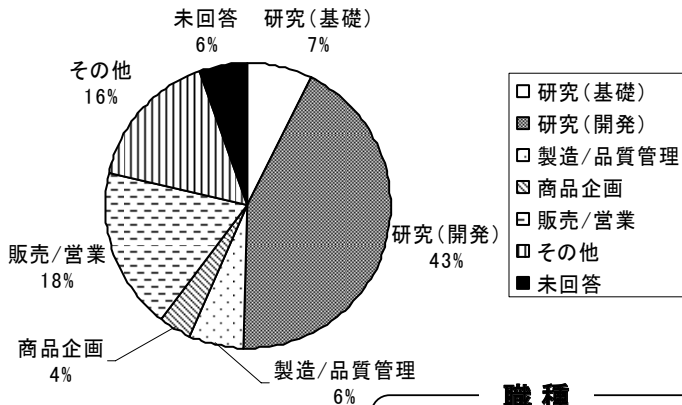
東京支部の全体構成とほぼ同じで、40代と50代でほぼ半数を占める。また、20代が非常に少ない。10年前の調査と比較すると、40代の割合が減っており、60代の割合がわずかに増えている。



性別構成

東京支部の全体構成とほぼ同じで、男性が約90%、女性が約10%である。10年前の調査と比較すると、わずかであるが女性の割合が増えている。

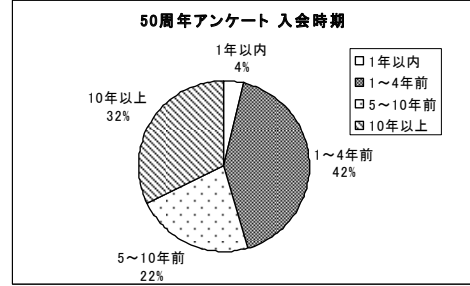
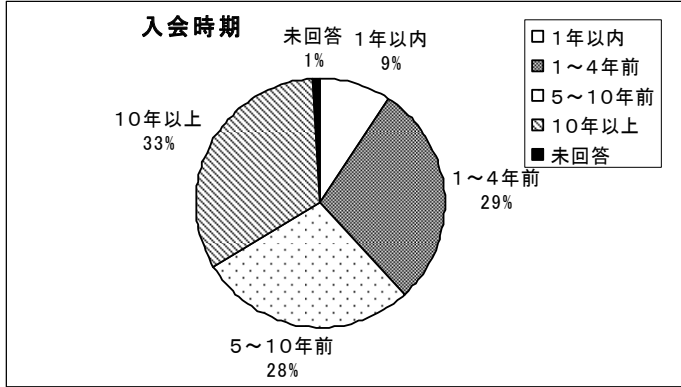
職種



職種

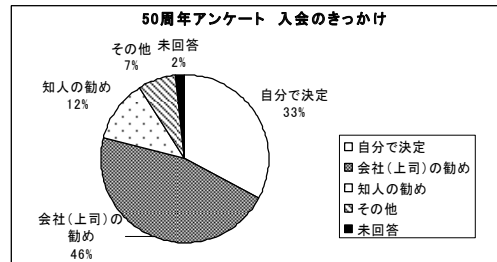
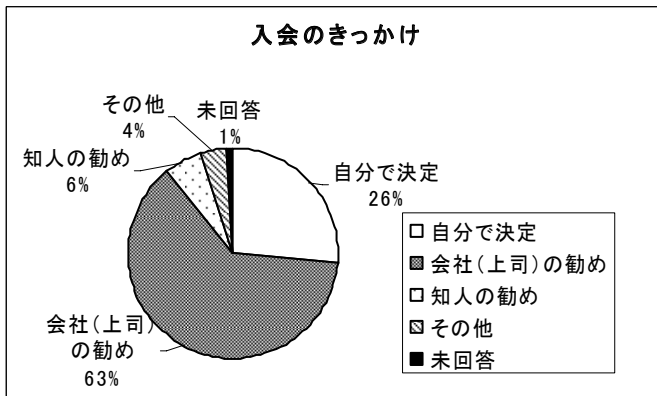
研究(基礎)と研究(開発)で約半数を占める。10年前と比較すると、研究部門がわずかに増え、製造品質管理部門が減少している。

入会時期・動機など



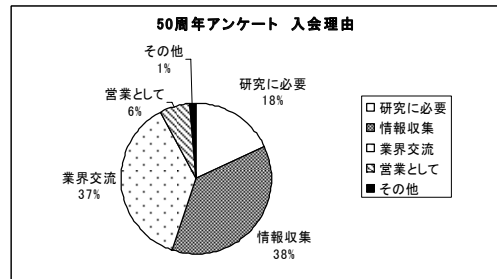
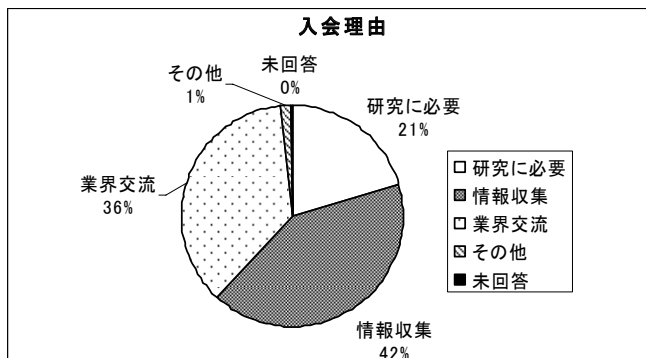
入会した時期

1～4年前、5～10年前、10年以上前の入会がそれぞれ約30%程度を占めている。10年前と比較すると、1～4年前の割合が減少し5～10年前の割合が増加しており、在籍年数の長い会員の割合が増えている。



入会のきっかけ

63%が会社あるいは上司の勧めによる入会で、自分で決定した人は26%しかいない。10年前と比較すると、自分で決定、知人の勧めによる人が減っており、会社あるいは上司の勧めによる人が増えている。入会には会社の理解が必要である?!

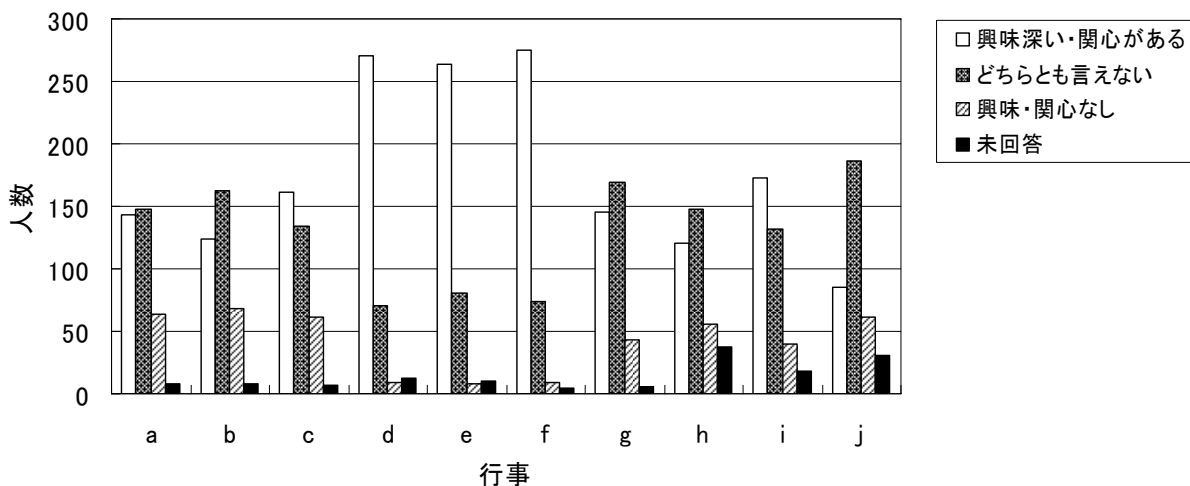


入会理由

研究に必要である、情報収集の他36%の人が業界交流を入会の理由としている。10年前とほぼ変わっておらず、業界交流を目的とした会員が多いのは、本会の特徴であると考えられる。

行事への興味・関心

各行事への興味(全体)

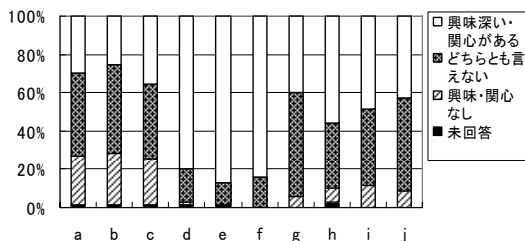


- a. SCCJ総会 b. 支部総会 c. 懇親会(支部総会後の)
 d. 研究討論会 e. SCCJセミナー f. 学術講演会 g. 技術見学会
 h. 研究会(35歳未満対象) i. 化粧品基礎技術講習会 j. コスメ倶楽部(若手(35歳未満)有志研究会)

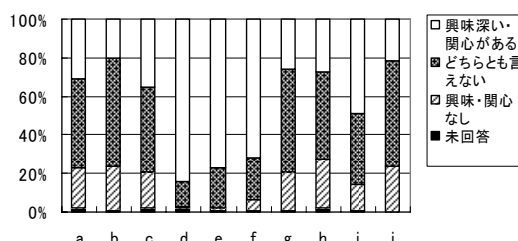
興味・関心

特に、研究討論会、SCCJセミナー、学術講演会へ興味・関心を持っている人が多い。

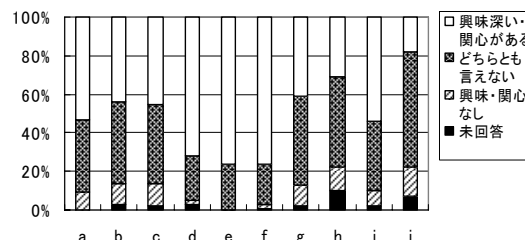
各行事への興味(30代)



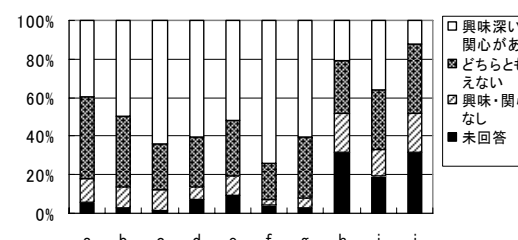
各行事への興味(40代)



各行事への興味(50代)



各行事への興味(60代~)

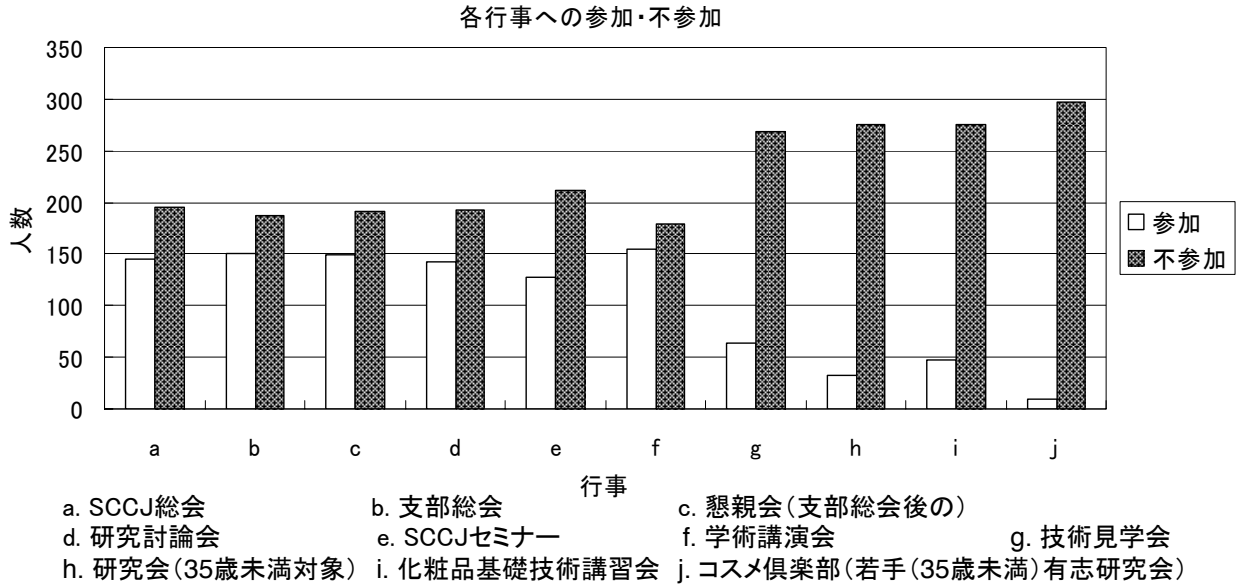


年齢による比較

30代・40代では、研究討論会、SCCJセミナー、学術講演会に、興味・関心があると回答が約80%であり、他の行事と比較すると高い。
 50代・60代では、行事間での興味・関心の差が小さくなる。特に、技術見学会への興味・関心が30代・40代と比べて高い。

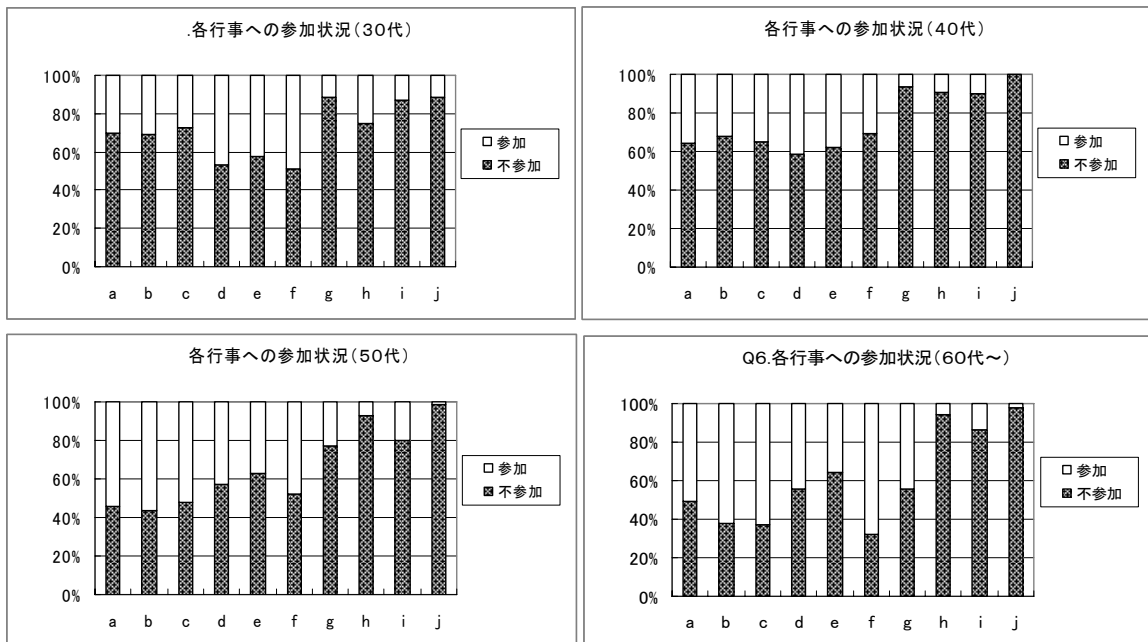
行事への参加状況

※ 平成17-18年度に開催されたものが対象



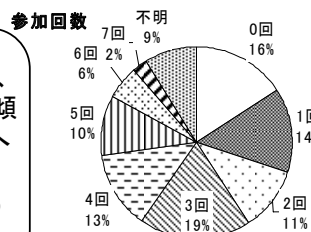
参加・不参加

総会、懇親会、研究討論会、SCCJセミナー、学術講演会については、約40%の人が参加しており、参加人数に差はない。SCCJセミナー、学術講演会へ興味・関心を持っている(前頁参照)にもかかわらず、参加している会員が少ない。



年齢による比較

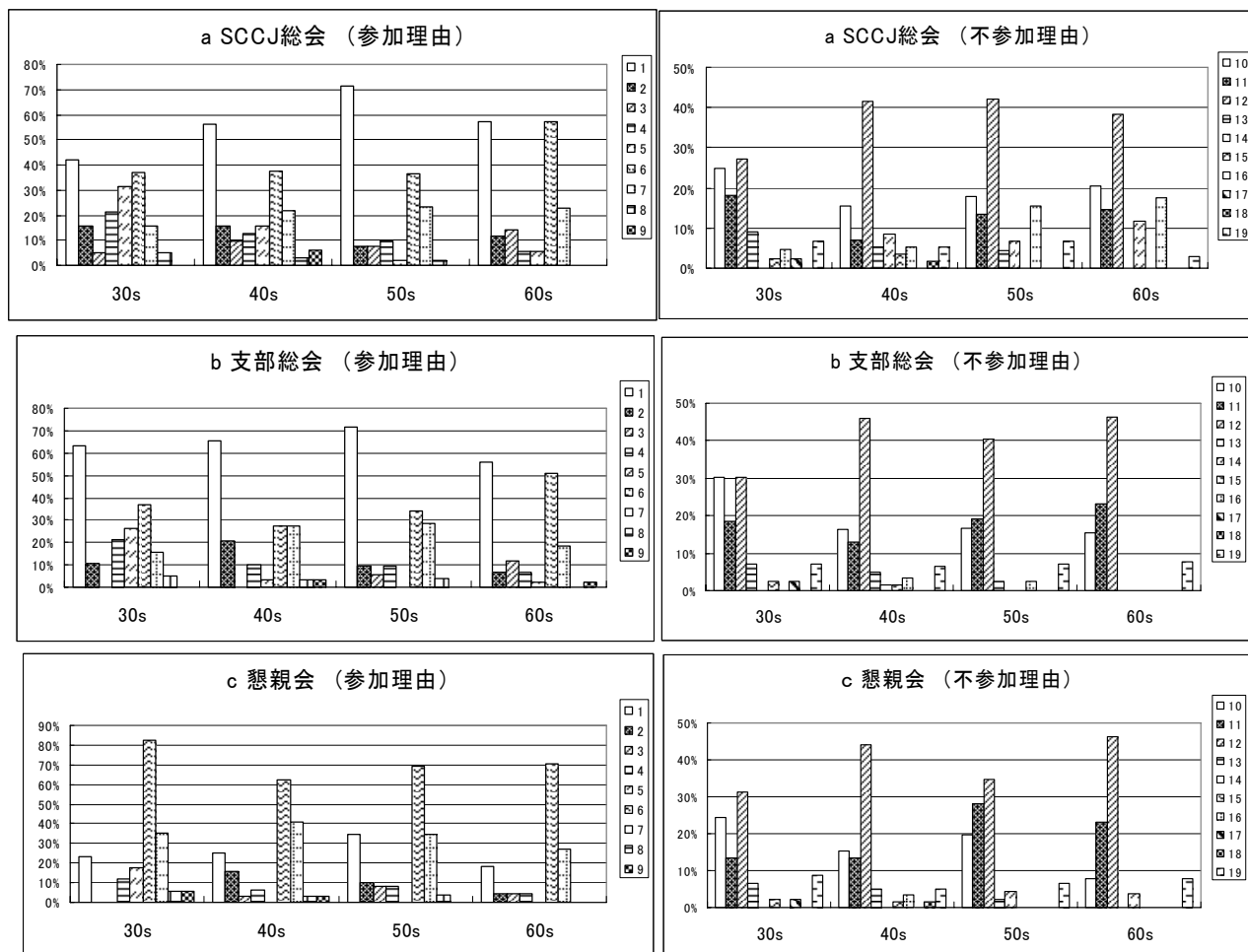
30代・40代では、総会、懇親会への参加は少ないが、50代・60代と年齢があがるに従って参加率が増える傾向にある。特に60代では学術講演会、技術見学会への参加率が高い。研究討論会、SCCJセミナーは、どの年齢でも約40%程度の参加率である。



参加回数

17-18年度中の行事へ参加回数をみると、3回が最も多く、平均2.6回であった。5回以上が約20%いる一方で、1回も参加していない会員も16%程度いる。

参加・不参加の理由 SCCJ総会・支部総会・懇親会



- 参加理由**
1. 会員としての義務
 2. 業務上必要だった
 3. 興味をひかれる内容であった
 4. 予定が合った
 5. 会社(上司)からの指示
 6. 他会員との交流のため
 7. 情報収集のため
 8. 特に理由はない
 9. 上記以外の理由

- 不参加理由**
10. 業務上有用とは思われなかった
 11. 興味がなかった
 12. 予定が合わなかった
 13. 会社(上司)の許可が得られなかった
 14. 参加費が高かった
 15. 代理出席させた
 16. 開催場所が遠かった
 17. 対象者外(研究会/コスメ倶楽部)
 18. 知らなかった
 19. 上記以外の理由

SCCJ総会・支部総会

参加理由は「会員の義務である」「他会員との交流のため」が多い。30代では「会社(上司)からの指示」との回答も多い。

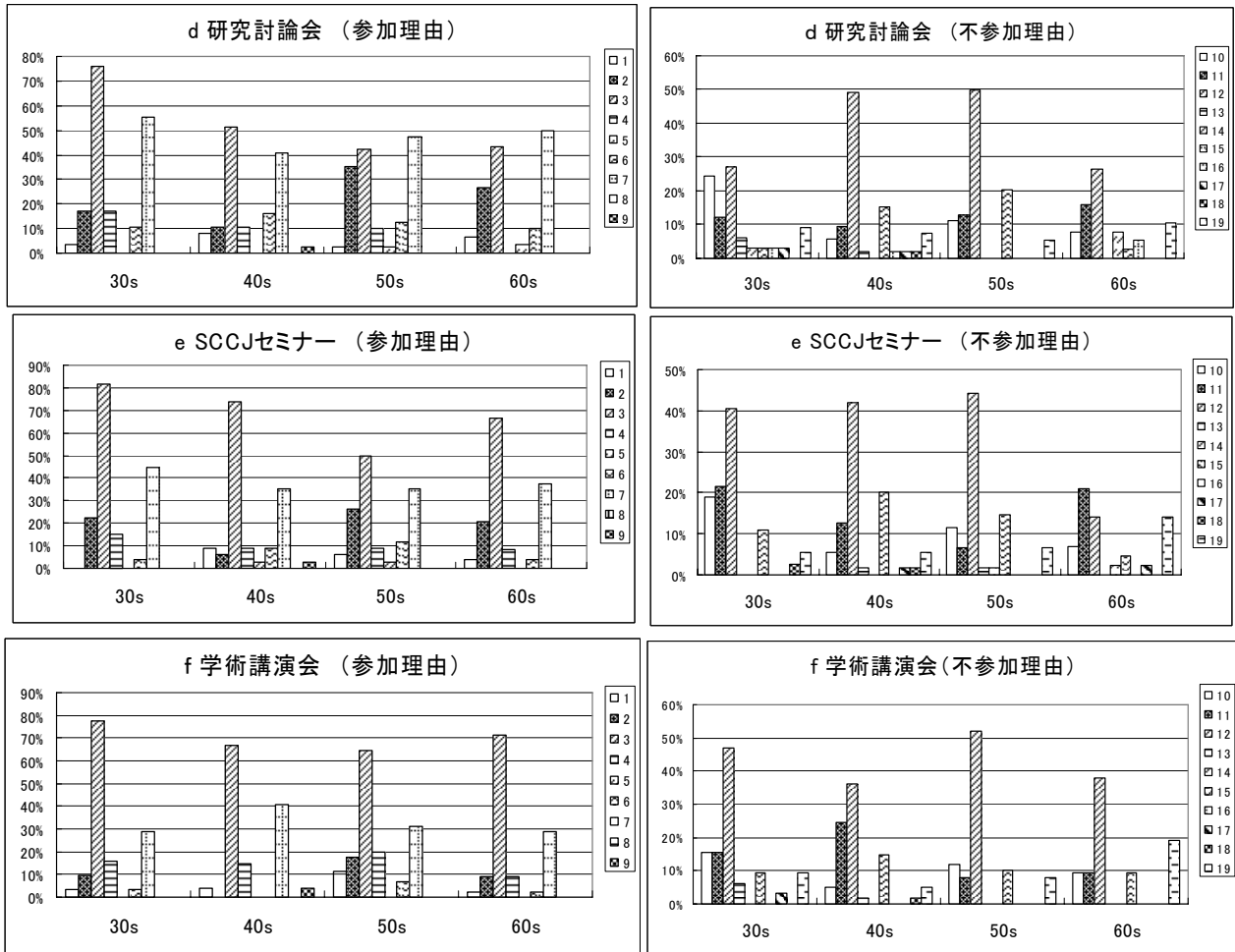
不参加理由は「予定が合わない」との回答が最も多い。30代では「業務上有用ではない」「興味が無い」が他の年齢に比べて多い。

懇親会

参加理由は「他会員との交流のため」が最も多く、次に「情報収集のため」が挙げられる。

不参加理由は「予定が合わなかった」との回答が最も多い。50代、60代では「興味がなかった」の回答も多い。

参加・不参加の理由 研究討論会・SCCJセミナー・学術講演会



- 参加理由**
1. 会員としての義務
 2. 業務上必要だった
 3. 興味をひかれる内容であった
 4. 予定が合った
 5. 会社(上司)からの指示
 6. 他会員との交流のため
 7. 情報収集のため
 8. 特に理由はない
 9. 上記以外の理由

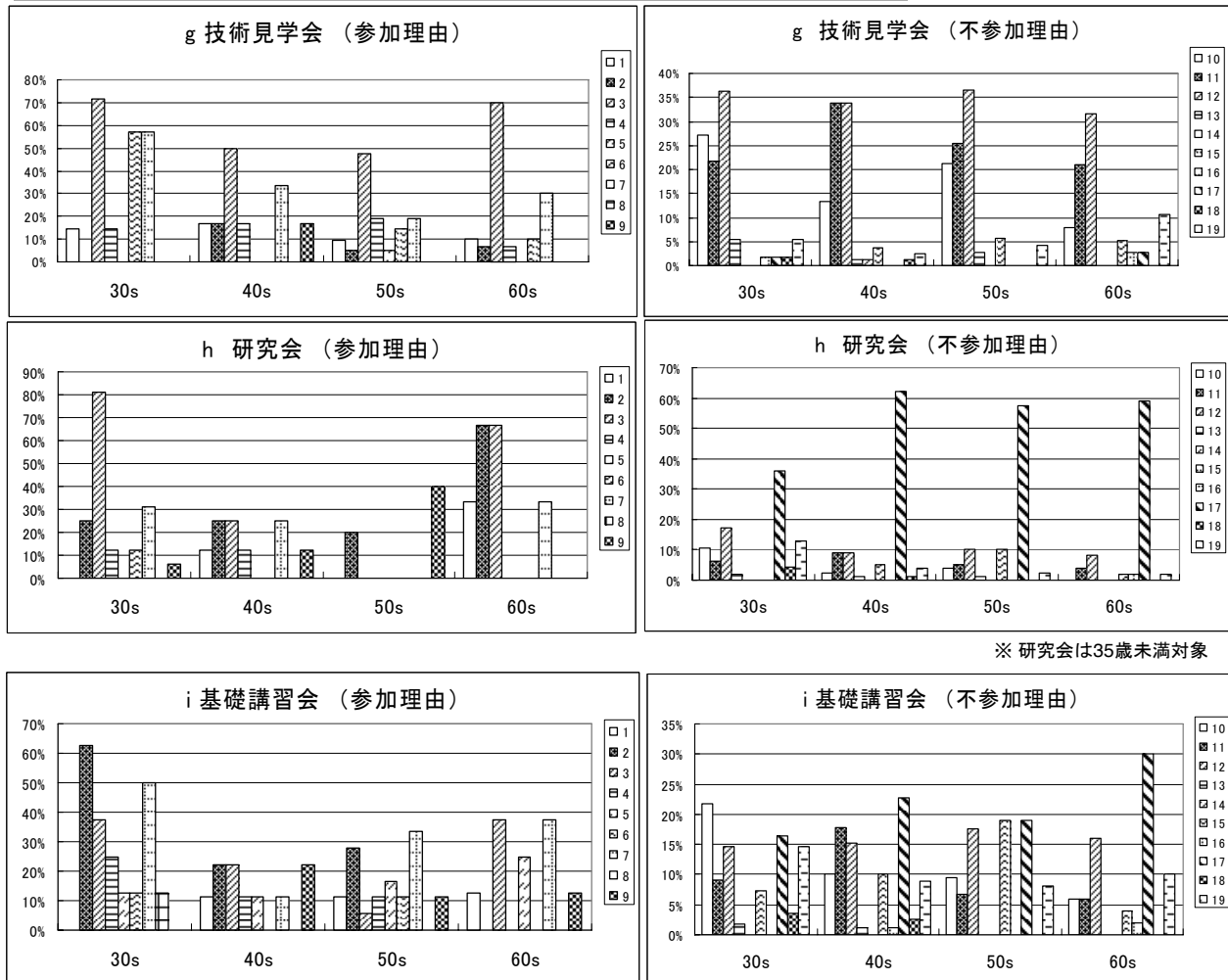
- 不参加理由**
10. 業務上有用とは思われなかった
 11. 興味がなかった
 12. 予定が合わなかった
 13. 会社(上司)の許可が得られなかった
 14. 参加費が高かった
 15. 代理出席させた
 16. 開催場所が遠かった
 17. 対象者外(研究会/コスメ倶楽部)
 18. 知らなかった
 19. 上記以外の理由

研究討論会・SCCJセミナー・学術講演会

参加理由は「興味をひかれる内容であった」「情報収集のため」が多い。50代・60代では「業務上必要だった」との回答も多い。

不参加理由は、約40%が「予定が合わない」との回答であり最も多い。30代では、研究討論会、SCCJセミナーについて「業務上有用ではない」「興味がなかった」との回答も他の年齢に比べて多い。

参加・不参加の理由 技術見学会・見学会・基礎講習会



- 参加理由**
1. 会員としての義務
 2. 業務上必要だった
 3. 興味をひかれる内容であった
 4. 予定が合った
 5. 会社(上司)からの指示
 6. 他会員との交流のため
 7. 情報収集のため
 8. 特に理由はない
 9. 上記以外の理由

- 不参加理由**
10. 業務上有用とは思われなかった
 11. 興味がなかった
 12. 予定が合わなかった
 13. 会社(上司)の許可が得られなかった
 14. 参加費が高かった
 15. 代理出席させた
 16. 開催場所が遠かった
 17. 対象者外(研究会/コスメ倶楽部)
 18. 知らなかった
 19. 上記以外の理由

技術見学会

参加理由は「興味をひかれる内容であった」が多い。30代では「他会員との交流のため」「情報収集のため」との回答も多い。
不参加理由は「予定が合わない」「興味が無い」との回答がほとんどである。

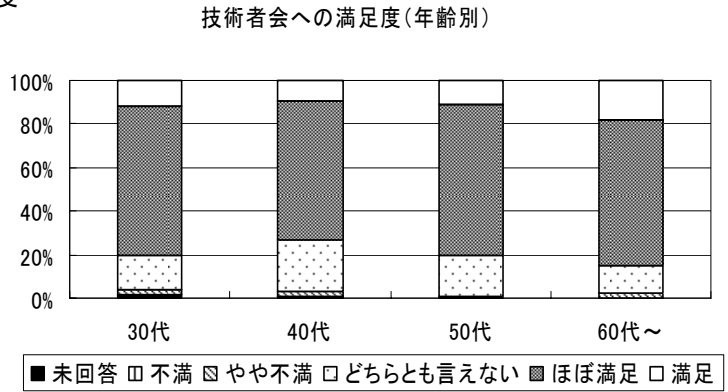
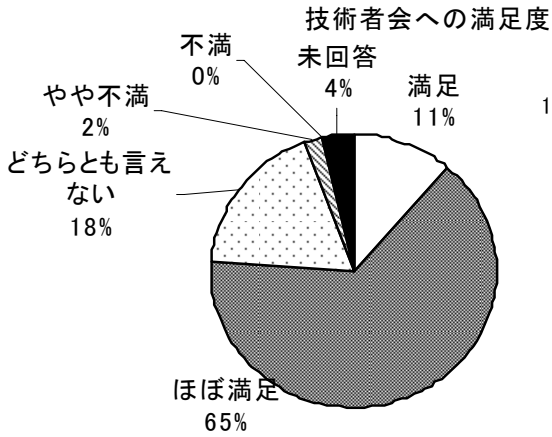
研究会 ※ 35歳未満対象

対象年齢である30代での参加理由は「興味をひかれる内容であった」が多い。
不参加理由は「対象者外」と回答がほとんどである。

基礎講習会

参加理由は、30代で「業務上必要だった」「情報収集のため」が多く、その他の年齢ではさまざまである。不参加理由も同様にさまざまである。

満足度

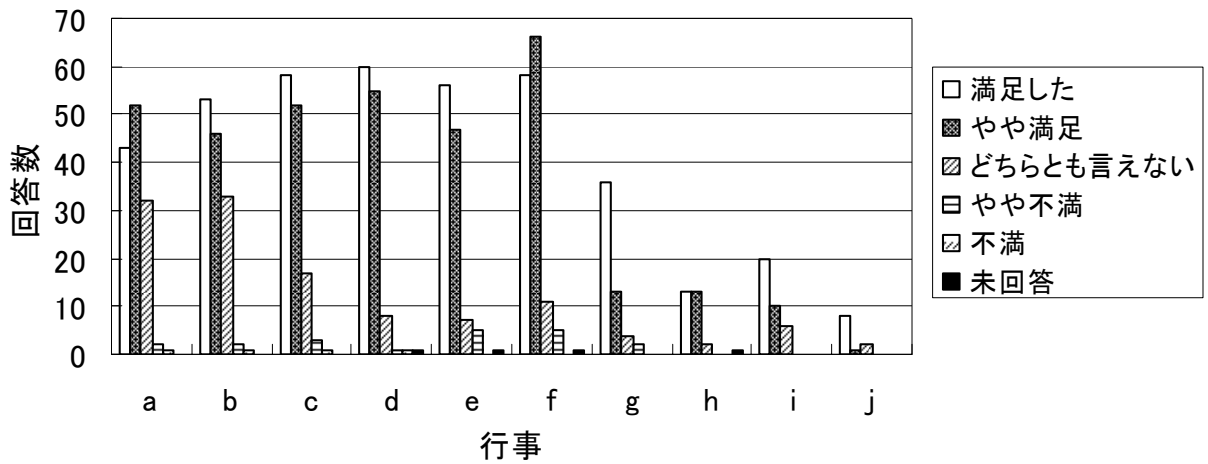


活動全般に対して

約80%の会員が技術者会の活動全般については満足、ほぼ満足と回答しており、満足度は高い。

各行事への満足度

※ 各行事に参加した人のみ回答



- a. SCCJ総会 b. 支部総会 c. 懇親会(支部総会後の)
 d. 研究討論会 e. SCCJセミナー f. 学術講演会 g. 技術見学会
 h. 研究会(35歳未満対象) i. 化粧品基礎技術講習会 j. コスメ倶楽部(若手(35歳未満)有志研究会)

行事別

特に、研究討論会、SCCJセミナー、学術講演会、技術見学会、研究会については参加した人はほとんどが「満足した」「やや満足した」と回答している。総会、懇親会については、他の行事よりも「どちらともいえない」との回答が多い。参加理由の違い(前項参照)が大きく影響していると思われる。

フリーコメント（抜粋）

【行事に関連するコメント】（Q. 企画して欲しい行事は？）

〔内容に関して〕

- ・生産部門の技術的セミナー、講演も考えて頂きたい。
- ・専門外のことを基礎から学びたくても年齢制限で、若手の方対象の勉強会に参加できません。年齢の枠のない勉強会を企画してください。

〔開催形式に関するコメント〕

- ・年間行事予定を早めに、できれば開催日の3ヵ月以上前に連絡頂ければ計画をたてやすいので、よろしく願っています。
- ・研究会(35歳未満対象)を40歳未満にしてほしい。技術者会のなかで、最も参加したい行事なので、出られなくなるのが悲しいです。

【技術者会への意見・要望】（Q. 技術者会へのご意見・ご要望）

〔会の運営関連〕

- ・今後ともがんばって欲しいし、化粧品技術者の地位向上をはかって欲しい。
- ・会社を超えた業界の発展のために大変有意義で活発な会と認識しています。
- ・ホームページの充実。
- ・一部の人の懇談の場になっている。もっと参画して頂きたい。
- ・若い人にとって魅力が少ないのではないか。
- ・学会になるのか、中途半端になっている。
- ・今後もセミナーなどを通して、若手の参加を促して欲しい。
- ・アジア地区の主要メンバーとして、もっと活発的な交流により活動を広げてほしい。
- ・特定の大手化粧品メーカーが中心になりすぎる。
- ・東(東京)、西(大阪)で行っている行事の中で、効率運営を推進する(会員の集客力のup, 負担低減 etc)意味からも統一できること(例 総会、セミナー、基礎講習会)を早急にして欲しい。

〔会費関連〕

- ・会費が高い
- ・会費金額の関係もあり、会社主導の入会が主体だと思う。個人として、もう少し参加しやすいような仕組みがあると良いように感じる。
- ・正会員をもう少し安くして、若手技術者を会に取り込んでみては。

〔事務手続き関連〕

- ・インターネットでの選挙投票。インターネットでの総会(全員投票)。
- ・詳細な連絡先が記載された会員名等は個人情報保護の観点から不要です。(迷惑セールス電話の原因となります。)

<まとめ>

本調査を東京支部活動の活性化に活用すべく、TAC ではこれらの調査結果をもとに現在の東京支部活動の課題の抽出を行い、いくつかの部会へ課題とその改善案を提案させて頂きました。現在、各部会で検討して頂いております。お忙しい中、アンケートに回答して頂いた会員の皆様にはたいへん感謝しております。ご協力ありがとうございました。

【本部関連活動】 化粧品産業技術展（CITE）の開催を振り返って



日本化粧品技術者会 東京支部
顧問 山口 道廣

化粧品技術者会東京支部が60周年を迎えることは大変に喜ばしいことでもあります。60周年を迎えるに当たり、2003年に開催された第一回の化粧品産業技術展(CITE)に関わったことから CITE に関わる原稿依頼を受け、思い出話も含め CITE についての私の日ごろの思いを少し述べさせていただきます。

CITE も1年おきに既に3回開催され、2009年の3月にはアジア化粧品技術者発表会(第9回 ASCS)との同時開催で4回目を迎えるまでになり、これも実に喜ばしいことだと思います。化粧品技術は他に類を見ない広範な技術分野で構成されており、商品として作り上げるにはそれだけ多くの原料・素材に関わることとなります。それゆえ化粧品メーカーと原料・素材メーカーはきわめて密接に関係しているわけですが、これまでは両者の具体的な連携はなかったように思います。第一回の CITE はその具体的な連携の始まりであったと言えるでしょう。

当初、化粧品産業技術展は化粧品技術者会の新規事業の一つとして、2000年に東京化粧品技術者会の元幹事長の田中宗男さんが責任者となり、その開催に向けてプロジェクトとして発足したと聞いております。田中さんの下で開催の概要が作られましたが、幹事長退任と同時に田中さんから2001年に私に実行委員長の厳命が下りました。

当初の実行委員会のメンバーは東京化粧品技術者会、大阪化粧品技術者会、東京の化粧品原料協会、近畿化粧品原料協会の4者で合計37名の大所帯でスタートいたしました。私を含め実行委員会のメンバーにとりましては、これまでまったく経験のないイベントの企画ですから、当初はお互いに右往左往していたのが実情でした。各小委員会の設置も、たまたま私が日本油化学会のある記念行事に関わったときの小委員会設置を倣って提案したと思います。私は委員会ではただ座っているだけでよいとのことで気楽に委員長を引き受けたのですが、持ち前のせっかちな性分から、途中からかなり強引に進めてきたように思います。メンバーの方々にはずいぶんと無理なことをお願いし、ご迷惑をおかけしたのではないかと反省しております。

「貧乏学会ですので会場費をなんとかディスカウントして欲しい…」とパシフィコ横浜の担当部長さんに平身低頭してお願いしたり、「最終的に赤字になりそうなのでこの部分は何とか安く…」などとちょっと語気を荒げながらイベントメーカーの担当者へ必死に交渉したことも思い出されます(最終的にはかなりの黒字になりましたが…)

また CITE の愛称も、今にして思いますと中々いい名称とありますがいかがでしょう。愛称を決めようと坂本事務局長と英語の辞書と首っ引きで検討したことを思い出します。そのきっかけは加瀬実行副委員長から紹介を受けた国際食品展示会へ出席したことでした。この展示会の名称が IFIA (International Food Ingredients and Additives) という愛称であり何とかこのような意味合いの愛称を作りたいと思い、結果として CITE (Cosmetic Ingredients and Technology Exhibition) の誕生に結びつきました。辞書を引きますと CITE という単語もありまして、「召集する…」などの意味をもち、「このイベントにぴったりだね」と坂本事務局長と「にっこり」したものです。

活動記録にもありますように既に3回の CITE が極めて成功裏に開催されましたことは、関わった方々の大変な努力の賜物だと改めて敬意を表したいと思います。そして、この成功は当初の目的でもありました化粧品メーカーと原料・素材メーカーとの連携が確実に進展している現われだと思えます。特に第1回の際は、出展していただけるメーカーさんがどれだけの数になるのか、会場が埋まるのか…など心配でたまりませんでした。開催にいたるまでの間に東京の化粧品原料協会や近畿化粧品原料協会に実行委員会の経過報告と同時に、出展のお願いに伺ったことが思い出されます。

また実行委員の佐藤さんを中心に一社一社手分けして電話で出展をお願いしたこともありました。CITE の特長は、展示会と同時に原料・素材メーカーさんの「UP TO DATE」の技術情報を発信する技術発表会にもあったと思えます。実行委員の吉岡さんご自身の経験からの提案であり、委員会ではすぐにその案を取り入れることになり、即吉岡さんに責任者になっていただきました(後で吉岡さんが「言わなきゃ良かったな」、とおっしゃっていましたが…) 具体的な運営に関しては、イベントメーカーさんをお願いしたのですが、やはりこの業界のイベントは初めてだということで、必ずしもことがうまく進まなかったように思います。

いずれにしても実行委員会の素晴らしいチームワークとお一人お一人の大変な努力で、活動記録にもあります様に19,300名強の来場者(9,400名強の登録者数)が有り、初回としては大成功であったと思えます。イベントメーカーの責任者がこの成功に涙ぐんでおられたのが今でも印象に残ります。そして今ではイベントメーカーさんが CITE の企画・運営のノウハウをしっかりと身に付けたのではないのでしょうか。

今後の CITE について二つのことを考えてみました。一つは ASCS との同時開催を機に海外メーカーにも門戸を広げ、グローバル化に対応することも必要かもしれません。日本の

化粧品産業の力強さ・素晴らしさを世界にアピールできると思います。ただし規模が拡大しますとそれをきっちりと監視、運営する独立した専門の部署・組織が必要ではないでしょうか。二つ目は、3回のCITEの成功を通して化粧品メーカーと原料・素材メーカーとの絆はきわめて強いものになったと思いますが、この連携はメーカー間の絆であり、加えて化粧品をお使いになる消費者との絆を強めることも必要ではないでしょうか。

化粧品には消費者にまだ十分に認知されていない素晴らしい機能があります。CITEの発展の方向にこの機能を認知・理解していただくような工夫・試みも必要かもしれません。

日本国内の化粧品市場は一兆五千億円規模と言われ、2兆円を超える産業に育成させるためにCITEの新しい試み・発展が少しでも貢献できれば、これは素晴らしいことだと思います。いろいろ勝手なことを述べてしまいましたが、これはあくまでも私見です。今後のCITEの発展を心から願ってやみません。

化粧品産業技術展(CITE) (本部活動)

	第1回	第2回	第3回
開催日	2003年5月15日 ～17日	2005年6月15日 ～17日	2007年5月16日 ～18日
会場	パシフィコ横浜	パシフィコ横浜	パシフィコ横浜
出展企業団体数・ 展示小間	120社 224小間	142社 299小間	191社 382小間
来場者(累計)	19,309名	23,326名	35,465名
<登録者>			
化粧品メーカー	4,648名	4,813名	5,310名
原材料関連	2,255名	2,171名	2,129名
容器・包材関連	417名	711名	797名
製造・分析機器	128名	134名	182名
化粧用具	64名	87名	121名
受託製造関連	369名	589名	500名
業界誌・プレス	43名	94名	51名
その他	1,391名	1,569名	1,498名
合計	9,475名	10,168名	10,588名
出展者 技術発表会	38テーマ 延べ聴講者:4,538名	46テーマ 延べ聴講者:3,424名	59テーマ 延べ聴講者:4,818名

IFSCC大阪大会 記録

(第24回国際化粧品技術者会連盟大阪大会:

24th IFSCC International Congress in Osaka)

会期:2006年10月16日(月)~19日(木)

場所:大阪国際会議場(OICC)、リーガロイヤルホテル(RRH)

月日	時間	行事内容
10月16日(月)	13:00~18:30 14:00~16:00 17:00~19:30 19:30~22:00	参加登録(OICC-5F) 評議委員会(OICC-Hall C) 開会式(OICC-Hall A,B) ウエルカムレセプション(RRH)
10月17日(火)	8:00~9:20 9:50~17:25 11:55~14:20 18:30~21:00	基調講演(Hall A) 口頭発表 20 題(Hall A,B) ポスター発表プレゼンテーション(Hall C,D,E,F) ソシアルレセプション(太閤園)
10月18日(水)	8:00~9:20 9:50~17:55 11:55~14:20	基調講演(Hall A) 口頭発表 22題(Hall A,B) ポスター発表プレゼンテーション(Hall C,D,E,F)
10月19日(木)	8:00~9:20 9:50~17:25 18:00~23:00	基調講演(Hall A) 口頭発表 24 題(Hall A,B) クロージングバンケット&表彰式(RRH)

主要国の発表件数(登録数)

	口頭発表	ポスター	合計		口頭発表	ポスター	合計
日本	28	84	112	タイ		8	8
韓国	4	54	58	ブラジル		7	7
フランス	9	44	53	イタリア		7	7
アメリカ	8	19	27	オランダ	2	4	6
ドイツ	7	11	18	ベルギー		4	4
イギリス	1	8	9	その他	4	18	22
スイス	3	6	9	合計	66	274	340

主要国の参加登録者数の比較

	ベルリン大会 (2000年)	エジンバラ大会 (2002年)	オーランド大会 (2004年)	大阪大会 (2006年)
日本	205	180	230	1325
フランス	211	139	105	133
アメリカ	154	137	859	149
ドイツ	314	103	67	57
イギリス	54	121	31	23
韓国				115
その他	318	232	314	208
総数	1256	912	1606	2010

※表彰テーマについては次項

詳細は日本化粧品技術者会発行のIFSCC大阪大会記念集参照

IFSCC大会 (国際化粧品技術者会)

発表数・参加者()は日本

大会名	開催日	発表数・受賞テーマ	参加者・受賞者
ソウル大会 (中間大会)	2003.9.22～24	口頭発表: 35(10)、ポスター: 97(11)	参加者: 350(120)
第23回IFSCC オランダ大会	2004.10.25～27	口頭発表: 73(20)、ポスター: 243(31) <基礎研究賞> 「毛髪内部の3次元動的可視 化」 <応用研究賞> 「色付き化粧品の適合性評価 —NIR-RSを用いた新規の客観 的評価手法—」 <ポスター賞> 「Cutaneous Restructuration by Phytohormones: From DNA Chip Analysis to Morphological Alterations」	参加者: 1606(230) 田中健一(コーセー) Mathias Rohr (Insitute Dr.Schrader -Creachem GmbH) Tomas Doering (Henkel KgaA)
フィレンツェ大会 (中間大会)	2005.9.19～21	口頭発表: 31(8)、ポスター: 116(19) <最優秀賞> 「Optical Rejuvenating Makeup Using an Innovative Shape-Controlled Hybrid Powder」	参加者: 900(58) 八木克彦(資生堂)
第24回IFSCC 大阪大会	2006.10.16～19	口頭発表: 66(28)、ポスター: 274(84) <基礎研究賞> 「正常皮膚およびドライスキンの バリア特性を模倣した新しい角 層代替物: 有効成分をスクリー ニングする簡便で効果的なア プローチ」 <Honorary Mention> 「ケラチノサイト脱核における制 御分子の同定とバリア崩壊の 関連性」 <応用研究賞> 「単球と単球由来樹状細胞へ の異なった毒性: アレルゲンと 刺激物を区別する新しい手法」 <ポスター賞> 「顔面において毛穴の目立った 外観をどのように改善するか」	参加者: 2010(1325) J.A.Bouwstra (Leiden University) 片桐千華(資生堂) Josette Peguet-Navarro (Université Lyon) 飯田年以(資生堂)
アムステルダム 大会 (中間大会)	2007.9.24～26	口頭発表: 25(4)、ポスター: 107(12) <最優秀賞> 「A New Decorin-Like Tetrapeptide for Optimal organisation of Collagen Fibres」	参加者: 443(55) A.Puig(Lipotec, Gava, Spain)

ASCS大会 (アジア化粧品技術者会)

発表数・参加者()は日本

大会名	開催日	発表数	参加者
第6回マニラ大会	2003.3.3~5	口頭発表:40(8)、ポスター:7(2)	参加者:228(48)
第7回バンコク大会	2005.3.7~9	口頭発表:69(20)、ポスター:17(3)	参加者:408(71)
第8回シンガポール大会	2007.3.7~9	口頭発表:77(18)、ポスター:35(2)	参加者:約 230(70)



2006.10 IFSCC 大阪大会
発表会場風景



2006.10 IFSCC 大阪大会
最終日ガラパーティー



2007.9 IFSCC アムステルダム中間大会
会場 (Royal Tropical Institute)



2007.9 IFSCC アムステルダム中間大会
会議場内部



2007.3 ASCS シンガポール大会
大会参加団 (SCCJ) の皆さん



2007.3 ASCS シンガポール大会

SCCJ優秀論文(日本化粧品技術者会・優秀論文)

回数(年度)		受賞テーマ	受賞者
第12回 2002年度 (平成14年度)	最優秀論文賞	「老化した肌の光学研究と、若々しい外観を再現するメイク料の開発」	坂崎ゆかり、西方和博、中村直生 (ポーラ化成工業)
	優秀論文賞	「アミノ酸-ビタミンB6 縮合体による抗酸化作用の発現」	北澤学、岩崎敬治(味の素) 石塚由紀子、小林三佐子 荒金久美(コーセー)
	優秀論文賞	「新しいシミ計測法の開発」	舛田勇二、高橋元次、坂本哲夫 (資生堂) 島田美帆 (東京都精神医学総合研究所) 伊藤雅英、矢田貝豊彦 (筑波大学)
第13回 2004年度 (平成16年度)	最優秀論文賞	「新規なメカニズムに基づく毛髪のハリコシ向上用トリートメント-人工キューティクルを形成する自己架橋型ポリマーのデザイン-」	宮沢和之、金田勇、飯塚直美、 梁木利男、植村雅明 (資生堂)
	優秀論文賞	「カチオン性高分子と界面活性剤のコアセルベートに関する研究-シャンプー使用感へのコアセルベートの影響-」	樋渡佳子、吉田克典、坪隆宏、 藪桃、岩井滋 (資生堂)
	優秀論文賞	「真皮 UV ダメージの非侵襲的評価法の検討」	大場愛、五味貴優、西森康友 (ポーラ化成工業) Chris Graves,AnthonyPearse* (ウェールズ大学) Cris Edwards* (ロイヤルグェント病院) *(カーディフバイオメトリックス)
第14回 2006年度 (平成18年度)	最優秀論文賞	「肌からの反射光を制御するメイク料の開発(第1報)-赤い光の視覚効果を利用したファンデーション-」	坂崎ゆかり、鈴木優加、毛利邦彦 (ポーラ化成工業) 西方和博 (ポーラ化粧品本舗)
	優秀論文賞	「肌の透明感測定とその対応化粧品の有効性評価」	舛田勇二、國澤直美、高橋元次 (資生堂)
	優秀論文賞	「巨大なエマルジョンの調製と化粧品への応用」	岡本亨、松下裕史、松浦恵衣子、 増田優 (資生堂)

【各部会活動の5年のあゆみ】

学術部会Aの活動報告 「学術講演会」

部会長 久米 賢次

この5年間(2003年～2007年)の活動を次の通り報告します。

1 部会の活動実績

この5年間で部会が担当した活動は第228回から第246回までの学術講演会です。そのうち、243回総会と同時開催時の講師は、総務部会が担当しました。参加者については、目標としています1開催あたり100名以上の参加をクリアできました。

2006年からは、部会メンバーがそれぞれの活動参加意識を盛り上げるため、年間計画の4回開催に担当が張り付くことにしました。事前に部会で検討しているジャンル及び講演者の中からの選択・決定、日程調整、講演交渉、当日の司会、運営全てを仕切ります。メンバーも多忙な中ではありますが、積極型で会を盛り上げ、会員相互コミュニケーションの場として継続・提供していくためには大切なことだと認識しています。

1) 2007年度年間日程と部会メンバー

統括 久米賢次(日本食品分析センター)

- ・4月総会グループ 川戸淳司(岩瀬コスファ)、岩崎敬治(味の素)
- ・7～8月グループ 田中孝祐(ライオン)、横井克士(ヤクルト)
- ・10～11月グループ 小名木稔(コーセー)、竹本笑子(竹本容器)
- ・1～2月グループ 片岡正行(曾田香料)、野村浩一(ポーラ)

2) 部会の目標と企画

会の活性化のために活動しているので、最低でも会員の1割以上に参加してもらえよう企画が重要と考えて活動しました。

- ①参加者:アンケート等を考慮しながら、100名以上の参加をいただける講演、講師をリストアップしました。
- ②選択方法:会員の声を参考にし、メンバーが直接聴講してきた、皆さんにも聞かせたいと思えた講師をリストアップし、優先順位をつけた。
- ③学術部会Bからの紹介:部会Bの中から一般講演して問題のない内容を選択・推薦してもらい基礎講座用に再演しました。

3) 講演内容等

- ①内容:科学、一般、社会、経済、化粧・薬事、行政、雑学の幅広く見識を広めるジャンルから選択しました。講師の都合で、時間を短くした場合は、1題を会員の紹介、製品紹介、分析技術の紹介、学術部会Bの講師等の化粧品関連基礎講座として

若い会員が参加しやすくしました。

②講演時間:通常講演の2時間は長いので、長くても1時間20分にしました。

2 次の5年間に向けて

1) 将来構想委員会から学術部会Aへの活動提案

開催回数を減らしてでも、普段高額講演料を理由として聞くチャンスがないような著名講師を選んで行くべきとのアドバイスをもらいましたが、部会で検討した結果、回数は現状のままで、講演内容は会員の要望に対応し、講師料の幅分散化で対応するべく検討して行きたい。

2) 活動目標

今後も、100名以上を集めること及び将来の会員になってもらえそうな聴講者に魅力ある会をアピールしていきたい。活動の主旨「懇親と教養を身につける」ことが主眼になりますが、上司の方が部下の方の参加を積極的に後押しできる演題を選んでいきたい。これらを実現するため、アンケートを意識・反映した形として、当面は、1題目を化粧品関係で基礎講座(時間も45分程度)、二題目をメイン講演会(時間は75分)の2題体制での開催を中心に情報発信していきたい。



2006.4 第240回講演会(総会講演会)
(服部幸應氏)
(ホテルオークラ東京)

学術講演会（学術部会A）

回数	開催日・場所	講演テーマ	講師:(敬称略)	参加者
第 228 回	2003.4.18 ロイヤルパークホテル	笑いの不思議～笑いの効用	関西大学:井上 宏	252 名
第 229 回	2003.7.16 学士会館	① メーキャップの流行史 ② 中高年登山者とヒマラヤ	(株)資生堂:加藤みどり子 登山家:池田 錦重	130 名
第 230 回	2003.11.11 学士会館	① 最近の化粧品マーケティング開発戦略 ② アミノ酸の生理機能について	(株)資生堂:越本 貴志 味の素(株):馬渡 一徳	276 名
第 231 回	2004.1.22 学士会館	① 化粧品の官能評価の手法について ② 植物由来の抗酸化成分の機能と応用	(株)コーセー:池山 豊 名古屋大学:大澤 俊彦	54 名
第 232 回	2004.4.16 ホテルニューオータニ	① 色は匂えど	埼玉県産業技術総合センター:遠藤 勲	271 名
第 233 回	2004.7.27 学士会館	① 今求められるヘアカラーとは ② 脳のおい地図	(株)マンダム:辻野 義雄 東京大学:森 憲作	168 名
第 234 回	2004.10.13 学士会館	① 化粧せずには生きられない人間の歴史より ② 食品の安全性確保の方向性—自立と自律—	駒沢女子大・(株)資生堂: 石田 かおり 内閣府食品安全委員会: 一色 賢司	116 名
第 235 回	2005.1.21 学士会館	① 私の化粧品開発	(株)コーセー:宿崎 幸一	193 名
第 236 回	2005.4.20 ホテルオークラ東京	① 現代社会に生きる私たちは「バカの壁」を越えられるか	養老 孟司	302 名
第 237 回	2005.8.24 アルカディア市ヶ谷	① パック/マスク製品の製剤技術(ピールオフタイプ) ② 官能設計工学が開く新しいモノづくり	花王(株):石田 耕一 金沢工業大学:神宮 英夫	150 名
第 238 回	2005.12.6 国立博物館	① 食感性工学による緑茶飲料の開発	東京大学:相良 泰行	118 名
第 239 回	2006.2.16 学士会館	① SHISEIDO MEN の開発 ② 旨い顔、不味い顔	(株)資生堂:菊池 昌夫 山野芸術短大:岡野 宏	181 名
第 240 回	2006.4.26 ホテルオークラ東京	① 食育のすすめ—大切なものを失った日本人—	服部学園:服部 幸應	269 名
第 241 回	2006.7.27 学士会館	① メンズフレグランスの歴史と現状 ② 技術立国ニッポンは、なぜ技術者を活かさないか	高砂香料工業(株):鈴木 隆 ソフトブレングループ: 宋 文州	139 名

第 242 回	2007.1.31 学士会館	① 肌分析・個肌対応化粧品システム“アペックス・アイ”について ② 知的財産の最新問題について	ポーラ化成工業(株): 平井 義和 芝綜合法律事務所: 牧野 和夫	166 名
第 243 回	2007.4.20 花巻温泉ホテル・千秋閣	① 宮沢賢治と花巻の風土	宮沢賢治イーハトーブ館: 牛崎 敏哉	206 名
第 244 回	2007.7.26 学士会館	① 再生医療とアンチエイジング	名古屋大学:上田 実	121 名
第 245 回	2007.11.7 アルカディア市ヶ谷	① プラスチック容器製造の基礎知識 ② ゲル化剤、増粘剤の分子設計と開発	竹本容器(株):福田 正 信州大学:英 謙二	206 名
第 246 回	2008.2.7 学士会館	① メイクアップ化粧品における繊維粉体の活用 ② スキンケアにおけるホリスティック医療の重要性	ポーラ化成工業(株): 坂崎 ゆかり ポーテラボスキンケアクリニック:土居 美佐	150 名



2007.7 第 244 回学術講演会 (学士会館)

2007.11 第 245 回学術講演会
(アルカディア市ヶ谷)

学術部会 B の活動報告 「研究会」

部会長 鈴木 敏幸

学術部会 B は、将来の化粧品技術者を担う若手技術者の育成・成長支援を目的に、年2回のペースで研究会を開催しています。2回のうち1回は通常の講演会形式ですが、比較的若手の講師がさらに若手の 35 才未満の参加者に、商品に関わる基本技術、先端技術、あるいは苦勞をした点、苦い思いをした失敗談をもまじえて熱く語るという研究会です。他の1回は参加者討論方式の研究会で、講師が 30 分ほど話題提供をした後 3~4グループに分かれ、参加者全員が自分の抱えている技術課題や意見を交わすというものです。

添付の表に示したように、テーマは一般的な基盤技術というより、重要であるが日頃あまり取り上げられないニッチなテーマもあえて取り上げています。また、研究会への参加申し込みの際、講師への質問や現在の自分の抱えている技術的悩みや課題を提出していただき、課題をクリアにしておくという工夫をしています。会場は、日本化粧品技術者会東京支部事務局のある六本木化成品会館の会議室で行っています。講演会では定員約 80 名のところをかなり上回る参加となることが多々あり、少々窮屈な環境となってしまっていますが、活気ある研究会となっています。会の後、飲み物と軽食をとりながら講師を交え、参加者同士が自由に意見を交わし合うのも恒例となっており、若手技術者の輪の広まりにお役に立っているのではと感じています。研究会への参加受付は先着順ですが、100 名を超えるときは物理的理由によりお断りすることがあり、部会委員一同心苦しく思っています。

これまで研究会で取り上げたテーマの中でひととき人気があるテーマとして、「商品開発における私のこだわり」があります。第 14 回の「商品開発における私のこだわり-Ⅱ」では、女性の研究者に技術や商品に関するこだわりを熱く語っていただきました。また 20 回記念の研究会では、「商品開発における私のこだわり-Ⅲ」として、技術だけではなくマーケティングや感性の観点からの話題もとりあげました。この記念研究会だけは、会場を多数入場の可能なアルカディア市ヶ谷に移し、参加者 180 名という大きな会となりました。

この5年間こうした活動が徐々に浸透し、毎回多数の参加者に恵まれています。しかし部会に対する意見として「何故 35 歳未満限定するのか?」「もっと上の年代にも開放して欲しい」という意見がかなり出ているのも事実です。会場や本来の主旨などに関して、いろいろ議論しなければならない点や課題は多々ありますが、これまでの活動で得た経験や実感をもとに、さらに部会活動を有意義なものにしてゆきたいと思っています。

尚、学術部会 B では若手技術者の自主的な学習活動の会“コスメ倶楽部”の後見、支援もしています。

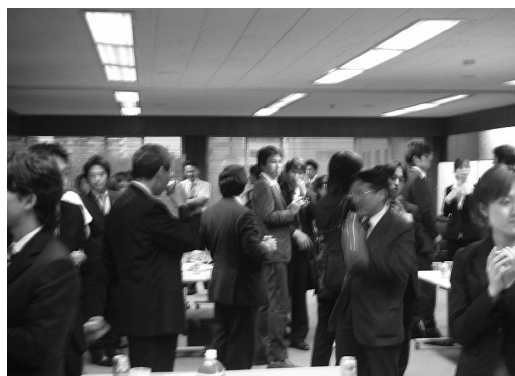
研究会（学術部会B）

回数	開催日	研究テーマ	講師:(敬称略)	参加者
第14回	2003.7.28 化成品会館	「商品開発における私のこだわり -II」 ① 水溶性多糖誘導体を用いた高 分子乳化と製品への応用 ② 含水メイクアップ化粧料の開 発 ③ スキンケア粉末の開発	花王(株):秋山 恵里 株コーセー:富田由利子 株資生堂:河合 江里子	106名
第15回	2003.12.15 化成品会館	「最近のアイメイクのトレンドと製剤 技術—マスカラを中心にして— ① 最近のマスカラのトレンド ② 最近のマスカラ製品の技術	(参加者討論方式) フリーライター:川崎利江子 カネボウ(株):永井 智雄	38名
第16回	2004.8.5 化成品会館	「男性スキンケア化粧品」 ① 男性スキンケア化粧品の変遷 とその特性 ② 男性の意識調査と皮膚生理に 基づいたSHISEIDO MEN設計 の考え方 ③ メンズフレグランス—男の香り の歴史と現状—	株マンダム:吉川季代美 株資生堂:菊池 昌夫 高砂香料工業(株):鈴木 隆	94名
第17回	2004.11.10 化成品会館	「パック・マスク製品の製剤技術」 ① ピールオフタイプについて ② ふき取りまたは洗い流しタイプ について ③ 貼付タイプ(医薬品を含む)に ついて	(参加者討論方式) 花王(株):石田 耕一 株資生堂:藪 季仁 ライオン(株):飯田 教雄	38名
第18回	2005.9.29 化成品会館	「泡の機能と物性」 ① 泡と界面物性 ② 泡の機能と物性 ③ オイル系で、泡で落とすクレン ジング料	花王(株):野々村 美宗 味の素(株):三上 直子 ポーラ化成工業(株): 工藤 大樹	84名
第19回	2005.11.10 化成品会館	「泡をたてる、とじこめる、評価す る」 ① 洗浄剤の泡立ちを制御する ② スフレ状クリームの製剤技術 ③ 洗浄剤の泡を評価する	(参加者討論方式) ライオン(株):大山 展広 株資生堂:関根 知子 花王(株):野々村 美宗	35名

第 20 回	2006.11.6 アルカディア市ヶ谷	「商品開発における私のこだわり-Ⅲ」 ① 資生堂“TSUBAKI”の商品開発 ② 光学活性香料について ③ 洗濯衣料の部屋干し臭気 of 分析を通じて ④ SK-II エアータッチファンデーションの開発 ⑤ 着色井形ファイバーを活用した“ザメイクB, A”の開発 ⑥ 頬の毛穴ケア化粧品の開発 ⑦ 日焼け止め料の開発—無機紫外線散乱剤の配合について— ⑧ 美白有効成分“マグノリゲナン”の開発	(株)資生堂:高津 晶 高砂香料工業(株): 長澤 徹哉 ライオン(株):島田 俊哉 P&Gファー・イースト・インク: 林 郁 ポーラ化成工業(株): 坂崎 ゆかり 花王(株):川田 裕三 (株)コーセー:伊藤 利之 (株)カネボウ化粧品: 松井 順一	180 名
第 21 回	2007.9.12 化成品会館	「紫外線ケア製品の開発技術」 ① 紫外線と皮膚 ② 紫外線防御素材 ③ 製剤化技術 ④ UVケア効果評価・解析(法規制も含め)	(株)資生堂:岩城 はるひ ポーラ化成工業(株): 及川 哲也 花王(株):猪股 幸雄 (株)コーセー:水野 誠	101 名
第 22 回	2007.12.7 化成品会館	「紫外線ケア製品の開発技術」 ① 紫外線と皮膚 ② 紫外線防御素材 ③ 製剤化技術 ④ UVケア効果評価・解析(法規制も含め)	(参加者討論方式) (株)資生堂:岩城 はるひ ポーラ化成工業(株): 及川 哲也 花王(株):猪股 幸雄 (株)コーセー:寺村 崇	51 名



2007.9 第 21 回研究会
(化成品会館)



2007.9 第 21 回研究会・交流会
(化成品会館)

渉外部会の活動報告 「技術見学会」

部会長 正木 仁

渉外部会は技術見学会を通じて日本化粧品技術者会東京支部会員の皆様の日ごろの開発業務に役立つ話題、情報を提供してまいりました。日本化粧品技術者会60周年にあたり、過去5年間を振り返って活動報告をさせていただきます。

とは申しませんが、私、渉外部会に所属させていただいたのは2007年4月からであり、過去5年の活動についてはほとんど報告する内容を持ち合わせておりません。

そこで過去5年の活動につきましては別表をご参照いただき、ここではこの先5年どのようなスタンスでこの技術見学会を運営していくかについて少し述べさせていただきます。

それに先立って僭越ながら私が個人的に考えている「化粧品とは」について述べてみたいと思います。

ご存知のように化粧品は間口の広いサイエンスに裏づけされた一種のアートではないかと常日頃考えております。サイエンスの部分で考えるなら、「化粧品は、製剤開発の部分ではコロイド化学あるいは粉体化学、コンセプトおよび有用性の分野では皮膚科学、最近では心理学も、容器包材の部分ではデザイン学や種々のメカニクの集合体である」と考えております。また、アートと呼ばれる部分として化粧品を使用したときの効果感、魅力的な容器、パッケージなどの感覚的な部分が、サイエンスのベースに載ってきます。ヒット性の高い化粧品の出来上がるプロセスは以下のようなものではないかと考えております。(化粧品のヒット性は広告宣伝にかかわるウェイトが高いわけですが、あえて化粧品ハードに言及して論旨を組み立ててみました。)

まず、店頭で消費者の注目される魅力的な容器デザイン、これにより消費者はその化粧品を手にとってみる。これは感性に訴えかけることにより成立します。手にとった化粧品を消費者は内容を確認する。このとき効果を期待させるコンセプト、配合有用成分により購買動機を高める。つまりは購入して使用を開始する。使用を開始すると高い実効感および嗜好性の高さ。この即時的な効果感が継続使用につながる。継続的に使用することにより配合成分の効果が徐々に高まっていく。そして効果を強く実感する。これによりリピート購買につながる。このような因子がすべてそろっていることがヒットする化粧品には大切であると考えております。

そこで技術見学会ではサイエンスの部分とアートの部分の両者を実体験できるプログラムの計画、実施を基本的な方向性と考え、これからの5年間プランニングを行ってまいります。会員の皆様には奮って技術見学会にご参加いただけますようお願いいたします。

技術見学会（渉外部会）

回数	開催日	見学先	講演:(敬称略)	参加者
第 132 回	2003.5.29	① キリンビール(株)アグリバイオカンパニー 植物開発研究所 ② 宇都宮農林公園	戸栗 敏博	43 名
第 133 回	2003.10.28	① オール・ウェスト・リサイクル(株) 鹿島工場 ② 風力発電施設		71 名
第 134 回	2004.7.5	① 味の素(株)川崎工場 ② 独立行政法人 防災科学技術研究所	「地震災害から学ぶこと」 後藤 洋三	78 名
第 135 回	2004.11.16	① 独立行政法人 海洋研究開発機構 横須賀本部 ② 独立行政法人 海洋研究開発機構 横浜研究所	「深海生物の機能と生態」 三輪 哲也	54 名
第 136 回	2005.7.12	① 生物多様性センター(富士吉田) ② 富士山レーダードーム		60 名
第 137 回	2005.12.1	① 東京都砂町水再生センター ② ANA機体メンテナンスセンター(羽田)		62 名
第 138 回	2006.7.20	① 筑波宇宙センター ② アサヒビール茨城工場	「国際宇宙ステーション開発の現状と将来」 石田 暁	73 名
第 139 回	2006.11.30	① TEPCO新エネルギーパーク ② かずさDNA研究所	「DNAは我々の生活にどう関わっているか？」 磯野 克己	53 名
第 140 回	2007.7.18	① キッコーマンむらさきの里「もの知りしょうゆ館」 ② キリンビール取手工場	「野田の地から世界の食卓へ」 増田 力	64 名
第 141 回	2007.11.21	① ポーラ美術館(箱根) ② 鈴廣かまぼこ博物館	「美術館の紹介とモネ作品について」 岩崎 余帆子	54 名



2006.7 技術見学会（筑波宇宙センター）



2007.7 技術見学会（野田キッコーマン）

教育・研修部会の活動報告 「化粧品技術基礎講習会」

部会長 林 照次

教育・研修部会では化粧品技術基礎講習会の企画・運営を担当しておりますが、この講習会は化粧品技術者会としても重要な位置を占める行事であり、東京化粧品工業会及び日本粧業会との共催行事として毎年開催しております。化粧品技術の伝承と発展に寄与することを目的として昭和 44 にスタートし、今年で 39 回目を数えるに至っておりますが、化粧品業界の第一線で活躍される方々が講師となり、若い方々に貴重な経験、知識、技術を伝えるべく多くの方々のご協力のもとに継続されてきております。

講習会で実施している講座は、当初は乳化、処方、原料、法規制といった内容が多かったようですが、最近では大学や東京都からも講師の先生方をお招きし、広範囲な内容の講座を実施しております。ちなみに、今年下記の下記の講座を実施しましたが、この内容を 3 日間で集中的に行いますので、受講される方にとっては化粧品に関する知見を広げる絶好の機会になっていると思います。また、個々の講座の内容につきましても 2 年に 1 度の見直しを行っており、常に最新のデータや情報を盛り込んだ内容にすべく努力しております。

○製品開発

「スキンケア化粧品」「メイクアップ化粧品」「紫外線ケア化粧品」「頭髮化粧品」「化粧品用香料」「容器・包装材料」「化粧品開発総論」

○有用性と品質保証

「化粧品の有用性」「化粧品の心理効果」「皮膚科学概論」「技術情報検索」「化粧品の安全性」「製品開発と品質保証」

○環境・規制・文化

「内外化粧品工業の現況」「関係法令」「最近の化粧品の広告から」「化粧の文化・歴史」

最近の傾向として、マーケティング部門や営業部門、美容教育関係者など、幅広い分野の方々のご参加に加えて、これまでにある程度化粧品関係の業務にたずさわってこられた方で、改めて化粧品に関する最近の知見を整理したいという方々も多くご参加頂いている状況です。したがって、最近 5 年間の受講者数は 571 名、597 名、584 名、619 名、645 名と増加傾向にあり、今年会場である朝日ホールの舞台の奥行きを半分にして、椅子の増設を行うという状況になっております。

今後、受講者の要望を取り入れつつ、こまめにテーマの見直しを行ない、より一層皆様の役に立つ講習会にしていきたいと考えております。

今後とも、皆様のご協力、ご支援をよろしくお願い致します。

化粧品技術基礎講習会（教育・研修部会）

(講師の敬称略)

	2003年度(第35回)6月10日～12日		2004年度(第36回)6月8日～10日	
	朝日生命ホール 571名		朝日生命ホール 595名	
第一日	開会の辞	SCCJ 東京支部 幹事長 星崎 貞夫	開会の辞	SCCJ 東京支部 幹事長 鈴木 正
	挨拶 内外化粧品工業の現況	東京化粧品工業会 専務理事 牧野 利孝	挨拶 内外化粧品工業の現況	東京化粧品工業会 専務理事 牧野 利孝
	映画(1)生命のバリア 皮膚メカニズムを科学する	(株)資生堂	映画(1)生命のバリア 皮膚メカニズムを科学する	(株)資生堂
	スキンケア化粧品	ポーラ化成工業(株) 野村 浩一	スキンケア化粧品	ポーラ化成工業(株) 野村 浩一
	紫外線ケア化粧品	(株)資生堂 畑尾 正人	紫外線ケア化粧品	(株)資生堂 畑尾 正人
	映画(2)歯・ブラッシング を科学する	ライオン(株)	映画(2)歯・ブラッシング を科学する	ライオン(株)
	メイクアップ化粧品	カネボウ(株) 山下 浩	メイクアップ化粧品	カネボウ(株) 永井 智雄
第二日	最近の化粧品の広告から	東京都健康局食品医薬品安全部薬事監視課長 田部 光宏	最近の化粧品の広告から	東京都健康局食品医薬品安全部薬事監視課長 田部 光宏
	化粧品の安全性	カネボウ(株) 柿島 博	化粧品の安全性	カネボウ(株) 柿島 博
	映画(3)界面の世界	花王(株)	映画(3)界面の世界	花王(株)
	頭髮化粧品Ⅰ(シャンプー・リンス・育毛剤)	ポーラ化成工業(株) 鎌田 勉	頭髮化粧品	(株)コーセー 伊藤 利之
	頭髮化粧品Ⅱ(スタイリング剤・パーマ・ヘアカラー類)	(株)コーセー 石田 一弘	化粧の文化・歴史	ポーラ文化研究所 村田 孝子
	化粧品の技術情報検索 (各種データベースの紹介)	(株)コーセー 木村 喜実江	化粧品の技術情報検索 (各種データベースの紹介)	(株)コーセー 木村 喜実江
	化粧品の有用性	(株)資生堂 高橋 元次	化粧品の有用性	(株)資生堂 高橋 元次
第三日	香りの科学	長谷川香料(株) 原 義郎	香りの科学	曾田香料(株) 佐野 孝太
	皮膚科学概論	東京女子医大皮膚科 助教授 檜垣 祐子	皮膚科学概論	東京女子医大皮膚科 助教授 檜垣 祐子
	容器と包装材料	花王(株) 山本 裕三	容器と包装材料	花王(株) 山本 裕三
	製品開発と品質保証	ライオン(株) 田中 賢介	製品開発と品質保証	ライオン(株) 田中 賢介
	化粧品の心理効果	(株)資生堂 阿部 恒之	化粧品の心理効果	(株)資生堂 阿部 恒之
	閉会の辞	SCCJ 東京支部 広報部会長 松尾 透	閉会の辞	SCCJ 東京支部教育研修部会長 岡田 正紀
誌上掲載	化粧の歴史	ポーラ文化研究所 村田 孝子	化粧品と関係法令	東京化粧品工業会 常務理事 塩見 保
	化粧品と関係法令	東京化粧品工業会 常務理事 塩見 保		

(講師の敬称略)

2005年度(第37回)7月5日～7日		2006年度(第38回)6月27日～29日		
有楽町朝日ホール 584名		有楽町朝日ホール 619名		
第一日	開会の辞	SCCJ 東京支部 幹事長 鈴木 正	開会の辞	SCCJ 東京支部 幹事長 松尾 透
	挨拶 内外化粧品工業の現況	東京化粧品工業会 専務理事 牧野 利孝	挨拶 内外化粧品工業の現況	東京化粧品工業会 専務理事 牧野 利孝
	映画(1)生命のバリア	(株)資生堂	映画(1)生命のバリア	(株)資生堂
	スキンケア化粧品	(株)資生堂 松崎 文昭	スキンケア化粧品	(株)資生堂 松崎 文昭
	紫外線ケア化粧品	ポーラ化成工業(株) 毛利 邦彦	紫外線ケア化粧品	ポーラ化成工業(株) 毛利 邦彦
	メイクアップ化粧品	(株)コーセー 相良 圭祐	メイクアップ化粧品	(株)コーセー 相良 圭祐
	化粧品の安全性	ポーラ化成工業(株) 太田 尚子	化粧品の安全性	ポーラ化成工業(株) 太田 尚子
第二日	化粧品の広告から	東京都健康局食品医薬品安全部薬事監視課長 中村 憲久	最近の化粧品の広告から	東京都福祉保健局健康安全室薬事監視課長 中村 憲久
	化粧品開発総論	(株)コーセー 元研究本部長 宿崎 幸一	商品開発概論	(株)井田ラボラトリーズ 能崎 章輔
	映画(2)界面の世界	花王(株)	映画(3)界面の世界	花王(株)
	頭髮化粧品	花王(株) 篠崎 孝夫	頭髮化粧品	花王(株) 篠崎 孝夫
	製品開発と品質保証	ライオン(株) 田中 賢介	製品開発と品質保証	ライオン(株) 田中 賢介
	技術情報検索	(社)化学情報協会 上野 京子	技術情報検索	(社)化学情報協会 上野 京子
	化粧品の有用性	(株)コスモステクニカル センター 岡野 由利	化粧品の有用性	(株)コスモステクニカル センター 岡野 由利
第三日	容器・包装材料	(株)カネボウ化粧品 伊勢 敦司	容器・包装材料	(株)カネボウ化粧品 伊勢 敦司
	化粧品用香料	塩野香料(株) 岡本 健	香りの科学	高砂香料工業(株) 丸山 賢次
	化粧品の心理効果	(株)資生堂 阿部 恒之	化粧品の心理効果	東北大大学院 助教授 阿部 恒之
	映画(3)歯・ブラッシングを科学する	ライオン(株)	映画(3)歯・ブラッシングを科学する	ライオン(株)
	皮膚科学概論	東京女子医大皮膚科 助教授 檜垣 祐子	皮膚科学概論	東京女子医大皮膚科 助教授 檜垣 祐子
	閉会の辞	教育・研修部会長 西山 聖二	閉会の辞	教育・研修部会長 林 照次
誌上掲載	関係法令	東京化粧品工業会 常務理事 塩見 保	化粧の文化・歴史	ポーラ文化研究所 村田 孝子
	化粧の文化・歴史	ポーラ文化研究所 村田 孝子	化粧品と関係法令	東京化粧品工業会 常務理事 塩見 保

(講師の敬称略)

2007年度(第39回)6月26日～28日		
有楽町朝日ホール 645名		
第一日	開会の辞	SCCJ東京支部 幹事長 松尾 透
	挨拶 内外化粧品工業の現況	東京化粧品工業会 専務理事 牧野 利孝
	映画(1)生命のバリア	(株)資生堂
	スキンケア化粧品	(株)コーセー 一色 隆
	紫外線ケア化粧品	(株)カネボウ化粧品 松江 浩二
	メイクアップ化粧品	(株)資生堂 南 孝司
	化粧品の安全性	花王(株) 奥田 峰広
第二日	最近の化粧品の広告から	東京都福祉保健局健康 安全室薬事監視課 町田 美紀
	化粧品開発総論	(株)井田両国堂 能崎 章輔
	映画(2)界面の世界	花王(株)
	頭髮化粧品	ライオン(株) 細川 稔
	製品開発と品質保証	(株)資生堂 知久 真巳
	技術情報検索	(社)化学情報協会 上野 京子
	化粧品の有用性	(株)コスモステクニカル センター 岡野 由利
第三日	容器・包装材料	ポーラ化成工業(株) 鈴木 智晴
	化粧品用香料	小川香料(株) 今野 悦郎
	化粧品の心理効果	東北大大学院 准教授 阿部 恒之
	映画(3)歯・ブラッシング を科学する	ライオン(株)
	皮膚科学概論	東京女子医大皮膚科 教授 檜垣 祐子
	閉会の辞	教育・研修部会長 林 照次
誌上 掲載	化粧の文化・歴史	ポーラ文化研究所 村田 孝子
	関係法令	東京化粧品工業会 常務理事 塩見 保



2007.6 第39回化粧品技術基礎講習会
(有楽町朝日ホール)

コスメ倶楽部の活動報告 「勉強会」

－活動報告と今後に向けて－

コスメ倶楽部 世話人代表 油谷 美保

コスメ倶楽部は化粧品関連各社の若手技術者からなる研究会で、1999年12月、東京化粧品技術者会(当時)学術部会Bの下部組織として約20名の会員で産声を上げました。それから8年を経た2007年11月現在、35社54名の会員から構成されており、主たる活動である勉強会は20回を越えることができました。

今回、60周年記念誌へ寄稿という光栄な機会を頂戴いたしましたので、コスメ倶楽部の活動と今後について紹介させていただきます。

コスメ倶楽部を語る上で欠かせないキーワードは「研鑽」と「交流」です。年3回実施の定例勉強会と各種交流会を通じて、個々の研鑽と会員相互の交流を重ねてまいりました。

勉強会のテーマについては別表をご参照いただいてわかるように、化粧品開発における消費者評価についてや界面化学、原料、容器等の日常の業務に直接関わるテーマから食品関連や心理といった周辺分野まで、コスメ倶楽部ならではの化粧品技術だけにとどまらない見識の広がるテーマとなるよう毎回工夫しています。

これらの勉強会へ参加し、講師の先生や会員同士で意見交換することにより非常に多くのことが得られ、それにも増して勉強会の企画担当者となって勉強会を企画・運営することが最大の研鑽の場となると感じております。

この企画担当者はメンバーの中から選出され、学術部会Bやコスメ倶楽部OBの皆様のアドバイスの下、テーマの選出、講師の先生への交渉、講演内容の決定、終了後の報告書に至るまでのすべてを行います。若手にこのような機会が与えられることは非常に貴重な経験であり、私自身の経験からも、多くの方と関わることができ、テーマや運営について多面的に考えることで学ぶところが大きかったと感じております。

今後は、化粧品業界、そして化粧品技術者会の発展により貢献していけるような会になるよう進化していきたいと考えております。現状でもコスメ倶楽部卒業生で活躍されている先輩方が徐々に増えつつあります。今後も会員だけにはとどまらない横のつながりを大切にし、日本化粧品技術者会との連携もさらに深め、さらには個々の研鑽を重ねることで業界に貢献できるよう努力してまいりたいと思います。

最後に、日ごろコスメ倶楽部を支えてくださっている学術部会B委員の皆様、事務局の室谷様、武田様、そしてコスメ倶楽部に関わってくださるすべての方々に感謝申し上げます。

今後も若手の会らしく、進化・変化し続ける会であり続けたいと願っております。皆様におかれましてはぜひ忌憚ない意見をいただけますよう、よろしくお願いいたします。

*コスメ倶楽部に興味をもたれ、主旨に賛同していただける方はぜひご入会ください。主に学術部会B主催の研究会で案内をさせていただいておりますのでお申し込み下さい。会員一同お待ちしております。若手のパワーで化粧品業界を盛り上げていきましょう！

コスメ倶楽部（勉強会）

回数	開催日	研究テーマ	講師:(敬称略)	参加者
第10回	2003.9.9 化成品会館	エニアグラム	(株)ナガイマーケティング研究所 長井 菜穂子	23名
第11回	2003.11.27 化成品会館	ライフスタイルと化粧品	美容ジャーナリスト 岸 紅子	24名
第12回	2004.2.27 化成品会館	化粧品ロコミサイトの現状と消費者意見に基づいた商品開発	(株)アイスタイル 山田 メユミ	27名
第13回	2004.6.25 化成品会館	化粧品パッケージの概要と情報伝達に関する視覚的考察	(株)カネボウ化粧品 田中 泰彦	25名
第14回	2004.9.17 (株)コスモステクニカルセンター	(株)コスモステクニカルセンター見学・講演会 「新規原料開発について」 「製品の機能性評価について」 「安全性試験について」	(株)コスモステクニカルセンター (株)ニコダームリサーチ 正木 仁・岡野 由利 栗原 浩二	23名
第15回	2004.12.3 雪印乳業(株)	雪印乳業(株)横浜工場見学・講演会 ＜別会場にて講演会＞ 「プロセスチーズの乳化について —化粧品への応用考察—」	(株)味の素タカラコーポレーション 野村 祐司	14名
第16回	2005.7.21 化成品会館	化粧品開発における消費者評価の有用性	(株)エフシージー総合研究所 菅沼 薫	29名
第17回	2005.12.9 化成品会館	化粧品製造における微生物管理と汚染防止対策	東洋大学生命科学部 助教授 岡崎 渉	26名
第18回	2006.2.14 化成品会館	メイクからスキンケアまで —コスメのトレンド予測—	VOGUE NIPPON ビューティディレクター 麻生 綾	29名
第19回	2006.9.7 化成品会館	パーソナルカラー理論と化粧品	(株)パーソナルカラー研究 スタジオ HOW トミヤマ マチコ	22名
第20回	2006.12.1 化成品会館	容器に関する基礎知識と最近のトピックス	竹本容器(株) 西藤 学	22名
第21回	2007.2.28 東京理科大 野田キャンパス	界面をデザインする・利用する・観察する	東京理科大学理工学部 助教授 酒井 秀樹	31名
第22回	2007.8.29	講師都合により中止		
第23回	2007.12.4 太陽化学(株)	おいしさを科学する	太陽化学(株) おいしさ科学館 羽木 貴志	26名
第24回	2008.2.21 化成品会館	眠りと健康について考える —食品でできること—	ライオン(株) 岩崎 英明	29名



2004.6 第13回勉強会（化成品会館）



2006.2 第18回勉強会（化成品会館）

“エルダース” 活動の概要

日本化粧品技術者会 東京支部 相談役
エルダース 世話人会
能崎 章輔

昨年のIFSCC大阪大会を前に、SCCJ会員が1500名に達した。活動目標の1つが達成されたのです。会社卒業生に、少しでも多くSCCJ会員に留まってもらえることを前提に、大阪大会のときの会員数予測をし、若い世代の方々が、それに見合う制度改革と大変な努力をしてくださって達成された目標値でした。エルダース活動がSCCJ活動の下支えになれた、決して分派活動ではなかったことが実証できたと喜びを共感しています。会の主旨にご賛同の60歳以上の会員のお問い合わせを歓迎いたします。

1. 現状と役割

現在の運営の中心は65歳以上の高齢者と、75歳以上の後期高齢者です。体力的に無理な企画はしないが、それなりの身体能力と、知的好奇心の衰えない人たちの集まりなので、講演会の話題はSCCJの活動とバッティングしないことだけを原則に、社会・文化・政治・経済・宗教・・・等々、末広がりです。世界遺産アンコールワットの講演を聴いてから、アンコールワット旅行にも行く行動力があります。世界経済と世界における日本の話題を連続テーマとして取り上げ、中国は何処に往くのだろうか、アメリカの大統領選挙はどう動く可能性があるのだろうか、と問い、イスラム問題には2回の連続講演も用意する、時局対応にも敏感な人々の集まりです。

業界人にも講演をお願いし、光井武夫さんは日本人論を、大阪の河本昌彦さんは焼き物の話を語ってくださった。自然科学分野であっても、ダニの話題は取り上げる柔軟対応、人間は、少数のわるいダニのことだけは知っているが、よいダニが沢山いて、自然循環の中で、陰ながら役立っていることもエルダースで学んだことです。講演会・懇親会の他に、見学・懇親会、国内旅行会、海外旅行会を継続している。ゴルフ同好会は発展して、昨年からは月例のゴルフ会もスタートして盛況です。

公式活動記録は別掲のとおりですが、5年間の世話人会開催は48回。2007年11月末日現在の世話人会は、田中宗男会長以下、藤山喜雄氏、石田達也氏、小野正宏氏、浅野三千秋氏、宿崎幸一氏、室谷勲氏、能崎章輔の8人で運営しています。

2. 将来と役割

65歳以上の高齢者は現在2700万人で、今後も増え続ける。その内働いている人は約500万人。少子高齢化社会は世界最速、既に人口減社会に突入している。10年後の労働力人口は1000万人以上減ると推計されている。高齢者の就業と女性の潜在労働力の発掘・確保がこの業界にも必要となろう。そのときエルダースも改めて、女性のためのイベントや女性

の世話人発掘が大きなテーマになる。これは前々からの田中会長の直感である。次の 5 年間に必ずやらねばならないことは、世話人会の世代交代、次世代へのバトンタッチ計画を実践することです。いつまでもエルダーズ(せいようにわとこ)会が老臭無用で、芳しくありたいという、意志を持ち続けられる会であるように。

総会:原則年 1 回化成品会館にて開催。 会員数:57 名(2007年11月末現在)



2007.2 音楽鑑賞会(第 27 回講演会)
(銀座 BRB)



第 30 回講演会
(化成品会館)

エルダース活動実績

<講演会・懇親会> (会場は化成品会館)

No	開催日	演題	講師:(敬称略)	参加者
第14回	2003.3.10	世界遺産アンコールワットについて	上智大学アジア文化研究所 丸井 雅子	27名
第15回	2003.7.8	日本人論 その特性と、成功、失敗の歴史	(株)資生堂顧問理事 光井 武夫	39名
第16回	2003.9.18	焼き物～芸術と科学～	(株)カス化粧品 常務取締役 河本 昌彦	38名
第17回	2004.2.24	よいダニ、わるいダニ	神奈川県立生命の星・地球 博物館館長 青木 淳一	31名
第18回	2004.4.6	わが人生;ハーモニカ、マジック	安部学園園長 (於安部学 園) 安部 恵一	30名
第19回	2004.6.15	世界柔道を語る アテネを前に柔道の昔と今	講道館 国際審議員 八段 押切 義春	24名
第20回	2004.10.15	世界経済と日本の動き	時事新聞社産業部 尾野村 祐治	35名
第21回	2005.2.23	世界を拓く日本の国際貢献	外務省参与・NGO 大使 五月女 光弘	31名
第22回	2005.6.29	笑い・日本人のユーモア	文京大学院大学講師 大島 希巳江	31名
第23回	2005.10.27	イスラーム原理主義とは何か	中東調査会参与 藤原 和彦	38名
第24回	2006.2.22	続・イスラーム原理主義とは何か	中東調査会参与 藤原 和彦	35名
第25回	2006.6.23	これからの日本と世界の動向	時事新聞社産業部 尾野村 祐次	32名
第26回	2006.11.1	タンザニアサファリ 野生動物の生態	東松山 CC 顧問 伊室 一儀	36名
第27回	2007.2.16	クラシック・コンサート	ピアニスト 丸山 匡子 他	34名
第28回	2007.6.22	和諧社会をめざす中国	早稲田大学講師 丹藤 佳紀	27名
第29回	2007.10.29	アメリカ大統領選挙はかく戦われる	外務省参与・NGO 大使 五月女 光弘	31名
第30回	2008.2.15	日本人は何処から来たか 我々の祖先の源流を探る	東京大学教養学部非常勤 講師 小田 静夫	36名

<見学会・懇親会>

No	開催日	テーマ	宴会場	参加者
第7回	2003.4.3	桜花の上野公園散策と懇親会	東天紅(上野)	23名
第8回	2004.4.6	飛鳥公園桜見会	山海亭(王子)	28名
第9回	2005.4.4	桜花の上野公園散策と懇親会	東天紅(上野)	23名
第10回	2006.4.11	桜花の上野公園散策と懇親会	東天紅(上野)	22名
第11回	2007.4.4	桜花の上野公園散策と懇親会	東天紅(上野)	21名

国内(宿泊)旅行会

No	開催日	場所	宿	参加者
第4回	2003.11.30~12.1	湯河原温泉	大景	23名
第5回	2004.12.5~6	湯河原温泉	大景	21名
第6回	2005.8.21~23	塩原温泉	ニュー八汐	23名
第7回	2005.12.4~4	湯河原温泉	大景	19名
第8回	2006.8.20~21	北茨城市	二ッ島観光ホテル	25名
第9回	2006.12.3~4	箱根湯本温泉	橘	21名
第10回	2007.8.19~21	草津温泉	ニュー紅葉	23名
第11回	2007.11.6~7	浅草	貞千代	14(+8)名

海外旅行会

No	開催日	旅行地	旅行日数	参加者
第2回	2003.3.26~31	ホーチミン市・アンコールワット	5泊6日(機中1泊)	14名
第3回	2005.9.11~17	西安、桂林、北京	6泊7日	14名



2005.8 第6回旅行会
(塩原温泉・ニュー入汐)



2005.9 第3回海外旅行会
(西安・青龍寺)



2006.12 第9回旅行会
(箱根の帰路・鎌倉)

【資料】

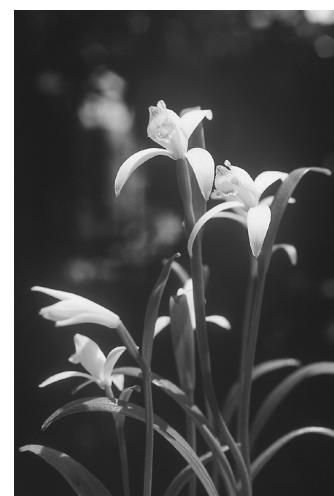
会議年表(議題項目)

2003年度(平成15年度)

開催日	会議名・場所(人数)	議題
2003.4.18	東京支部総会 ロイヤルパークホテル(232名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会務報告 ・ 会計報告&監査報告 ・ 2003年度事業計画&予算提案 ・ 2003年度幹事選出 ・ 永年表彰
2003.7.15	幹事会 化粧品会館(20名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京支部人事関係 ・ 入会者承認 ・ 「訃報対応」内規見直し ・ 会員増プロジェクト報告
2003.7.15	合同会議 化粧品会館(47名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京支部人事関係 ・ 第35回化粧品基礎技術講習会報告 ・ 部会活動報告、本部報告 ・ 会員増プロジェクト報告
2004.1.30	幹事会 熱海聚楽ホテル(19名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2004年度幹事選挙について ・ 部会活動報告 ・ 本部報告
2004.1.30	合同会議 熱海聚楽ホテル(37名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2004年度幹事選挙について ・ 部会活動報告 ・ 本部報告
2004.3.22	幹事会 化粧品会館(16名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入会者承認 ・ 幹事選挙結果について ・ 2004年度人事案の検討 ・ 2003年度決算案&次年度予算案
2004.3.22	合同会議 化粧品会館(46名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2004年度幹事選挙結果について ・ 2004年度委員案について ・ 東京支部規約改定について ・ 2004年度支部総会について

2004年度(平成16年度)

開催日	会議名・場所(人数)	議題
2004.4.16	東京支部総会 ホテルニューオータニ(232名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会務報告 ・ 会計報告&監査報告 ・ 2004年度事業計画&予算提案 ・ 2004年度幹事選出 ・ 永年表彰
2004.7.22	幹事会 赤坂プリンスホテル(21名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京支部人事関係 ・ 入会者承認 ・ 新会員制度に伴う会員数動向
2004.7.22	合同会議 赤坂プリンスホテル(45名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京支部人事関係 ・ 第36回化粧品基礎技術講習会報告 ・ 部会活動報告 ・ 本部報告
2005.1.28	合同会議 ウェスティンホテル(39名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2005年度幹事選挙について ・ 部会活動報告 ・ 本部報告
2005.3.25	幹事会 化粧品会館(22名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入会者承認 ・ 幹事選挙結果について ・ 2005年度人事案の検討 ・ 2004年度決算案&次年度予算案
2005.3.25	合同会議 化粧品会館(53名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2005年度幹事選挙結果について ・ 2005年度委員案について ・ 2004年度活動報告 ・ 2005年度支部総会について



トキソウ
(朱鷺草)

2005年度(平成17年度)

開催日	会議名・場所(人数)	議題
2005.4.20	東京支部総会 ホテルオークラ東京(285名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会務報告 ・ 会計報告&監査報告 ・ 2005年度事業計画&予算提案 ・ 2005年度幹事選出 ・ 永年表彰
2005.7.28	幹事会 新高輪プリンスホテル(24名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京支部人事関係 ・ 入会者承認 ・ 総会&基礎講習会 会計報告
2005.7.28	合同会議 新高輪プリンスホテル(48名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京支部人事関係 ・ 第37回化粧品基礎技術講習会報告 ・ 部会活動報告 ・ 本部報告
2006.1.25	幹事会 化成品会館(17名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2006年度幹事選挙について ・ 入会者承認 ・ 本部報告
2006.1.25	合同会議 化成品会館(46名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2006年度幹事選挙について ・ 部会活動報告 ・ SCCJ本部規約改正について
2006.3.23	幹事会 化成品会館(25名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入会者承認 ・ 幹事選挙結果について ・ 2006年度人事案の検討 ・ 2005年度決算案&次年度予算案 ・ SCCJ本部規約改正について
2006.3.23	合同会議 化成品会館(50名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2006年度幹事選挙結果について ・ 2006年度委員案について ・ 2005年度決算案&次年度予算案 ・ 2005年度入・退会者数まとめ報告 ・ 本部報告

2006年度(平成18年度)

開催日	会議名・場所(人数)	議題
2006.4.26	東京支部総会 ホテルオークラ東京(269名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会務報告 ・ 会計報告&監査報告 ・ 2006年度事業計画&予算提案 ・ 2006年度幹事選出 ・ 永年表彰
2006.7.19	幹事会 ホテルオークラ東京(24名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東京支部人事関係 ・ 入会者承認 ・ 支部規約改定について
2006.7.19	合同会議 ホテルオークラ東京(49名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支部規約改定について ・ 部会活動報告 ・ 本部報告、支部事務局報告
2007.1.24	幹事会 タワーホール船堀(20名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2007年度幹事選挙について ・ 入会者承認 ・ 支部規約改定について
2007.1.24	合同会議 タワーホール船堀(43名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2007年度幹事選挙について ・ 部会活動報告 ・ SCCJ本部規約改正について ・ 常議員プロジェクト(支部活性化検討)報告 ・ 本部報告、支部事務局報告
2007.3.22	幹事会 ホテルはあといん乃木坂(20名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入会者承認 ・ 幹事選挙結果報告 ・ 2007年度人事案の検討 ・ 2006年度決算案&次年度予算案
2007.3.22	合同会議 ホテルはあといん乃木坂(52名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2007年度幹事選挙結果報告 ・ 2007年度委員案について ・ 2006年度決算案&次年度予算案 ・ 2006年度入・退会者数まとめ報告 ・ 本部報告



セッコク (石斛)

2007年度(平成19年度)

開催日	会議名・場所(人数)	議題
2007.4.20	東京支部総会 花巻温泉ホテル千秋閣(206名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会務報告 ・ 会計報告&監査報告 ・ 2007年度事業計画&予算提案 ・ 2007年度幹事選出 ・ 永年表彰
2007.7.19	幹事会 ホテルオークラ東京(24名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入会者承認 ・ 入退会経過状況報告 ・ 支部60周年記念誌発行について ・ 2008年度の本部および支部総会に関して
2007.7.19	合同会議 ホテルオークラ東京(51名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支部60周年記念誌発行について ・ 部会活動報告 ・ 常議員プロジェクト(支部活性化検討)報告 ・ 2008年度の本部および支部総会に関して
2008.1.29	幹事会 タワーホール船堀(24名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2008年度幹事選挙について ・ 入会者承認
2008.1.29	合同会議 タワーホール船堀(44名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2008年度幹事選挙について ・ 部会活動報告 ・ 本部報告、支部事務局報告
(2008.3.25) 予定	幹事会 ホテルはあといん乃木坂	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入会者承認 ・ 幹事選挙結果報告 ・ 2008年度支部体制(人事案)の検討 ・ 2007年度決算案&次年度予算案
(2008.3.25) 予定	合同会議 ホテルはあといん乃木坂	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2008年度幹事選挙結果報告 ・ 2008年度委員案について ・ 2007年度決算案&次年度予算案 ・ 2007年度入・退会者数まとめ報告 ・ 本部報告



2007.4 支部総会(花巻温泉・千秋閣)

永年会員表彰者

<25年永年会員>

2003年度(平成15年度)

会田 康二	(株)コスメティック・アイダ	浅越 亨	長谷川香料(株)
岡本 暉公彦	東京理科大学	佐野 功	アサヌマコーポレーション(株)
門倉 和夫	(株)黒龍堂	高橋 隆治	木村産業(株)
中原 利之	日光ケミカルズ(株)	西島 靖	カネボウ(株)
細川 隼人	小川香料(株)	松浦 澄	岩瀬コスファ(株)

2004年度(平成16年度)

会田 充敏	アイダインターナショナル(株)	風間 成孔	大塚薬品工業(株)
加藤 紀元	(株)マーナーコスメチックス	菊地 興治	(株)リュミエリーナ
高谷 宏	鈴木色材工業(株)	田端 勇仁	日光ケミカルズ(株)
益田 定省	プレスコ(株)	武藤 浩子	(元)エステーローター グループ オブ カンパニース(株)

2005年度(平成17年度)

尾澤 達也	(株)資生堂	勝倉 信哉	ムッシュカツクラ・コスメティックリサーチ
永澤 久直	(株)八重樫本舗	平井 太一郎	日本ゼトック(株)
堀川 弘海	個人会員(元(株)資生堂)	宮下 忠芳	(株)クリエーションアルコス

2006年度(平成18年度)

阿部 哲也	(株)メディコス・インターナショナル	金丸 弘之	エステー化学(株)
鈴木 正人	王子製薬(株)	瀬戸 雄二	(株)ユゼ
千葉 勝由	(株)ヤクルト本社	豊田 俊彦	カネダ(株)
山本 策子	(株)近代化粧品研究所	湯浅 正治	ユアサエステティックサイエンス研究所
和田 惇	個人会員		

2007年度(平成19年度)

久米 賢次	(財)日本食品分析センター	西谷 ひろ子	友悠アカデミー
古川 利正	(有)シー・ティ・シー・ジャパン	宮村 光義	(株)ミラ
山下 明久	(株)コスメティック・アイダ		

会員物故者

2003年度(平成15年度)

大谷 泰永	カネボウ(株) 前 東京支部幹事長	菊地 潔	東京支部顧問
小森 雄二	曾田香料(株)	佐藤 新一	東京支部相談役
古瀬 一磨	東京支部顧問		

2004年度(平成16年度)

松浦 悦子	東京支部顧問	田原 定明	(株)資生堂
河野 武	(株)ホワイトリリー		

2005年度(平成17年度)

島津 明德	(株)伊勢半	高橋 定雄	三井化学ファイン(株)
富田 稔	個人会員(常議員)		

2006年度(平成18年度)

井上 哲夫	(社)日本毛髪科学協会	奈須野 俊廣	(株)ファンケル
-------	-------------	--------	----------

2007年度(平成19年度)

渡邊 克寛	山栄化学(株)	坂野 憲司	東京支部顧問
-------	---------	-------	--------

会員数の変遷

① 東京支部 会員数動向

	全体	正会員	準会員	シニア会員	相談役・顧問
2002年3月末	884	869			15
2003年3月末	891	875			16
2004年3月末	910	897			13
2005年3月末	984	869(88.3%)	43(4.4%)	56(5.7%)	16(1.6%)
2006年3月末	1047	896(85.6%)	55(5.3%)	78(7.4%)	18(1.7%)
2007年3月末	1040	886(85.2%)	58(5.6%)	77(7.4%)	19(1.8%)
2008年2月	1062	909(85.6%)	52(4.9%)	82(7.7%)	19(1.8%)

② 東京支部 入・退会者動向

	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
入会者	113	178	147	125	102(2月現在)
退会者	94	104	92	111	79(1月末現在)

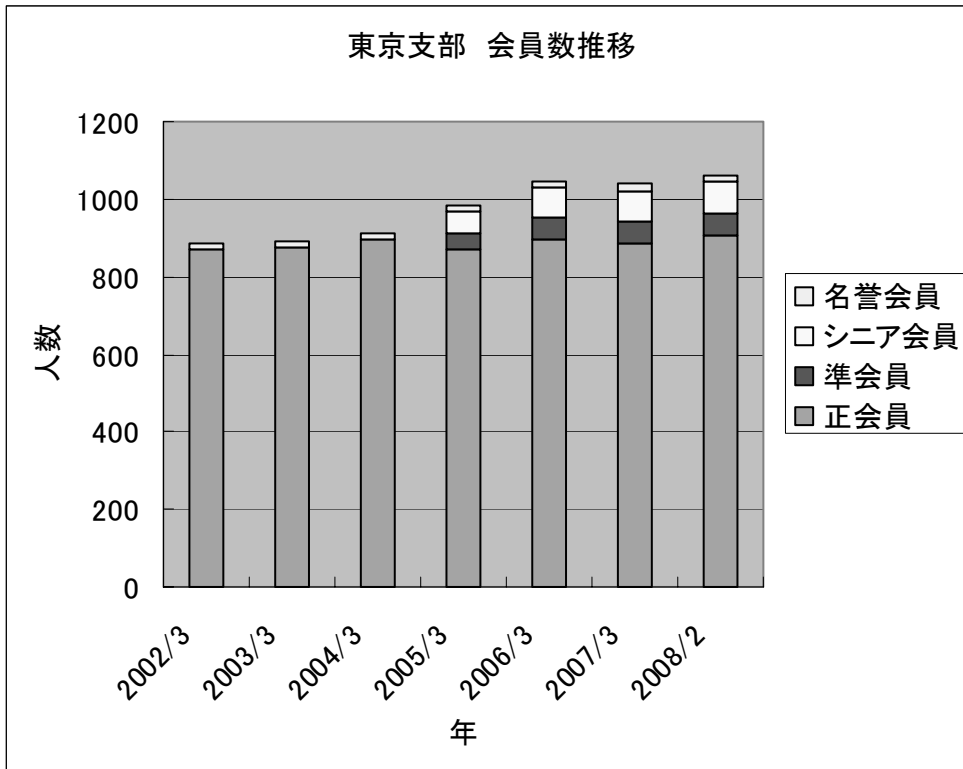
③ 日本化粧品技術者会 総会員数(2008年2月5日現在)

		全体	正会員	準会員	シニア会員	相談役・顧問
全体 (日本)	男性	1357(88.6%)	1196(89.5%)	40(60.6%)	93(93.0%)	28(100.0%)
	女性	174(11.4%)	141(10.5%)	26(39.4%)	7(7.0%)	0(0%)
	計	1531	1337	66	100	28
東京 支部	男性	923(86.9%)	796(87.6%)	33(63.5%)	75(91.5%)	19(100.0%)
	女性	139(13.1%)	113(12.4%)	19(36.5%)	7(8.5%)	0(0%)
	計	1062	909	52	82	19
大阪 支部	男性	434(92.5%)	400(93.5%)	7(50.0%)	18(100.0%)	9(100.0%)
	女性	35(7.5%)	28(6.5%)	7(50.0%)	0(0%)	0(0%)
	計	469	428	14	18	9

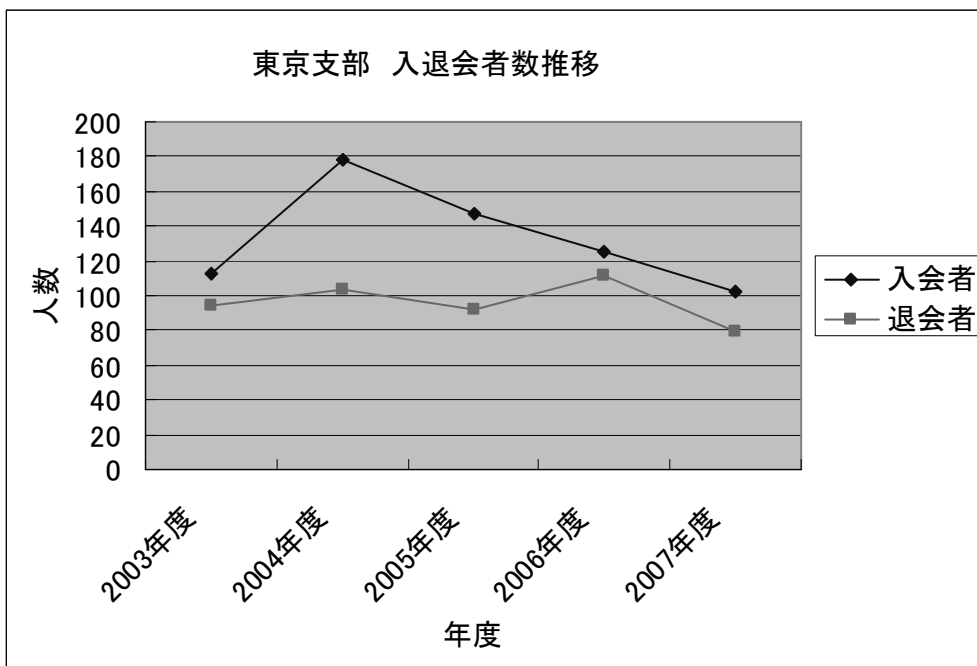
④ 会員構成企業数(毎年名簿作成時:6~8月)

	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
全体(日本)	627	644	673	690	690
東京支部	442	450	466	477	480
大阪支部	245	255	268	277	274
両支部在籍	60	61	61	64	64

東京支部 会員数推移



東京支部 入退会者数推移 (2007年度は仮)



役員・幹事・常議員

2003年度(平成15年度)

幹事長	星崎 貞夫	(株)ポーラ化粧品本舗				
副幹事長	鈴木 正	(株)コーセー	山口 道廣	(株)資生堂		
会計幹事	加瀬 大明	癸巳化成(株)	嶋原 靖宏	東色ピグメント(株)		
幹事	浅越 亨	長谷川香料(株)	岡田 正紀	ポーラ化成工業(株)	久米 賢次	(財)日本食品分析センター
	小出 倫正	ライオン(株)	小暮つた枝	エル・シー・エス(株)	坂本 一民	味の素(株)
	櫻井 和俊	高砂香料工業(株)	菅沼 薫	フジテレビ商品研究所	杉田 秀樹	(株)コーセー
	鈴木 敏幸	花王(株)	高橋 守	(株)伊勢半	高橋 元次	(株)資生堂
	谷口 秀明	エステローダーグループオブカンパニース(株)			正木 仁	日光ケミカルズ(株)
	松尾 透	カネボウ(株)				
常議員	青柳 伸子	エル・シー・エス(株)	荒瀬 敏則	みづほ工業(株)	伊東 進	ナイスコーラボ(有)
	小川 等	エステローダーグループオブカンパニース(株)			金内 哲郎	(株)吉野工業所
	川島 勝郎	ホシケミカルズ(株)	熊谷 重則	(株)日本色材工業研究所	隈元 浩康	高砂香料工業(株)
	蔵田 淑子	(株)コスモステクニカルセンター	佐川幸一郎	味の素(株)	佐藤 隆三	(株)マツモト交商
	須田 光一	カネダ(株)	高田 康二	ライオン(株)	田上 権一	(株)ヤクルト本社
	高橋 巨幸	(株)井田ラボラトリーズ	高橋 稔	(株)コーセー	滝口 照夫	癸巳化成(株)
	田島 洋一	(株)アリミノ	富田 稔	個人	西山 聖司	(株)資生堂
	根岸 修治	ポーラ化成工業(株)	根本 利之	花王(株)	張替 均	曾田香料(株)
	細川 隼人	小川香料(株)	三上 直子	(株)味の素タカラコーポレーション		
	村上 泉子	カネボウ(株)	吉岡 隆嗣	岩瀬コスファ(株)	吉沢 清	(株)アルビオン
	吉永 幸浩	特殊機化工業(株)				

2004年度(平成16年度)

幹事長	鈴木 正	(株)コーセー				
副幹事長	松尾 透	(株)カネボウ化粧品	山口 道廣	(株)資生堂		
会計幹事	加瀬 大明	癸巳化成(株)	嶋原 靖宏	東色ピグメント(株)		
幹事	浅越 亨	長谷川香料(株)	岡田 正紀	ポーラ化成工業(株)	熊谷 重則	(株)日本色材工業研究所
	久米 賢次	(財)日本食品分析センター	小出 倫正	ライオン(株)	小暮つた枝	エル・シー・エス(株)
	櫻井 和俊	高砂香料工業(株)	菅沼 薫	フジテレビ商品研究所	鈴木 敏幸	花王(株)
	高橋 守	(株)伊勢半	高橋 稔	(株)コーセー	西山 聖司	(株)資生堂
	谷口 秀明	エステローダーグループオブカンパニース(株)			正木 仁	日光ケミカルズ(株)
	青柳 伸子	エル・シー・エス(株)	荒瀬 敏則	みづほ工業(株)	伊東 進	ナイスコーラボ(有)
常議員	一戸美加子	(株)トキワ	小川 等	エステローダーグループオブカンパニース(株)		
	小名木 稔	(株)コーセー	川島 勝郎	ホシケミカルズ(株)	隈元 浩康	高砂香料工業(株)
	蔵田 淑子	(株)コスモステクニカルセンター	佐川幸一郎	味の素(株)	佐藤 隆三	(株)マツモト交商
	須田 光一	カネダ(株)	高田 康二	ライオン(株)	高橋 和彦	東色ピグメント(株)
	高橋 和久	(株)日本色材工業研究所	高橋 巨幸	(株)井田ラボラトリーズ	田上 権一	(株)ヤクルト本社
	滝口 照夫	癸巳化成(株)	竹本 笑子	竹本容器(株)	田島 洋一	(株)アリミノ
	富田 稔	個人	根本 利之	花王(株)	野村 浩一	ポーラ化成工業(株)
	張替 均	曾田香料(株)	三上 直子	(株)味の素タカラコーポレーション		
	村上 泉子	(株)カネボウ化粧品	梁木 利男	(株)資生堂	吉岡 隆嗣	岩瀬コスファ(株)
	吉沢 清	(株)アルビオン	吉永 幸浩	特殊機化工業(株)		

2005年度(平成17年度)

幹事長	鈴木 正	(株)コーセー				
副幹事長	松尾 透	(株)カネボウ化粧品	山口 道廣	(株)資生堂		
会計幹事	加瀬 大明	癸巳化成(株)	嶋原 靖宏	東色ピグメント(株)		
幹事	浅越 亨	長谷川香料(株)	岩渕 久男	ポーラ化成工業(株)	熊谷 重則	(株)日本色材工業研究所
	久米 賢次	(財)日本食品分析センター	小出 倫正	ライオン(株)	小暮つた枝	エル・シー・エス(株)
	櫻井 和俊	高砂香料工業(株)	菅沼 薫	フジテレビ商品研究所	鈴木 敏幸	花王(株)
	高橋 守	(株)伊勢半	高橋 稔	(株)コーセー	辻 尚志	味の素(株)
	谷口 秀明	エステローダーグループオブカンパニース(株)			西山 聖司	(株)資生堂
	林 照次	(株)カネボウ化粧品	正木 仁	日光ケミカルズ(株)		
常議員	飴井 慎介	みづほ工業(株)	伊東 進	ナイスコーラボ(有)	一戸美加子	(株)トキワ
	小川 等	エステローダーグループオブカンパニース(株)			小名木 稔	(株)コーセー
	川島 勝郎	ホシケミカルズ(株)	川戸 淳司	岩瀬コスファ(株)	隈元 浩康	高砂香料工業(株)
	蔵田 淑子	(株)コスモステクニカルセンター	佐川幸一郎	味の素(株)	佐藤 隆三	(株)マツモト交商
	須田 光一	カネダ(株)	高田 康二	ライオン(株)	高橋 和彦	東色ピグメント(株)
	高橋 和久	(株)日本色材工業研究所	高橋 巨幸	(株)井田ラボラトリーズ	滝口 照夫	癸巳化成(株)
	竹本 笑子	竹本容器(株)	田島 洋一	(株)アリミノ	富田 稔	個人
	根本 利之	花王(株)	野村 浩一	ポーラ化成工業(株)	張替 均	曾田香料(株)
	三上 直子	(株)味の素タカラコーポレーション			村上 泉子	(株)カネボウ化粧品
	梁木 利男	(株)資生堂	横井 克士	(株)ヤクルト本社	吉沢 清	(株)アルビオン
	吉永 幸浩	特殊機化工業(株)				

2006年度(平成18年度)

幹事長	松尾 透	(株)カネボウ化粧品				
副幹事長	中村 直生	ポーラ化成工業(株)	山口 道廣	(株)資生堂		
会計幹事	加瀬 大明	癸巳化成(株)	嶋原 靖宏	東色ピグメント(株)		
幹事	浅越 亨	長谷川香料(株)	荒木 徳博	ポーラ化成工業(株)	熊谷 重則	(株)日本色材工業研究所
	久米 賢次	(財)日本食品分析センター	小暮つた枝	エル・シー・エス(株)	櫻井 和俊	高砂香料工業(株)
	菅沼 薫	フジテレビ商品研究所	鈴木 敏幸	花王(株)	高橋 守	(株)伊勢半
	高橋 稔	(株)コーセー	田中 孝祐	ライオン(株)	辻 尚志	味の素(株)
	谷口 秀明	エステローダーグループオブカンパニース(株)			林 照次	(株)カネボウ化粧品
	正木 仁	日光ケミカルズ(株)	米山 俊夫	(株)資生堂		
常議員	飴井 慎介	みづほ工業(株)	伊東 進	ナイスコーラボ(有)	一戸美加子	(株)トキワ
	小川 等	エステローダーグループオブカンパニース(株)			小名木 稔	(株)コーセー
	加瀬 大介	癸巳化成(株)	片岡 正行	曾田香料(株)	川島 勝郎	ホシケミカルズ(株)
	川戸 淳司	岩瀬コスファ(株)	隈元 浩康	高砂香料工業(株)	小林 達朗	日本リレント化粧品(株)
	佐藤 隆三	(株)マツモト交商	須田 光一	カネダ(株)	高田 康二	ライオン(株)
	高橋 和彦	東色ピグメント(株)	高橋 和久	(株)日本色材工業研究所	高橋 巨幸	(株)井田ラボラトリーズ
	瀧野 嘉延	味の素(株)	竹本 笑子	竹本容器(株)	田島 洋一	(株)アリミノ
	東久保和雄	(株)資生堂	難波 富幸	(株)コスモステクニカルセンター	根本 利之	花王(株)
	野村 浩一	ポーラ化成工業(株)	三上 直子	味の素ヘルシーサプライ(株)	村上 泉子	(株)カネボウ化粧品
	横井 克士	(株)ヤクルト本社	吉沢 清	(株)アルビオン	吉永 幸浩	ブライミクス(株)

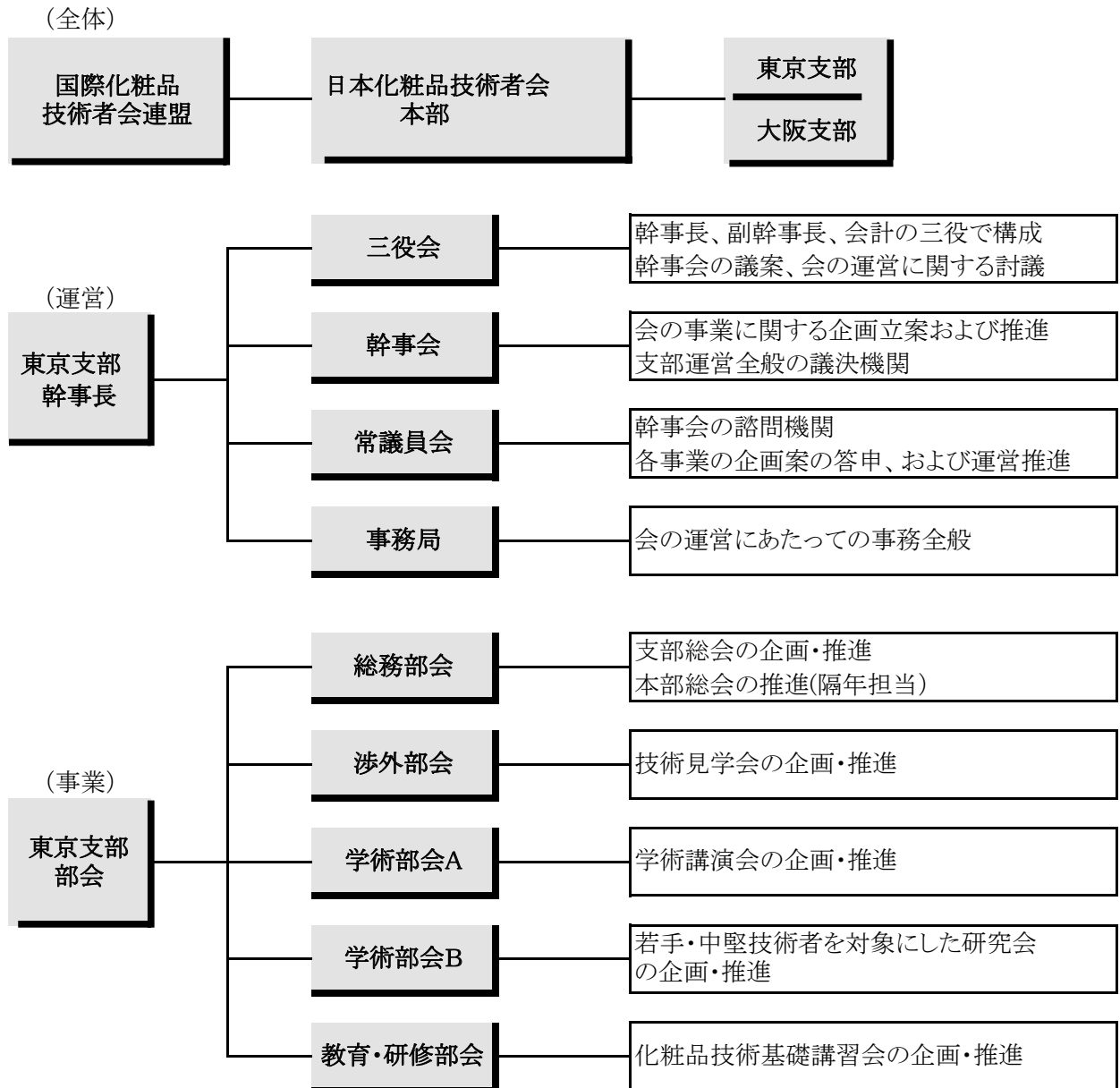
* 期中交代(三上直子→中西紀元)

2007年度(平成19年度)

幹事長	松尾 透	(株)カネボウ化粧品				
副幹事長	中村 直生	ポーラ化成工業(株)	米山 俊夫	(株)資生堂		
会計幹事	加瀬 大明	癸巳化成(株)	嶋原 靖宏	東色ピグメント(株)		
幹事	浅越 亨	長谷川香料(株)	岩崎 敬治	味の素(株)	熊谷 重則	(株)日本色材工業研究所
	隈元 浩康	高砂香料工業(株)	久米 賢次	(財)日本食品分析センター	小暮つた枝	エル・シー・エス(株)
	菅沼 薫	フジテレビ商品研究所	鈴木 敏幸	花王(株)	高橋 守	個人
	田中 孝祐	ライオン(株)	谷口 秀明	エステローターグループオブカンパニーズ(株)		
	東久保和雄	(株)資生堂	内藤 昇	(株)コーセー	野村 浩一	ポーラ化成工業(株)
	林 照次	(株)カネボウ化粧品	正木 仁	日光ケミカルズ(株)		
常議員	飴井 慎介	みづほ工業(株)	伊東 進	ナイスーコラボ(有)	石田 賢哉	高砂香料工業(株)
	一戸美加子	(株)トキワ	岩崎 泰夫	ポーラ化成工業(株)	小名木 稔	(株)コーセー
	小川 等	エステローターグループオブカンパニーズ(株)			加瀬 大介	癸巳化成(株)
	片岡 正行	曾田香料(株)	川島 勝郎	ホンケミカルズ(株)	川戸 淳司	岩瀬コスファ(株)
	小出 操	ライオン(株)	小林 達朗	日本リレント化粧品(株)	佐藤 隆三	(株)マツモト交商
	島谷 庸一	(株)資生堂	須田 光一	カネダ(株)	高橋 和彦	東色ピグメント(株)
	高橋 和久	(株)日本色材工業研究所	瀧野 嘉延	味の素(株)	竹本 笑子	竹本容器(株)
	田島 洋一	(株)アリミノ	中西 紀元	味の素ヘルシーサプライ(株)	根本 利之	花王(株)
	前野 広史	(株)コスモステクニカルセンター	村上 泉子	(株)カネボウ化粧品	横井 克士	(株)ヤクルト本社
	吉沢 清	(株)アルビオン	吉永 幸浩	プライミクス(株)		

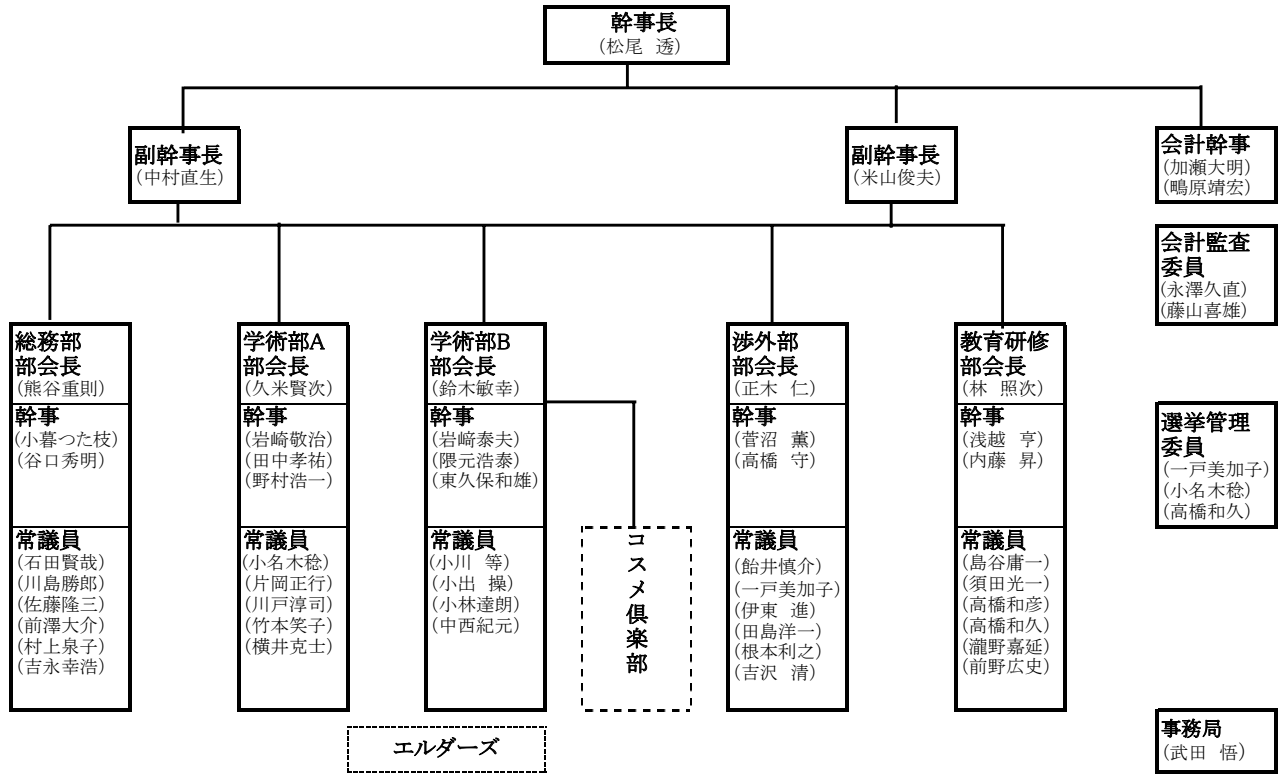
組織図・委員

組織と機能



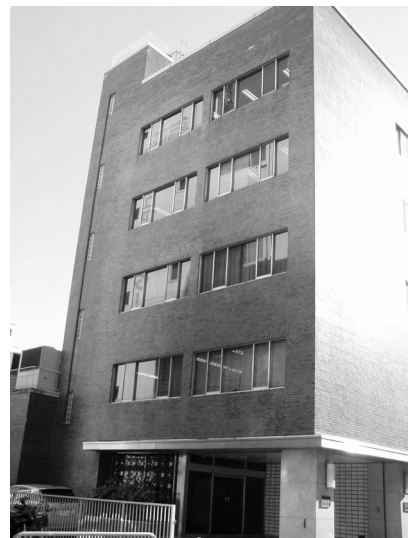
* 部会：幹事会から任命され、部会長を中心に幹事・常議員から構成される。

組織構成と委員 (2008年3月現在)



相談役 : 石田 達也 尾澤 達也 佐藤 健 田中 宗男 能崎 章輔 廣田 博 星崎 貞夫 光井 武夫

顧問 : 浅野三千秋 岡本暉公彦 小野 正宏 見城 一敏 斉藤 光夫 篠原 英雄 土門 徹 永澤 久直
藤山 喜雄 丸山 敏夫 山口 道廣



日本化粧品技術者会
東京支部 (化成品会館)

相談役・顧問

(敬称略)

2003年 (平成15年)	相談役	石田 達也	尾澤 達也	佐藤 健	田中 宗男	廣田 博	光井 武夫
	顧問	浅野 三千秋	小野 正宏	菊地 潔	斉藤 光夫	坂野 憲司	土門 徹
2004年 (平成16年)	相談役	石田 達也	尾澤 達也	佐藤 健	田中 宗男	能崎 章輔	廣田 博
	顧問	浅野 三千秋	小野 正宏	見城 一敏	斉藤 光夫	坂野 憲司	篠原 英雄
2005年 (平成17年)	相談役	石田 達也	尾澤 達也	佐藤 健	田中 宗男	能崎 章輔	廣田 博
	顧問	浅野 三千秋	岡本暉公彦	小野 正宏	見城 一敏	斉藤 光夫	坂野 憲司
2006年 (平成18年)	相談役	石田 達也	尾澤 達也	佐藤 健	田中 宗男	能崎 章輔	廣田 博
	顧問	浅野 三千秋	岡本暉公彦	小野 正宏	見城 一敏	斉藤 光夫	坂野 憲司
2007年 (平成19年)	相談役	石田 達也	尾澤 達也	佐藤 健	田中 宗男	能崎 章輔	廣田 博
	顧問	浅野 三千秋	岡本暉公彦	小野 正宏	見城 一敏	斉藤 光夫	坂野 憲司

会計監査委員

2003年(平成15年)	小野 正宏	丸山 敏夫
2004年(平成16年)	藤山 喜雄	丸山 敏夫
2005年(平成17年)	藤山 喜雄	丸山 敏夫
2006年(平成18年)	藤山 喜雄	永澤 久直
2007年(平成19年)	藤山 喜雄	永澤 久直

選挙管理委員

2003年(平成15年)	高田 康二	田島 洋一	三上 直子
2004年(平成16年)	高田 康二	田島 洋一	三上 直子
2005年(平成17年)	高橋 和久	田島 洋一	三上 直子
2006年(平成18年)	高橋 和久	一戸美加子	小名木 稔
2007年(平成19年)	高橋 和久	一戸美加子	小名木 稔

事務局

～2005年(平成17年)	室谷 勲
2006年(平成18年)	室谷 勲 武田 悟
2007年(平成19年)～	武田 悟

部会委員(2003年~2007年)

◎ 部会長

2003年 (平成15年)	総務部会	◎高橋 守	青柳 伸子	川島 勝郎	櫻井 和俊	谷口 秀明
			富田 稔	村上 泉子	吉永 幸浩	
	渉外部会	◎菅沼 薫	荒瀬 敏則	伊東 進	金内 哲郎	佐藤 隆三
			杉田 秀樹	細川 隼人	高橋 巨幸	吉沢 清
	学術部会A	◎久米 賢次	小川 等	小出 倫正	坂本 一民	田上 権一
		根岸 修治	張替 均	正木 仁	吉岡 隆嗣	
学術部会B	◎鈴木 敏幸	熊谷 重則	隈元 浩康	小暮つた枝	佐川幸一郎	
		高田 康二	滝口 照夫	西山 聖二	三上 直子	
広報部会	◎松尾 透	浅越 亨	岡田 正紀	蔵多 淑子	須田 光一	
		高橋 稔	高橋 元次	田島 洋一	根本 利之	
2004年 (平成16年)	総務部会	◎高橋 守	青柳 伸子	川島 勝郎	櫻井 和俊	谷口 秀明
			富田 稔	村上 泉子	吉永 幸浩	
	渉外部会	◎高橋 稔	荒瀬 敏則	一戸美加子	伊東 進	佐藤 隆三
			菅沼 薫	高橋 巨幸	根本 利之	吉沢 清
	学術部会A	◎久米 賢次	小川 等	小出 倫正	田上 権一	竹本 笑子
		張替 均	野村 浩一	正木 仁	吉岡 隆嗣	
学術部会B	◎鈴木 敏幸	熊谷 重則	隈元 浩康	小暮つた枝	佐川幸一郎	
		高田 康二	滝口 照夫	三上 直子	梁木 利男	
教育・研修部会	◎岡田 正紀	浅越 亨	小名木 稔	蔵多 淑子	須田 光一	
		高橋 和彦	高橋 和久	田島 洋一	西山 聖二	
2005年 (平成17年)	総務部会	◎高橋 守	川島 勝郎	小暮つた枝	櫻井 和俊	佐藤 隆三
			谷口 秀明	富田 稔	村上 泉子	吉永 幸浩
	渉外部会	◎高橋 稔	飴井 慎介	一戸美加子	伊東 進	菅沼 薫
			高橋 巨幸	辻 尚志	根本 利之	吉沢 清
	学術部会A	◎久米 賢次	小川 等	川戸 淳司	小出 倫正	竹本 笑子
		野村 浩一	正木 仁	横井 克士		
学術部会B	◎鈴木 敏幸	熊谷 重則	隈元 浩康	佐川幸一郎	高田 康二	
		滝口 照夫	三上 直子	梁木 利男		
教育・研修部会	◎西山 聖二	浅越 亨	岩渕 久男	小名木 稔	蔵多 淑子	
		須田 光一	高橋 和彦	高橋 和久	田島 洋一	
		林 照次				
2006年 (平成18年)	総務部会	◎高橋 守	加瀬 大介	川島 勝郎	小暮つた枝	櫻井 和俊
			佐藤 隆三	谷口 秀明	村上 泉子	吉永 幸浩
	渉外部会	◎高橋 稔	飴井 慎介	一戸美加子	伊東 進	菅沼 薫
			高橋 巨幸	辻 尚志	根本 利之	吉沢 清
	学術部会A	◎久米 賢次	小川 等	片岡 正行	川戸 淳司	竹本 笑子
		田中 孝祐	野村 浩一	正木 仁	横井 克士	
学術部会B	◎鈴木 敏幸	熊谷 重則	隈元 浩康	小林 達朗	高田 康二	
		瀧野 嘉延	東久保和雄	中西 紀元		
教育・研修部会	◎林 照次	浅越 亨	荒木 徳博	小名木 稔	須田 光一	
		高橋 和彦	高橋 和久	田島 洋一	難波 富幸	
		米山 俊夫				
2007年 (平成19年)	総務部会	◎熊谷 重則	石田 賢哉	川島 勝郎	小暮つた枝	佐藤 隆三
			谷口 秀明	前澤 大介	村上 泉子	吉永 幸浩
	渉外部会	◎正木 仁	飴井 慎介	一戸美加子	伊東 進	菅沼 薫
			高橋 守	田島 洋一	根本 利之	吉沢 清
	学術部会A	◎久米 賢次	岩崎 敬治	小名木 稔	片岡 正行	川戸 淳司
		竹本 笑子	田中 孝祐	野村 浩一	横井 克士	
学術部会B	◎鈴木 敏幸	岩崎 泰夫	小川 等	隈元 浩康	小出 操	
		小林 達朗	東久保和雄	中西 紀元		
教育・研修部会	◎林 照次	浅越 亨	島谷 庸一	須田 光一	高橋 和彦	
		高橋 和久	瀧野 嘉延	内藤 昇	前野 広史	

日本化粧品技術者会 東京支部規約

第一章 総則（本部規約に準拠）

第1条（名称）

本支部は、日本化粧品技術者会東京支部(Tokyo Chapter of the Society of Cosmetic Chemists of Japan)と称する。

第2条（目的）

本会は、化粧品及び関連の科学技術の進歩向上に貢献すると共に、会員相互の交流と啓発を図る為の事業を行い、内外化粧品産業の発展に寄与することを目的とする。

第3条（事業）

本支部は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 1) 化粧品科学に関する研究会・講習会・講演会・見学会
- 2) 内外化粧品関連情報、会員相互の交流助成に必要な情報の提供
- 3) 関連諸団体との連携・協力による事業
- 4) その他本支部の目的に沿うと考えられる事業

第4条（事務局）

- 1) 本支部の事務局を、幹事会の指定する所におく。
- 2) 事務局は、本支部の事業を円滑に推進するための業務を行う。
- 3) 事務局は、次の資料を保管する。
 - (1) 会員名簿
 - (2) 事業・諸会議記録
 - (3) 会計記録
 - (4) その他の関係資料

第二章 会員（本部規約に準拠）

第5条（会員の資格）

会員の資格は次の通りとする。

- (1) 化粧品に関わる知識・技術・技能を有する次の者
 - ① 化粧品の研究開発、生産技術、製造、販売等に携わる者
 - ② 化粧品原料、香料、材料、製造機器等の研究開発、生産技術、製造、販売等に携わる者
 - ③ 化粧品関連の科学・技術の研究者、学識経験者
- (2) 前項以外の者で支部幹事会において会員として承認された者

第6条（会員の構成及び資格審査）

会員は正会員、準会員、シニア会員、名誉会員で構成され、本支部に所属する者。会員の資格審査は本支部幹事会で行う。

(1) 正会員として承認された者

(2) 準会員

本会事業年度開始日(4月1日)時点において、会員の資格を有する35歳未満の者で、準会員として承認された者。ただし、35歳未満のものであっても正会員として申請し、承認されると正会員になることができる。

(3) シニア会員

本会事業年度開始日(4月1日)時点において、会員の資格を有する60歳以上で、かつ正会員として原則5年以上在籍した実績があり、申請を行い、承認された者

(4) 名誉会員

本支部幹事会が推薦し、本部運営役員会において承認された者

第7条(会員の権利)

- 1) 正会員は、本会が行う全ての事業及び行事に参加する権利を有し、総会における議決権、本会の役員及び委員に選出される権利、及び本会の諸行事に代理を出席させる権利を有する。準会員、シニア会員及び名誉会員は、本会の役員及び委員に選出される権利、及び本会の諸行事に代理を出席させる権利を有しない。この他の権利は正会員と同等とする。
- 2) 本会の正会員、準会員、シニア会員及び名誉会員は国際化粧品技術者会連盟(略称;IFSCC)の会員として登録される。

第8条(年会費)

- 1) 年会費は、正会員は20,000円、準会員およびシニア会員は12,000円、名誉会員は無料とする。
- 2) 本支部事業年度内での途中入会者に対しては、年会費全額を申し受け、当該年度の未加入期間に発行した日本化粧品技術者会誌を全て送付する。途中退会者に対しては、年会費の返却は行わない。

第9条(入退会等及び会員資格の停止)

1) 入会

本会の正会員、準会員として入会を希望する者は、所定の様式にて、原則、会員2名の紹介者を得て、本支部事務局へ入会申込書を提出し、本支部幹事会の承認を得るものとする。また、シニア会員として再入会を希望する者は、正会員、準会員と同様の手続きを必要とするが、会員2名の紹介者は不要とする。

2) 退会

本会を退会しようとする正会員、準会員およびシニア会員は、所定の様式にて本支部事務局へ退会届を提出する。

3) 入退会の公示

本支部の、正会員、準会員、シニア会員の入退会は、本支部総会資料に公示する。

4) 会員区分の変更

正会員、準会員、シニア会員が別の会員区分に移行を希望する場合は、3月1日から3月31日に限って、その申請を本支部事務局に行うことができる。

5) 所属する支部の異動

本会の会員はその所属する支部を変更することができる。その際は、「支部間異動届」を提出しなければならない。

6) 資格の停止

本会の運営に著しく支障を与えると判断される時や、会費の納入が1年間滞った時は、本支部幹事会の議を経て、会員の資格を停止することができる。

第10条(会員及びIFSCC会員資格の喪失)

本支部の幹事会で会員資格を停止され、本部運営役員会で承認された者は、本会の会員資格およびIFSCC会員資格を同時に失う。

第三章 総会

第11条(総会の招集、成立)

本支部の事業年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

本支部定例総会は毎年1回期初に幹事長がこれを召集し、会員の委任状を含め 1/3 の出席をもって成立する。

また、必要に応じて幹事長は幹事会の議を経て、臨時総会を招集することができる。

第12条(議決)

本支部総会の議決は、出席会員の過半数を持って決する。

第13条(総会の付議事項および報告事項)

「付議事項」

次の事項に関しては、本支部総会に付議し承認を得なければならない。

- 1) 規約の制定または改廃
- 2) 事業計画及び予算案
- 3) 決算及び会計監査報告
- 4) 改選時における推薦幹事
- 5) 本支部の解散または重大な組織の変更

「報告事項」

次の事項に関しては、本支部総会に報告するものとする。

- 1) 改選時における投票幹事及び常議員の報告
- 2) 事業報告
- 3) 入・退会の報告
- 4) その他

第14条(決議の公示)

本支部総会の決議事項は、文書をもって会員に公示する。

第四章 役員および会議

第15条(機関)

本支部に下記の機関を置く。

- 1) 幹事会
- 2) 常議員会

第16条(幹事会の責任と権限)

幹事会は総会の決議事項を執行し、本支部の事業に関する企画・立案およびその実施運営について責任と権限を持つものとする。

第17条(幹事の選任と任期)

幹事は正会員の中より若干名を選任し、任期は2年とする。ただし、再任は妨げない。

第18条(役員および委員)

幹事会に次の役員および委員を置く。

役員: 幹事長1名、副幹事長若干名、会計幹事2名

委員: 学術、渉外、総務、教育・研修の各担当部会委員若干名

幹事長は本支部を代表し、副幹事長は幹事長を補佐し、幹事長事故ある時は、副幹事長がこれを代行する。

幹事長は必要に応じ、幹事長、副幹事長、会計幹事で構成される三役会を招集し、幹事会への議案の作成および会の運営に関する討議にあたる。

委員は、各担当会務を担当する。

第19条(役員および委員の選出)

役員および委員は、幹事の互選および推薦による。

第20条(本部役員推薦委員会)

投票幹事は本部の役員推薦委員会の委員となる。

第21条(幹事会の招集・成立・議決)

幹事会は、必要に応じ幹事長が召集し、構成人員の過半数をもって決する。

第22条(常議員会の任務)

常議員会は、幹事会の諮問機関として役員意志を反映させた学術および諸行事の企画案を幹事会に答申し、またその運営にあたって幹事会に協力、活動するものとする

第23条(常議員の任命と任期)

常議員は、会員の中から若干名を幹事会が選出し、幹事長が任命・委嘱する。任期は2年とし、再選を妨げない。

第24条(常議員会の招集)

常議員会は、必要に応じて幹事長が招集する。

第25条(相談役・顧問)

本支部は、幹事会の議を経て、会員の中から相談役・顧問を置くことができる。

第五章 会計

第26条(運営資金)

本支部の運営資金は、年会費、本支部が行う事業収入、並びに臨時会費等による。

第27条(会計年度) (本部規約に準拠)

本支部の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第28条(会計監査)

幹事会は会員の中より2名の会計監査委員を選出する。

第29条(資産・収支管理)

本支部の資産管理および会計収支については、幹事会が責任を負うものとする。

第30条(予算・決算)

- 1) 本支部の予算は、会計幹事が作成し、幹事会の議を経て総会に提案し、承認を得なければならない。
- 2) 本支部の決算は、会計幹事が作成し、会計監査委員の監査を受けたのち、幹事会において確認し、総会にて承認を得なければならない。

第六章 付則

第31条(規約の改廃)

本支部の規約の改廃は、幹事会の議を経て、総会の承認を得るものとする。

この規約は平成19年4月1日より施行する。

- ・一部改正(会費)昭和52年11月21日(総会)
- ・一部改正(会費)昭和56年12月4日(総会)
- ・一部追改正(第二章11条)昭和58年12月2日(総会)
- ・一部追加(第四章27条)平成9年12月17日(会計)
- ・一部改正(第四章27条)平成9年12月17日(会計)
- ・一部改正(第2, 6, 9, 19, 24, 26条)(目的、加入手続き、日本化粧品技術者会との関連、常議員会の招集、会計年度、施行期日)平成11年12月3日(総会)
- ・全面改正 平成12年12月8日(総会) (組織変更(東京支部)に関連して改正)
- ・一部改正 平成16年4月16日(総会) (会員制度改定に伴い改正)
- ・一部改正 平成19年4月20日(総会) (本部規約改定改定に伴い改正)
- ・一部改正 平成19年5月15日(本部総会)

(正会員の年会費値下げ;本部専決事項で準拠、但し実施は平成20年度より)

日本化粧品技術者会 東京支部細則

総会

1. (総会の通知)

総会は、開催日前に日時・場所・および議題を文書にして会員に通知しなければならない。

2. (総会の議長)

議長は、総会において選出する。

会員

3. (会員の変更) (本部細則に準拠)

正会員が異動などの理由により会員であることができなくなった場合は、「退会届」を提出する際に、後継者を指名することができる。この場合、後継者は新たに「入会申込書」を本支部事務局に提出し、本支部幹事会の承認を受けるものとする。

その際、退会する者が年会費を既に支払っている場合は、後継者には同一年度での年会費は新たに徴収しないものとする。

幹事

4. (幹事の選出)

立候補及び幹事会推薦候補者により10名以上の被選挙人名簿を作成し、全会員に配布する。

投票幹事は、被選挙人名簿により1社1名の連記投票を行い上位10名を選出する。開票に当たっては選挙管理委員が立ち会う。

推薦幹事は、投票幹事の協議により、残る定数まで選出し、総会において承認を得る。

5. (幹事の定数)

幹事の定数は、幹事会において定める。

なお、幹事は、1社1名を原則とし、必要に応じて増員することができる。

6. (被選挙権)

正会員は、被選挙権を有する。

準会員、シニア会員、相談役・顧問は被選挙を有しない。

7. (幹事の欠員補充)

幹事に欠員が生じた場合の補充については、幹事会がこれを必要と認めた場合、前任者の残任期間に限り幹事会の推薦による幹事をこれにあてることができる。

8. (選挙管理委員)

選挙管理委員は、幹事会が選出し、定員は3名、任期は3年とする。

常議員

9. (常議員)

常議員は、1社1名を原則とし、必要に応じて増員することができる。

常議員に欠員が生じた場合の補充については、幹事会がこれを必要と認めた場合、前任者の残任期間に限り幹事会の推薦による常議員をこれにあてることができる。

部会

10. (部会の設置)

本支部の事業を推進するため、学術部会(A、B)渉外部会、総務部会、教育・研修部会を置く。

11. (部会の構成、選任)

各部会は、幹事及び常議員若干名を含む委員より構成される。

各部会の部会長は幹事長が幹事の中より任命する。

各部会に所属する委員は幹事会が選出および各部会推薦者で、幹事会において承認された者で構成される。

12. (部会の任務)

各部会は、本会の行事・実務の企画・立案を行い、幹事会に提案し承認を得る。

各行事の開催・実務の遂行に当たってはその中心を担う。

各部会は以下を担当する。

学術部会A:学術講演会、および支部総会講演会の担当

学術部会B:研究会担当および若手技術者の活性化施策

渉外部会:技術見学会および関連団体との交流担当

総務部会:支部総会担当および本部総会の補佐

教育・研修部会:化粧品技術基礎講習会担当

13. (部会の招集)

部会長が召集する。

役員、その他

14. (相談役・顧問)

幹事会は、相談役・顧問を本支部に対する功労者および有識者・学識経験者の中から推薦し本人の承諾を得て委嘱する。

各役員の役割は次の通りとする。

- 1) 相談役:本支部の運営について幹事会の諮問に応じる。
- 2) 顧問:本支部の目的達成のため、その事業に協力する。

相談役・顧問の年会費は無料とする。

15. (臨時会費)

本支部は幹事会の議を経て、総会の承認を得、臨時会費を徴収することができる。

本細則は平成19年4月1日より施行する。

- ・一部改正(細則3, 4項;幹事の選出、幹事の定数) 平成11年12月3日(総会)
- ・追加(細則7, 8~12項として選挙管理委員、常議員、部会) 平成11年12月3日(総会)
- ・全面改正(組織変更(東京支部)に伴い改正 平成12年12月8日(総会)
- ・一部改定(会員資格制度変更に伴い一部改定) 平成16年4月16日(総会)
- ・一部改定(本部規約改定に伴い一部改定) 平成19年4月20日(総会)

編集後記

日本化粧品技術者会東京支部が創立60周年を迎えました。ある時、イベント企画会社の方から言われたことがあります。「こんなに仲の良い業界は他にはありませんね」と。これも60年あゆみ続けた技術者会の姿をよく物語っています。

今回、2003～2007年(平成15～19年)の技術者会東京支部のあゆみを編集するにあたり、諸先輩が築き上げた60年の歴史を継続的に後世に残すと同時に、会の発展に向けての提言や会員調査などを企画いたしました。

編集委員会としては、基本的な構成は前回(55年記念誌)を踏襲しつつ、薬事法に係わる規制と化粧品業界について東京化粧品工業会の高野さんから、また、初めての試みとして早稲田大学人間科学部長の齋藤美穂先生に寄稿をお願いいたしました。また、会員アンケート調査からみる意識調査について常議員プロジェクトチームにまとめていただきました。

さて、この5年間の化粧品業界を振り返ってみますと、企業の再編やメガブランド構想など私たちを驚かせる大きな出来事がありました。しかし、業界の国内市場規模は伸び悩み、大量消費の時代が終わり「今、この瞬間の感動を共有できる商品」がヒットする時代になったことを痛感します。齋藤先生の寄稿文の中にもありますように、化粧品の持つところへの働きかけは社会学的、心理学的意義も大きく、そして医薬品とはひと味違った“人の美しさ”への貢献がますます期待されます。

最後になりましたが、今回の執筆の依頼に快くお引き受けいただき、ご協力いただいた関係各位に編集委員を代表して深くお礼申し上げます。

(余白のカット写真に身近な野山から次第に消え行く野生ランの可憐な姿を載せました。人と自然の共生を願いつつ・・・)
(委員長：熊谷 重則)

60周年記念誌編集委員会 (50音順)

石田 賢哉 小名木 稔 川島 勝郎 熊谷 重則 小暮 つた枝
小林 達朗 谷口 秀明 佐藤 隆三 前澤 大介 村上 泉子 吉永 幸浩
武田 悟(事務局)

2008年3月25日発行

日本化粧品技術者会東京支部 60周年記念誌

56年～60年のあゆみ

(非売品)

発行人 松尾 透

発行 日本化粧品技術者会東京支部

東京都港区六本木5-18-17 化成品会館内

TEL:03-3586-0775 FAX:03-3586-0833

印刷 株式会社 八紘美術
